

77-292

文學士加藤玄智著



通俗東西比較宗教史

東京 有朋館發行

序

本書は余が時々講義録や又は講習會の席上などで、宗教學研究の材料として講じたもの、草稿であるが、往々聽講者諸君から参考書として可成平易の文辭に寫して是非出版してくれとの督促が切である爲め、止む無くそを一纏にして上梓したのである。然れば従つて不完全の點多きは豫め讀者の諒恕を請はなければならぬのである。實は這種の著書はソーセイ氏が嘗て試みられた様に、専門々々の學者が各手別して、或は佛教とか或は基督教とか或は婆羅門教とか或は猶太教とか云ふ様に講述したならば、或は完全の域に達するにちかからうかと思ふのである。が、我國學術界現今の状態は、中々そこ迄進んで居らないと云ふことは、返す々々も残念なことである。然し又物には一得一失の伴ふものであつて、専門の學者が各自手別してやると云ふこと

になれば、又全篇自ら統一を缺くの恐があるのは免れないのである。然れば、今本書の如き性質の書物が、一人の手に成つたのは、以上の事情から見て、又止むを得ない時勢の産物であらうか。して又余は佛基兩教の比較叙述に於ては、世人が往々陥り易い危険を免れて、基督教にも偏せず、佛教にも黨せず、又何等の制肘をも他から蒙ること無く、極めて公平に極めて自由に筆をやることを得たと信ずるのは、余の大に快く思ふ所である。又本書の成るに當つて、這種書物の性質上特に内外斯道の諸先輩に對し、負ふ所の多かつたことは、余の深く謝恩の辭を呈する所以である。今や本書の出版に際して、以上數言を述べ、本書の出來を記して序文と致しておきます。

明治三十六年八月

函嶺の湖畔にて 加藤玄智 識す

通俗 東西比較宗教史目次

第一章	宗教の起源とその發達の形式	一
第二章	埃及宗教の概況	三
第三章	バビロニアとアッシリアの宗教	四
第四章	猶太教の起源及びその發達	四
第五章	波斯の二元教	五
第六章	基督教の發達其一	七
第七章	希臘の神話的宗教及其の哲學の影響	一〇
第八章	羅馬帝國內に於ける諸宗教の混化	一〇
第九章	北歐民族の宗教	一五
第十章	基督教の發達其二	一六
第十一章	回々教の一瞥	一七

第十二章 基督教の發達共三……………一八九

第十三章 佛教以前の印度宗教……………三二

第十四章 釋迦の佛教と印度に於ける佛教の發達……………二四六

第十五章 支那古代の宗教と儒道二教の發達梗概……………三〇一

第十六章 支那佛教の發達と儒道二教の關係……………三一九

第十七章 西藏佛教の特色……………三五五

第十八章 日本の古代宗教概観……………三五二

第十九章 日本佛教の發達と神道儒教……………三五六

第二十章 結論……………三六八

目次終

東西比較宗教史

文學士 加藤 玄智 著

第一章 宗教の起源とその發達の形式

宗教の起源即ち宗教は、どうして世に現はれて來たものであるかと云ふことの說明に就いては學者の間にも色々説があつて、その解釋は區々に分かれて頗る一致をとならない風が見える。獨り學者の間に種々異論があるのみでなく、古來から宗教家の考と學者間の説とは餘程違つてをる様に思はれる。してその學者の間に於ても極めて獨斷的に自己の空想や、通り一片の想像即ち揣摩憶測からして宗教の起源を論ずる人と、専ら宗教史や宗教學の輔を藉りて科學的——則批評的と云つてもよいが——に宗教の起源を探らうとしてをる人の説とは餘程相違がその間にある様に思はれる。そこで自分は假りに今宗教の起源を論定して見様とするに、彼の宗教家の見解を以てしたり、又は獨斷的非科學的、非批評的に自己の空想憶説と云ふ様なことがらばかりから説を立てた説明法を、假りに宗教の起源を論定する獨斷的説明法と名け、之れに反して宗教史や宗教學の研究の結果、曲りなりにも確乎たる事實に徴して宗教の起源を説明しやうとする所の宗教の起源を論ずる

學説は自分は假に之れを名けて宗教の起源に關する科學的説明法又は批評的説明法と云ふと思ふ、また或は前者を宗教の獨斷的起源説と呼び後者を宗教の科學的若くは批評的起源説と云ふても差し支へなからうと思ふ、そこで先づかう假りに宗教の起源に關する説明法を二た通りに分類してをいて、扱てその宗教の獨斷的起源論から説明を初めやうと思ふ、然し固より宗教の獨斷的起源説なる者は今日では學説としては餘り價值のあるものではないが、十九世紀以前迄は中々此の説が勢力もあり宗教家の永く固執してをった説もその中に含まれてをるのだから、その説の意味とその説が果してどれだけの眞理を含んでをるかと思ふことを一言して置かなければならない、してまた此の宗教の獨斷的起源説と云ふものの中には、大に下の三種の説明が含まれてをるものである、曰く宗教を以て神佛が人間に與へてくれたと云ふ説即ち別の語で云へば宗教の起源は神佛に在りと云ふ説と、之れと全く正反對で宗教をかやうに人間以上の神佛の様な神聖なえらいものから起つたとせずして、却て宗教は人心の狂いから起つて來たものとなし、宗教信者は畢竟正氣の沙汰ではない、一種の氣狂ひである宗教は、人心の病的産物である、人心の變態であるとかう云ふ所の説と、斯く宗教の起源を人心の變態と迄極端に云はないにしても、宗教は國王が人心を統一して世を治める道具に使つた所から起つたものだ、宗教は畢竟政治の方便にする爲めに起つたものであると云ひ、或

は又僧侶と云ふ一階級の遊民が己れの衣食住の資を得んが爲めにあゝ云ふそらごとを案出して來て、それを人民に教へこんだからして、そこで宗教と云ふものが出來て來たのであると云ふ、畢竟宗教の起源は國王僧侶の方便から生れ出たものだ、と云ふ宗教方便説とである、そこで自分は今下にざつと此の三種の獨斷説に就いてその説明と批評とを簡單に述べて見やうと思ふ。

そこでその第一である宗教の起源は神佛に在りと云ふ宗教の神佛起源説と云ふのはどうであるかと云ふに、それは文字の示めしてをるが如く、宗教の起源は神とか佛とか云ふ人間以上の大威力者全能力者があつて、それが今日云ふ佛教とか基督教とか云ふものを宗教として造りて、人間に賦與してくれたのである、それであるから宗教の因つて起る所は、一に人間以上の大能力者たる神若くは佛と云ふ様なものに在るのだと云ふ説である、これは頑固なる基督教徒や佛教徒の口にする所の説であつて、宗教の起源を説明する科學的説明法としては半文錢の價値もない、極めて獨斷的な考へてある、此の説は宗教の起源を説明しやうとして、之れを神佛の不思議力に歸して、その説を立てるのであるから、それは宗教の起源を説明しやうとして、却て先づその所謂神佛の存在からして吟味してかゝらねばならぬ、則ち元來さう云ふ宗教を吾人に與へてくれた神佛なるものがあるかどうか、若しさう云ふ神佛と云ふやうなもの有無がしつかり分らないときには、その神

佛に托して宗教の起源を説明すると云ふことは、少しも根據の無いことゝなつてしまふのであるから、神佛のやうな吾人の經驗以上の存在者をたよつてそれて以て宗教の起源を説明しやうと云ふのは、經驗を重んずる科學的思想の能くするを得ない所のものであつて、従つて宗教學と云ふ一種の科學上に宗教の起源を説明する所の説明法としては、採用することの出来ない學說と云はなければならぬ。それであるから、宗教學者は宗教の神佛起源說には賛成出来ないのである。して見ると、宗教を以て人間以上の神佛から與へられた神與の天恵と考ふことが出来ないとするれば、次ぎに宗教を以て人心の正態で無い、變態から起るのである。宗教信者の精神は既に狂つてゐるので正氣の沙汰とは云へないと云ふ説が起つてくるのであるが、是れは近世でフオイエル、パツハ及びマックス、チルナ、ニーチエ等がその代表者であります。此の説は全く前の宗教の神佛起源說とは正反對であつて、宗教の神佛起源說であつてみると、宗教の起源を以て人間以上のえらいものとなすのであるし、之に反して宗教を以て極下等な人間わざで造つたものゝ中で、一層單い狂亂心の作用とするのであるが、是れ又宗教の起源を説明するに足る正當な見解と云ふ譯にいかないのである。それと云ふのは宗教を以て若し論者の云ふが如く等しく人心の變態から起つたものであつて、宗教信者は皆な重かれ輕かれ一

種の精神病者であるとしたならば、それこそ世界全體十中九分九厘迄の人類は皆な何にかの宗教を奉じてをるものであるからして、畢竟全世界の人類は皆な癡癡病院の狂者と同一な仕格になつてしまふ譯けて、この世界の人類社會は皆な狂人の寄り集りとなつてしまふのである。然し是の説は到底吾人の常識と相容れざる所の説でありまして、吾人は到底人類の殆んど全體を目して狂者である。癡癡病院の患者と同じものであるとはどうも考へることが出来ない。吾人は吾人の一舉一動は皆な精神病者の爲す所のものと同一であると思ふ譯にいかない。成る程多くの宗教信者の中には例之ば印度人の様に宗教中毒に罹つてしまつて、所謂人心の變態になりかゝつた人類もあらう。又我が國でも寒中素裸體で垢離をとつたり、腐つた御水を飲んで病氣が平癒する様に思つてをつたり、一派の日蓮宗の信者や、とうかみ講者連などが、噪ぎ立てる有様は、宛然半狂者の様であるけれども、しかし又世界人類の多くの中で基督教や佛教の高尙健全なる道德主義に依りて、行住座臥日々夜々の行爲舉動を律していくものは、決して少くない。是れ等は決して狂人でもなく癡癡者でもない、正當な健全の人間である。してみれば、是れ等の基督教徒や佛教徒は基督教なり佛教なりの一つの宗教を奉じてをつて、それに由りて健全なる人間として世に立つてゆくのであるが、是等の基督教徒や佛教徒を擧げて等ぐそが宗教を信ずるの故を以て狂人である精神病者であると排斥してしまふ譯

けにいかないだらうと思ふ、然るに宗教は一切人心の變態から起つたものである、狂人の言であるとかう云つてしまつたならば、則ち宗教の變態的起源説を取るとするならば、如何なる健全なる基督教信者も、佛教家も、等しく皆な狂人にしてしまはなくてはならん様になる、これは實に不都合千萬な説と云はなければならぬ、又吾人は耶蘇や釋迦を以て狂人と云ふことは出来やうけれども、耶蘇や釋迦は古今東西の偉人大聖人であるところを云ふことは出来やうけれども、耶蘇や釋迦は狂人であるとかう譯にはいかなないのである、して見ればどうも宗教は人心の變態から起ると云ふ學説はどうも正當でないと思ふ、その正當でないことは、世の宗教家なるものが、濫に宗教を神聖なものにしやうとする爲めに、宗教の起源を以て神佛に在りと説くことの不正當なるのと、一般であらうと思ふのである、以上は、宗教は方便から起つてくるのである、換言すれば國王とか僧侶とか云ふ者が、或は國家を能く治めて四海泰平の恩波に、その人民を沐浴せしめやうとして、假に人民の恐怖心を利用して、巧に神なるものを捏造して來つて、こゝに宗教と云ふものが出來たのであり、又或は僧侶なる一部の遊民が自家の私利を貪らんが爲に、佛とか神とか云ふ様な繪空事まぼこを巧にこしらへ出して、かくして人民の恐怖心を利用して、金銀財寶を得んとする方便手段に供する所からして、此に宗教と云ふものが世に起つて來

たのである、して見れば宗教と云ふものは國王なり僧侶なりと云ふ様な、一部の人が或る自分の目的を達せんが爲めに用ゐた手段方便に過ぎないものであつて、此の手段方便からして宗教と云ふものが初めて起つて來たのであると云ふ、宗教の方便的起源説を主張する學者も少く無かつたのである、この主義の學者は希臘の詭辯學者や英國のホップス等である、然し是又決して正當な見解とは云はれないのである、宗教は決してその宗教を信する信者の精神には何等の根底もなく、獨り手づま使が、瓢箪から駒こまを出したり、灰吹ばいふきから蛇へびを出したりする様な風に、突如として他人から製造されて與へらるゝものでない、如何に國王や僧侶が氣張きぢやうたからと謂つても、人民の方に少しもそを受け納れる素とがないならば、到底宗教は生じて來ないのである、それは頭あたまつから丸で國王僧侶の方便にも使用することが出來ないのである、論者か國王や僧侶が人民に恐怖心のあるのを利用して、そこから自家の私利經濟の具に供せんが爲めに、宗教を案出したと説くが、その見解に従つても、單に國王僧侶が方便として宗教を考へ出したばかりでなく、その宗教を人民に信ぜしめる様にしたのは、人民に元來恐怖心なるものがあつて、その恐怖心に乘じて神や佛のことを話して聞かし、さうして人民をして一つの宗教を信ぜしめる様にしたのであると云ふではないか、して見れば此の宗教なるものは國王僧侶が或る自己の都合のよい目的を果たさんが爲めの手段方便に使用したものであるとし

ても、その手段方便を施す爲めには何にか土臺となるものがなくてはならぬ、その土臺となる基礎は論者の言に従つて考へて見ても、その所謂恐怖心なるものが人民の腦裏に深く印象されてあるからの事であつて、此の所謂恐怖心なるものが却つて宗教の大淵源となるのではあるまいか——最もホツプスも此の吾人の恐怖心からして主觀的には宗教の生ずることを説いてをるが——則ち人民等の心の内に深く恐怖心なるものがあつて存するからして、こゝに外部から國王なり僧侶なりが神なり佛なりのごとを云ふて聞かし、さうして初めて宗教と云ふものがそこに成り立つのではあるまいか、人心に何等の宗教上の根底のないものは所謂縁なき衆生であつて、到底宗教を興へてやる譯にはいかなないのである、斯くの如くに考へて見ると云ふと、宗教の起源は國王僧侶の方便手段に在ると云ふよりは、寧ろ人心の自然に淵源してをると云つた方が適當であらうと思ふ——それは縱令恐怖心にしろ何にしろ——實に自分の見る所では宗教は人心固有の本性に淵源してをるものであつて、人性の必然に起因するものであらうと思ふ、宗教は決して一時の方便や手段で出来たものではない、千万世を経ても決して變はらない所の、人心の固有の本性から滾々として湧き出してくるのである、惟ふに佛教と云ひ基督教と云ひ千數百年間歐亞の人心を支配して、その勢力衰へたりと雖も、尙今日替るものなき所以のものを見ても、決して宗教が一時間に合はせの某々人士の奸計術

策から割り出された方便手段と見ることは出来ないのである、して見れば宗教の起源を以て國王僧侶の方便に歸してしまふ所の、宗教の方便的起源説は、到底正當なものと思ふ譯にいかないのである。

以上論じて來た所に由りて之れを考へて見るに、宗教の起源を以て或は神佛の啓示、現に在りと云ひ、或は人心の變態に淵源するものであると云ひ、或は國王僧侶の方便に由ると云ふ説は、何れも正當なものてなく、皆な事實を盡してをらない、非科學的な獨斷論であらうと思ふ、して見れば以上の諸説は皆な何れも宗教の起源を説明するに足る正當な學説でないとする以上は何れの學説が宗教の起源を説明するに足る正當な學説であらうか、是れは尙ほ更らに一層の研究を要するものであらうと思ふ、然し兎に角以上の諸説は或は宗教家の空想や、或は哲學者の架空談から割り出した宗教の起源説であるが、之れに反してその學説が皆なが皆な正當に宗教の起源を説明してをる十分の學説だと云ふ譯にはいかぬけれども、兎に角以上の如く宗教家の空想や哲學者の架空談でなくつて、多少確實なる科學的事實に徴して宗教の起源を説明しやうとしてをる學説が二三あるのである、然れば之れを自分は前に哲學者の空想や宗教家の架空談から宗教の起源を説明する學説を、宗教の獨斷的起源説と名づけたのに對して、宗教の科學的起源説と稱したのである、そこでこれからは宗教の科學的起源説の種類を擧げて、その所謂宗教の科

學的起源説とは如何なるものであるかと云ふとを説明して見やうと思ふ、偕て自分がかゝつて宗教の科學的起源説と云ふたもの、中にも、色々種類があつて、先づ咒物崇拜、精靈崇拜、トテム崇拜、天然崇拜の如きは、皆な各々宗教の起源をなすと稱せられてをる學説であるが、自分は先づ是れ等の崇拜と云はれてをるものは果して何にものであるかと云ふことからして説明を試み、尙ほ進んでそれ等が果して能く宗教の起源を説明するに足る十分の學説であるかどうかと云ふことを吟味して見やうと思ふ。

咒物崇拜即ちフエチシズムと云ふのは又一名之れを庶物崇拜とも云ふのであつて、世に所謂拜物教である、則ち之れは亞非利加の黒人の間に多く行はれてをる宗教であつて、奇麗な色の鳥の羽や、海岸に落ちてをる貝殻や、石や、木の切れはぢ又は屑の様なものを以て、一種の咒力即ち靈力がその中に存してをると考へて、さうしてそれを存に崇拜する所の一種の宗教に名けた所のものである、我が國で水天宮の御符を崇拜し、成田山の御守ふだを尊び御洗米を有り難がるなどは矢張り一種の咒物崇拜である、則ち咒物崇拜と云ふのは重に人工を加へない極めて小物躰である鳥の羽や、木石の切れはぢ等に、一種不思議の靈力即ち魔力又は咒力が具はつてをると考へて、その物躰の中に假りに宿り托されてをる靈妙不可思議の魔力を崇拜するものを指して、かく名けたのである、又世には男女の生殖器を神躰として崇

拜するのがあるが、是れも二の咒物崇拜であるが、之れは別に生殖器崇拜の別名が存してをる、然るに精靈崇拜即ちスピリチズムと云ふのは、宇宙間に無数の名も知れない靈魂精靈と云ふ様なものがあつて、各所に出沒隱見し、山に憑りては山の靈となり、樹に入りては樹の靈となり、川に潜んでは川の靈となり、又是れ等の山や川や樹を能く容易に脱却して、自由に宇宙間を飄遊して歩らくとを得るものであると考へて、その精靈を崇拜するもの、こゝに是を精靈崇拜と云ふのである、それであるから死んだ先祖の靈魂を崇拜するのは一種の精靈崇拜であつて、之をアンセスター、ゴースツ、即祖靈崇拜又は祖先崇拜と云ふのである、日本の神道は一部祖靈崇拜である、然るに、又トテム崇拜即トテミズムと云ふのがある、是は亞米利加の土人の中に多く行はれてをる所の宗教の一種であつて、狼とか熊とか狐とか鱒魚とか云ふ様な動物を崇拜するのであるが、然しその動物を單に動物として崇拜するのでなくつて、その動物はそれを崇拜する種族と血統關係を同うし、つまりその種族の祖先はその狼なり熊なり狐なり鱒魚なりの血統を傳へてをつたものと考へる、尙手近かに云へば、その種族の祖先は血統上それ等の動物から出てをると、かう信じてその動物を崇拜するのを、トテム崇拜と云ふので、此種崇拜の對象である動物をトテムと稱するのである、我國にては北海道のアイノが熊祭りとして年々熊を祭り、さうして熊祭をした後で、生れてまだ暫くしかたゝぬ稚熊を刺殺し其血を分

けて一部族の祭者皆なそれを啜するるのであるが、あれはトテム崇拜の適例である。かやうにその熊の血を啜すると云ふのは、その種族がその祖先と血統關係を絶たぬつもりのあるのである。日本の古代に於て鳥、土蜘蛛など云ふ者があり、神武東征の際には八咫鳥が御先導申し上げたりしたことが見えるが、あれはトテムと深い關係がありさうに見える。又日本の職人が昔は身体に刺身をして龍の形などを畫かしたのもトテム崇拜の遺物であらふと思ふ。此トテムは動物を用うるのが多いが、稀には植物の一種をも用ふる人種もある。終に天然崇拜と云ふのは日月星辰山川樹林より雲や風雨や雷霆や海や獸に至る迄一切是れ等の天然物を崇拜するのを指すのであつて、その日月星辰樹林等の活動を目撃して、直ちにその活動の奇妙にして偉大にその神變不可思議なる眞個に人力の及び難きものあるに驚かされて、そこで是れ等の天然現象を人間以上の大威力者、大活動者、大靈物と考へ、それを神視し崇拜するものを名けて、天然崇拜と稱するのである。

以上説明した様に、或は咒物崇拜或は精靈崇拜或はトテム崇拜或は天然崇拜は、皆な之れを今日に發達した佛教や基督教に比べては劣等な宗教に相違ないが、學者各々の見る所に由りて是れ等の諸宗教の一を以て最も古い宗教であると説き、各々の見る所に従ひて自説を主張してをる様であるが、自分も亦今之れに關して少しく研究した結果を、左に逐次述べて見やうと思ふ。

借て前に説明してをいた或は咒物崇拜とか或は精靈崇拜とか祖靈崇拜とか亦或はトテム崇拜とか或は天然崇拜とか云ふ様な宗教の諸形式は、何れも原始的の宗教であつて佛教や基督教など云ふ諸宗教の由りて起つてくる淵源で、まだ發達をしない極めて幼稚な宗教であるに相違ないが、是れ等の諸宗教中その何れが最も原始的であらうか、その中の何れが最も古い宗教であらうかと云ふことに就いては、學者によつて説か一致してゐない様である。例之ば英國のタイラー氏の如きは精靈崇拜(氏自らは之れをアニミズム即ち生氣崇拜と云ふてをる)を以て最も古い宗教の形式だと云ひ、英國のハーバート、スペンサー氏は祖靈崇拜を以て最も早く現はれた宗教の形式だと云ひ、獨逸のハルトマンや佛國のレネ、ユル氏や、獨逸人であつて、永く英國に住して、東方聖書と云ふ支那や印度や波斯等の宗教の書物の出版や翻譯に終生を委ねられ、さうしてついで此の間死なれ、後では日本の大學で其遺書を悉皆買ひ取つた、マックス、ミュラー氏の如きは、天然崇拜を以て宗教の最も古いものであると云ひ、又少し之れと違つてロバートソン、スミス氏の如きは、トテム崇拜を以て宗教の最も原始的なものであると云ひ、諸學者に由りてその説は中々一致してをらぬ。然し咒物崇拜を以て宗教の最も古いものであるとする學説は、一時勢力があつたが最早や今日では全く無くなつた様である。ハルトマンやマックス、ミュラーやブライデラーの諸名士は、皆な此の咒物崇拜を以て諸宗教の起源

とする説に反對を稱へてをつて、咒物崇拜は寧ろ後とから現はれて來た宗教だと云つてをる。然しブライデラーの如きはその名著宗教哲學に於て、その初版では天然崇拜を以て一切宗教の起源としてをつたが、その最近に出版した第三版では祖靈崇拜と天然崇拜との此の二つを以て一切宗教の原始的宗教の形式となし、その何れか一を以て原始的宗教の最古のものとするこの寧ろ不穩當であると云ふことを説いてをる。かう云ふ風に宗教の何れの形式が最も古るものであるかと云ふことは、學者の中にも餘程異説があることと、且つは同一學者でもブライデラーの様にその見解が前後違つてくると云ふ様な有様であるから、中々一朝一夕にはきめられない事柄であらうと思ふ。そこで自分は今この問題を解決するに當つて、人類學的方面からと心理學的方面からとの、この兩方面から考究を試みて見やうと思ふ。

先づ人類學的方面から宗教の起り初めのとを考察して見まするに、ラボツクなどの人類學者がやりました通り、人類の栖息してをつた證據のある時代を地層中の化石に徴して先づ三期に分ちます。則ち石器時代、銅器時代、鐵器時代のこの三時期であります。その中人類が石で造つた矢の根など云ふ様な石造の器具を使用してをりました所の石器時代が最も古く、銅器の使用を知り鐵器の使用を知る様になりました時代が各々そのあとにやつてまいつたのであります。然るにこの遺物上

人類の出ました最も古るい時代と致して御座います。石器時代は更らに之れを小分し、その石の遺物の新しきものと舊るきものとの違に由つて、舊石器時代と新石器時代との兩者に區別致します。そこで宗教は此の石器時代と云はるゝ頃からあつたかどうかと云ふ問題になつてくるのであります。今これを左に少しく説明致しますしやう。

レイニング氏などの研究に由りまして、人類學的にその遺物から研究した丈では、どうも舊石器時代には宗教が存在してをつた形跡が見えないのである。蓋しそれと云ふのは新石器時代の地層になると、所謂幼稚なる宗教の本尊である咒物土偶の様な者が澤山現はれてくるのであるが、舊石器時代の地層になると、是れ等の宗教上の遺物は全く無くなつてしまふのである。それであるからどうも獨り遺物上からのみ考へれば、舊石器時代の人類は宗教をもつてをると云ふことに思はれないのである。然るに新石器時代になると云ふと、原始人類が宗教上の目的に使用した土偶や咒物などが澤山現はれてくる。殊に頭蓋骨（ブライデラー）即ち頭の骨、即ち髑髏に孔を明けたのが、澤山新石器時代の地層から掘り出される。これはレイニング氏などの話では、野蠻人が元來その知識が幼稚であるが爲め、その同族の一人が病氣にても罹つて死んだ時には、何にか悪魔か何にかに憑（ヒキ）たので、身軀中に惡靈邪鬼が這入つたから、それとその同族の中間が病死したのであると、かう考へる。そこ

てその病人死者の体内に宿つた悪魔邪鬼を、体外に追ひ拂ひ、再びその死人を永久の病眠からさましてやらふと云ふ目的で、その死人の頭の骨に孔を穿つたのであると、かう云つてをる、かやうな具合に新石器時代になると、或は咒物或は土偶或は孔の明いた頭の骸骨と云ふ様な、兎に角野蠻人が一種の宗教的目的を以て使用した遺物が續々現れてくるからして、新石器時代の野蠻人は一種の宗教を有してをつたと云ふことは、その遺物上歴々證明し得可きであります。由つて新石器時代の人類の間には、一種の宗教の有つたと云ふことは疑ふ可らざる事實である。然るに之れに引きかへ新石器時代から舊石器時代になりますと云ふと、是れ等の宗教上の目的に使用したと思はるゝ所の證據になる遺物が次第に減少していつて、遂に舊石器時代に至つて全く跡を絶つと云ふ様になるのですから、どうも地層中の遺物丈けを證據にして考察して見ると、舊石器時代にはまだ宗教が無かつたと云はなければなりません。然し此に尙ほ一つ吾人の注意を喚起して置かなければならないとは、成る程かやうなる遺物に現はれたやうな宗教は舊石器時代には無つたにしろ、之れとは違つた何にか一つの宗教は無かつたものであらうか、それとも全く舊石器時代には何等の宗教も無かつたのであらうか、若し假りに舊石器時代に於ては、新石器時代に見る様な遺物として今日に残ることの出来る宗教は無かつたにしても、何等か一種の宗教が既に業に舊石器時代にも現存してをつたとすれ

ば、それはどう云ふ宗教であつたらうか、と云ふと、是れは尙ほ學者の深く考究を要する問題であらうと思ふ。尙ほ又此に一言附け加へて諸君の注意を喚起して置きたいとは、前に云ひました新石器時代に遺物として残つてをる原始的宗教は、所謂咒物とか土偶とか、又は孔をあけた頭骨、即ち髑髏とか云ふものであると云ふことは、前既に説明した通りでありますからして、その當時の宗教は咒物崇拜若しくはその一種である偶像教であると云ふとは明かであるし、又その死人の頭骨に孔を明けたのは、その孔からして一旦遣入つた悪魔邪鬼を放逐しやうと云ふ目的であつたのであるからして、之れに由りて考へてみると、當時新石器時代の蠻人は知識が幼稚ではあるが、兎に角人身に神憑りして、或は疾病を惹き起し、又はその病人致死の原因を致さしめた所の幽霊の如きもの、即ち精霊の存在を承認してをつたのであると云ふことが分かる。つまり別の辭で云へば新石器時代の蠻人は悪魔邪鬼の存在を信仰してをつたのであるから、それは又た精霊崇拜であると云はねばならぬのである。

かやうな工合に人類學的考察に由つて、宗教の起源と云ふことを地層中の遺物からばかり研究すると云ふと、新石器時代から初めて宗教が現れて来て、舊石器時代には全く宗教と云ふものゝ痕跡絶えてなく、さうして新石器時代になつてから初めて現はれ出した宗教は、咒物崇拜か、精霊崇拜である様に考へらるゝが、果して宗

教の起源は新石器時代に初まつたものであつて、且つ咒物崇拜若くは精靈崇拜が宗教の起源であるかどうか、是れ實に尙ほ一層深く吾人の研究を要することであると思ふ、則ちこゝが人類學的考察に補ふに心理學的考察を要する點であらうと思ふ。

抑々吾人の精神は簡單より複雑に進み未發達の狀態より發達した狀態に進み、單純なる現象を想像することからして、次第に進みて複雑なる現象上にその推理力を肆にすることを得るに至るものである、これは何人も恐く一致する所の精神發達の順序であらうと思ふ、して見ると、こゝで第一に攻究せなければならんことは、新石器時代の遺物上に現はれた宗教であるところの、咒物崇拜とが精靈崇拜とが云ふ宗教は、果して原始的宗教の形式中最も簡單なるものであらうかどうか、若し原始的宗教の諸形式の中に於て咒物崇拜や精靈崇拜より一層簡單なる形式の宗教があるとしたならば、その方が咒物崇拜や精靈崇拜より先きに現はれたる宗教としなければならぬ、従つて咒物崇拜や精靈崇拜は新石器時代に現はれてをるが、その咒物崇拜や精靈崇拜より一層先きに現はれた宗教があるとしたならば、その宗教は新石器時代以前に現はれてをつた所の宗教と考へなければならぬのは理の當然である、かやうに考察してくると云ふと、問題は移つて咒物崇拜や精靈崇拜より尙ほ一層簡單なる原始的の宗教があるかどうかと云ふことになつてく

る、然るに事實上さう云ふ簡單なる形式の宗教はあるので、則ち咒物崇拜や精靈崇拜より一層簡單なる形式の原始宗教は天然崇拜の最も幼稚なるものと見ることの出来る活物崇拜即ち活物教——*Therion*博士の辭——である、但し活物崇拜は最も初發の最も具體的な精靈崇拜とも云へるが、別の辭で云へば咒物崇拜や精靈崇拜より一層簡單なる精神作用で以て、生み出してくるとの出来る所の宗教の原始形式は、天然崇拜であらうと思ふ、今少しくその理由を左に述べて見ましやう。

抑々咒物崇拜と云ふのは、咒物として用ふる鳥の羽や石の切れはぢや、木の片かたはの様なものに種々不可思議の靈力が宿つてをつて、その咒力で人間の疾病がなほり幸福を得、悪事を豫知することが出来る、とかやうに思つてをる所の考からして、其不可思議靈力の假りに宿つてをる物體、即ち咒物を崇拜するのであつて、つまりその咒物即ち有形上の物體に托して無形上の靈力即ち咒力——尙ほ云ひ得可くんは神力——を崇拜するのである、我邦にて水天宮の御符を拜み、御護りふだを尊崇するはつまりこの深意であつて、御符なり、御護りなるの木ふだそのものを拜むのも實は物體其ものを崇拜するのでなく、其中に遁入つてをる靈力咒力を禮拜するのである、されば紙切れの内部後方に潜んでかくれてをる荒ら高かなる靈力を崇拜するのである、それであるからこの點から見れば、咒物崇拜は實は拜物教では無く、つて拜靈教である、矢張一種の精靈崇拜であると云ふてもよい、して今かやうな

る物体とその内に潜んでをる靈力とを區別して識り分け、又は物体を離れた無形の靈魂、幽靈である所の精靈などを認識してくる所の吾人の精神力は、中々發達した精神作用である、然るに彼の物体とその中に潜んでをる靈力即ち咒力とか、又は物体を少しも想像せずして純粹に思ひ浮べたる精靈など云ふ思想よりは、二層簡單なる精神作用でもつても、能く彼の活物崇拜の如き原始的宗教は起つてくることが出來様と思ふ、例之ば彼の或は光り加ける日月星辰や、或は轟ける雷霆や、或は颯々の響高き森林や、或はざわ々と鳴り動ける溪流等、是れは一にその儘既に神靈若くは神的活動ならざるはないと考へる所からして、活物崇拜が起るるので、此の例に於てはつまり活物崇拜とは天然崇拜の最も幼稚なものであるが、彼の日とか月とか風とか雨とか雷とか森林とか溪流とか云ふ物体とその背後に潜んでをる所の神との區別をまだつけないうて、一目して是れ等の活動ある物体を神靈であると考へて崇拜するのが活物崇拜である、それは決して日月星辰風雷雨靈森林溪流等の事物と是れ等の中に宿つてをる神靈とを區別してその神がをるからそこで是れ等の物体を崇拜するのではない、是れ等の物体そのものがその儘既に大活動者たり、大威力者たり、大神靈であると考へる所からそれを崇拜するのである、此に於てか之れを崇拜し、之れを供養せなければならぬ、則ち活物崇拜は此に起つて來るのである、であるから活物崇拜に於ては、野蠻人の眼に映じたその儘の物体

——を崇拜するのであるから、その精神作用は之れを前きの咒物崇拜や精靈崇拜に比べて、一層簡單なものであらうと思ふ、何せなれば咒物崇拜や精靈崇拜に於ては、その咒力なり精靈なりの憑りて降り來れる物体と、その物体内に一時宿つた靈魂靈力との兩者をちやんと區別して考へる丈けの、心的能力がなければ起つてくるとの出來ない宗教の形式であるのに、活物崇拜であつてみると左様な小六つかしい複雑な精神作用は入らないで出來るのである、唯目前彼れ野蠻人の五感に觸れてをる高山大川驕陽(日)嫦娥(月)そのものを取りて直ちに神として崇拜することからして起つてくる所の宗教であるから、活物崇拜の方、遂に咒物崇拜や精靈崇拜より一層簡單なる精神作用で出來るからである、是れ今日歐羅巴の有名な學者の間に於ても、咒物崇拜が最も原始的なる宗教であると云ふ説の勢力を失つた所以であつて、之れに反して活物崇拜が宗教の最も原始的形式であると云ふ説が中々勢力をもつてをる所以である、又精靈崇拜の方は少しも物体を假らずに單獨に遊離してをる靈魂を考へるのだから活物崇拜よりは一層抽象的な考へであつて、複雑な精神作用を要するのである、それであるから精靈崇拜も亦最も初めの宗教の形式でないといふことは分かる、祖靈崇拜の如きもハーバート、スペンサー氏は、之れを以て一切の宗教の起源だと説いてをるけれども、中々さうはいかない、之れに對してマックス、ミュラー等は言語學上、古代印度、希臘などの神話に現

はれた、ドヤウス、ピタールとかツオイス、パテールとか云ふ神の名前からして、到底スベンサーの様には祖靈崇拜を以て一切の宗教の起源とするの不可能であると云ふことを證明してをる、それと云ふのは此ドヤウスとかツオイスとか云ふ辭は畢竟天と云ふ意味の辭であつて、これは印度人や希臘人の間に於ける天然崇拜に基いてをるのである、それは決してスベンサーの云ふ如く祖靈崇拜一天張では説明がつかない、強いてやらうと思ふと牽強附會に陥るのである、既に前に云つた通り祖靈崇拜は精靈崇拜の一種であつて、さうして精靈崇拜が最も原始的なる宗教の形式でない以上は、祖靈崇拜が又最も原始的なる宗教の形式でないこと云ふことは、又ことごとしく云ふ迄もなく明かなことであらうと思ふ、然らば次ぎに彼のロバートソン、スミス氏が一切の宗教の起源であると主張されてをる所の、トテム崇拜は如何と云ふに、トテム崇拜も亦之を以て一切宗教の最も原始的な形式であるとは云はれないのである、それと云ふはトテム崇拜に於てはそのトテムとして崇拜する動物なり植物なりと、その種族と血統上の聯絡關係があると云ふことを知りてをらなければ、起ることの出来ない宗教であるから、精神作用の發達が頗る進んだものでなくては思ひ起すことの出来ない宗教であるからのことである、然るに天然崇拜の最も初級の形式とも云ふ可き活物崇拜の如きはそんな複雑な思想の運用は少しも入らないのである、唯目前の日月星辰山川草木を觀て、その有りの

儘の活動に感じて此に起して、くる所の宗教心であるから、トテム崇拜に比して一層簡單であらうと思ふ、それであるから、トテム崇拜よりも活物崇拜は一層簡單なる宗教の形式である、従つてトテム崇拜から見ると一層簡單な精神作用から出来るに違ひない、従つて又トテム崇拜よりも活物崇拜の方が一層早く現はれた宗教の形式と云はなければならぬのである。

以上論じた所を併はせ考へて見るに、兎物崇拜にしる、精靈崇拜——祖靈崇拜もまた——にしる、トテム崇拜にしる、皆な活物崇拜に比しては一層複雑なる宗教の形式であるから、従つて是れ等は皆な宗教の最も原始的なる形式であるてふとは出来ないので、獨り活物崇拜のみ能く是れ等の諸宗教より一層原始的であると云ふことが出来るのである、従つて今日吾人の知り得る限りの知識に照らして之れを考へれば、活物崇拜は先づ以て最も原始的な宗教であると云ふことが出来やうと思ふ、さうなると云ふと、活物崇拜は兎物崇拜や精靈崇拜よりもかは、一層古い宗教の形式であると云ふことになるのであるから、新石器時代に於ては兎物崇拜や精靈崇拜の存してをつた證據があるも、舊石器時代に於ては此兩宗教の存在してをつた證據はないにしる、舊石器時代に於ては或は是れ等の兩宗教より一層古い活物崇拜と云ふ一宗教が存してをつたと想像しても、決して無理ではなからうと思ふ、さうして天然崇拜は兎物崇拜や精靈崇拜と違つて、兎物や土偶や孔の明いた頭骨

の様なものに、その宗教の本尊を求める必要がなくして、直ちに日月星辰山川草木を崇拜するのだから、さう云ふ咒物土偶などの遺物の地層中に残つてをらう筈のないと云ふことは、千萬勿論のことである。従令咒物崇拜や精霊崇拜の様に遺物は存してをらないけれども、舊石器時代に於て、早く既に活物崇拜と云ふ形式の一宗教が在つたと考へても、差し支へないと思ふ。既に舊石器時代の太古から活物崇拜があつたとすれば、宗教は實に遼遠茫漠の昔から存在してをつたものであつて、人類と共に始つた一の人文現象であると云つても、差し支かへないのである。是れ比較宗教の開祖マックス・ミュラー博士が、宗教は世界と共に古るものであると稱嘆せられた所以である。

以上段々と述べて來た所を極要を取つて一言すれば、宗教の起源を研究して、先づ之れを人類學的方面より考察すれば、咒物崇拜や精霊崇拜が最も早く現はれたものゝ如く見え、さうしてこの咒物崇拜や精霊崇拜の現はれた時代は、人類學者が稱して以て新石器時代となす所のものであります。さうして舊石器時代即ち人類の生活をしてをつた證據のある、最も古るい時代を現はしてをる地層の中には、當時宗教の存してをつた遺物上の形跡は又見當らないが、然し吾人の心理上の事實からして宗教の起つてくる有様を考へて見ると、簡單なる精神作用で出来る宗教は、複雑なる精神作用を要する宗教よりも、一層早く現はれたものと断定しなければ

ならないから、此の邊から考へて活物崇拜は咒物崇拜や精霊崇拜やトテム崇拜より一層簡單なる精神作用で出来る宗教であるから、従つて一層古るい宗教と見ねばならぬのである。従つて亦た縱令遺物上から人類學的に舊石器時代に活物崇拜の存してをつたことは分らないとしても、心理學的に吾人精神の簡單より複雑に進むてゝ法則に照して、舊石器時代の咒物崇拜や精霊崇拜は、先きに既に業に舊石器時代からして活物崇拜でゝ一つの原始的宗教の形式は存在してをるものと推斷するのである。してみると活物崇拜が最も原始的に現はれた宗教であると云ふ結論になるのである。尙ほ本章を終るに先つて、一二注意すべき要點があるからそれを附け加へておかうと思ふ。それは外のことでもないが、失つて自分は理論的に分拆して吾人精神の發達が、簡單から複雑に進化すると云ふ法則に基いて、先づ初に活物崇拜ありて起り、之れよりして咒物崇拜や精霊崇拜や祖靈崇拜やトテム崇拜などが起つて來た様に説いたが、是れは純粹に理論の上から分拆的に順序を立て、その發達の次第を述べたからかうなのであるけれども、必しも實際に於てはさうさう順序正しくはいかなない、則ち或る時期に活物崇拜のみ唯一つ行はれ、それから又少し進んだ時期になれば咒物崇拜が初まら、次ぎに精霊崇拜又その次ぎにトテム崇拜と云ふ様な譯に、時の前後を逐つて順序正しく起つて來たのではなく、活物崇拜が先づ起れば忽ち精霊崇拜が起つて來て活物崇拜と精霊崇拜

とは殆んど相密接して分離することの出来ない様な關係に於て現はれてくるものであると云ふことは勿論であらう、それは丁度天然には水素とか酸素とか金とか銀とか鐵とか云ふ純粹の元素と云ふものは遊離して存在してをるとは絶えて有ることなく、皆な複雑な化合物となつて存してをるとが一般でありて、活物崇拜なら活物崇拜が唯一つ單獨に現はれてをると云ふ場合は殆んどないと云つてもよい位であつて、必ず活物崇拜の行はれてをる所には咒物崇拜とか精靈崇拜とかトテム崇拜とか云ふものが併存してをると云ふことは云ふ迄もないことである、例之ば日本の古代の宗教は天然崇拜と祖靈崇拜との混合して現れてをるのである、バビロニア、アッシリアの宗教の如き、支那古代の宗教の如き、天然崇拜と精靈崇拜との合併して現れてをるものである、かやうに宗教の諸形式は實際には色々混合して現はれるのが通例であるが、然しそれを理論的に順序を立て次第を附けてをるの由りて来る淵源を尋ね探つて見れば、先づ活物崇拜を以て最も早く現はれた宗教の形式であつて他の咒物崇拜や精靈崇拜やトテム崇拜等の如き宗教は、之れに繼いで次第に發達進化して來たのであると云はなければならぬのである、是れは實に些細の知れさつた事の様だけれども、大に誤解を防ぐ爲め注意すべきことである、そこで斯く此に一言して置くのである。

私のことゝて云ふた活動崇拜とは前にも云つた通り天然現象即ち日月星辰の様な

ものをその儘活物である大威力者であると、かうして崇拜する天然崇拜もあれば、日や月や天や海等を、その儘神とせず、神はその後方に潜在してをるものであるとかう考へて天然現象を崇拜するものもある、マックス・ミュラーが天の無限を見て、そをそのまま、忽ち神と思ふて崇拜したと云ふ、印度のアールヤ人種の天然崇拜や支那の極太古の天然崇拜は前者の種類に屬する天然崇拜である、然るに其後段々是れ等の天然物と天然物との後方に潜在してをる神力とを別々に考へて、印度のアールヤ人種がドヤトウス、ピタルを崇拜し、希臘人がゾオイスを崇拜する様になり、支那人が天を上帝と呼び、人格的に考へて崇拜するに至つた時は、則ち斯る種類の天然崇拜は、前者の天然崇拜から後者の天然崇拜に近づいて來たのである、然るに自分が活物崇拜を以て、宗教の最も古い形式であると云ひましたのは、則ちハルトマン、レギーユなどの考へてをる通り、前者の場合の天然崇拜の別名であるとか云ふことは勿論である、若し天然崇拜なるものを後者の意味で云ふならば、實證哲學の開祖オーストコントの云つた如く、這種の天然崇拜は矢張り咒物崇拜と云つた方がよくはあるまいか、何せなれば此の場合に於ては、太陽太陰などは畢竟大なる形をした咒物であるからのとである、然るに前者の意味で天然崇拜と云ふことを云ふならば、自分は前に段々用ゐ來つた通り寧ろ、チー博士の命名された如く、ポリノイズム即ち万物活動教又は活物教或は活物崇拜と名けた方が適當で

あらうと思ふ、希臘の古い時代の哲學者は哲學上之れを活物論、ピロソイゾムと云ひました、又タイラー氏の如きは精靈崇拜の事を、アニミズム即ち生氣崇拜と呼んでをつたが、是れは辭の混雜が起るから、アニミズム即ち生氣崇拜と精靈崇拜とは同一の名稱を流用しない方がよいのである、生氣崇拜とはつまり万物が皆な人間と同じ様な生氣(太古の野蠻人はこの生氣の思想より漸次進んで、靈魂即ち余の謂ふ所の精靈の思想に到達するのである、而かも彼れ等は尙ほ生氣靈魂など云ふものを全く無形のものを見ずして、有形的のものとして考へ、吾人の靈魂と呼吸即ち氣息とを同一視してをるのである、蓋し呼吸即ち氣息がなくなれば、人は死するからのことであつて、それで野蠻人には死は人の靈魂が抜け出すと云ふことを意味するのであるのだから、斯かる考へから呼吸即ち氣息と靈魂即ち精靈とを同一視したのである、して此の考は既に神話時代より進んで哲學時代に遣入つても尙ほ存してをる、希臘の古代の哲學者アナキシメネーヌ氏が、世界の原質を空氣即ちアエールと云ひ、してそれを呼吸即ち氣息と同一視し、世界の氣息と考へてをつた形跡があるのは全く太古の生氣崇拜の遺物であるを有ちてをつて、その生氣即ち活氣に由りて千變万化千態万狀の活動を表はしてをるのであると、かう考へて、そこから日月星辰の如きは人間と同じ生氣をもつた活動物であつて、而も人間よりえらい上位に在るものとかう思つて、日月星辰山川草木その者を崇拜するのを、生氣崇拜と云

ふのである、夫れであるから生氣崇拜とはつまりチーレの方物活動教即活物崇拜と同じ意味に使用したらよからうと思ふ、それが最も適當であらうと自分は思ふのである、それをタイラー氏の様に精靈崇拜と同一に用るはよくないのである、然しチーレは生氣崇拜と云ふ名辭を大變廣く用ひて、下は活物崇拜から初めて兎物崇拜精靈崇拜トテム崇拜天然崇拜一切是れ等の原始的宗教の諸形式を總稱して生氣崇拜と名けたが、是れは餘り生氣崇拜の意味が廣きに失した様に思はれる、それであるから自分は生氣崇拜と活物崇拜とを同じ意味に使用してチーレの所謂生氣崇拜は之れを自然宗教と概稱したからうと思ふ、さうして自然宗教は更らに之れを劣等高等の二種に區別し、以上の自然宗教は之れを詳く云ふときは劣等自然宗教と云ひ、之れに對して神話組織も出來、道德的要素が多少神の性質に入り込んで來た時代の自然宗教を、高等自然宗教と云ひ、自然宗教なるものは詳く云へば、此兩者より成り立つてをると云ふことになじ、さて此自然宗教に對して倫理宗教を掛き、倫理宗教の中に又半倫理宗教即ち律法宗教と、純倫理宗教との二種を設け、宗教の發達は自然宗教より倫理宗教に至りて極まるものとしたならば、よからうと思ふ、則ち前に云ひました高等自然宗教の適例は希臘の神話宗教にして、半倫理宗教即ち律法宗教とは、婆羅門教、猶太教、其適例である、之れに反して純倫理宗教は佛教と基督教とはその二大王關である、さうして此二大純倫理宗教が、如何に

湊合せられ發達せられて進々化々し行けるかは、實に今後の學術界宗教界に於ける目覺ましき大活動であつて、下は劣等自然宗教より上は純倫理宗教に至る宗教思想の發達進化し行ける趨勢を比較對照して行くことは、頓がて將來の宗教如何んと云へる問題を解決し、將來の宗教に向つてその骨子を與ふる所のもので、苟も將來の宗教如何との問題に着眼し、學術の爲め社會の爲めに盡さんとする。天下先憂後樂の士は決して一日も其研究を忽諸に附す可からざるものである。則ち諸宗教(世界にける過去宗教)の人文史上に開發進化しゆける有様を追蹤しゆくは、宗教學の本務である。之れに反して宗教學が科學的に宗教の發達進化の趨勢を明かにしたるものを材料として、更らに將來の宗教如何との問題に向つて、その最後の解決を與へんとする所のもは、宗教哲學の天職である。宗教哲學の研究と云ひ、宗教學の研究と云ひ、豈に又一大快心の事業ではないか、宗教學の研究とし云へば、世間の人が誤解してをる如く、一も二もなく本食虫ほんじくむしと同一の仕事であつて、古本屋ふるほんやの店番のやる閑事業だとばかり思ふてをるは間違である。古人も活眼を以て活書を讀めと云つたではないか、宗教學を活かして研究するか、死なしていぢくるかは、一に吾人斯學研究者の心得如何に由りてきまることである。吾人は諸君と共に日に新にして又日に新に奮勵一番せねばならないのであります。計らず御話が横道に道入りさうになつたが、それはさてをき、彼の高等自然宗教と半倫理宗教とを併は

せ考ふれば、その多くは宗教學者の國民的宗教と云ふものであります。則ち前に例證しました希臘の古代宗教や、婆羅門教、猶太教は皆な或は希臘なり、或は印度なり、或は猶太なりの一國民に限りて信仰せられる所の宗教でありまして、決して他の國民がその宗教の信者になると云ふ譯にいかない所の宗教である。換言すれば、其々の國民にのみ限りて特別にその宗教に歸依し得るも、他の國民にしてその宗教の發生した國民と國體を同うしてをらない人民は、その信者となる譯にいかない宗教である。それであるからして、之れを國民的宗教と云ふのであります。是れに反して純倫理宗教は之れを世界的宗教若しくは普遍的宗教と云ひます。それは國民の特色如何ん、人種の異同如何んなど云ふことには、少しも頓着なくして、何人でも皆な能くその信者になることの出来る性質の宗教でありますから、かく普遍的又は世界的と云ふのであります。佛教や基督教の如きは、此適例であります。佛教は必しも印度人てなくとも、支那人でも日本人でも、將た又歐羅巴人でも、亞米利加人でも、その信者となるに少しも差支へ有りません。その人が信じ様とさへ思へば、佛教徒になれます。基督教も又さうであります。此點は基督教も佛教も同じで、決して猶太人に限らない。獨逸人でも、佛蘭西人でも、英吉利人でも、亞弗利加の黒奴でも、北海道のアイノでも、將た又南洋北極の野蠻人でも、かまひません。等しく教主耶穌基督の教旨に従ふ者は、皆なその信者となることが出来ますやうに、佛教や基督教は等し

く世界万国の民に一般に普く信ぜられることの出来る性質があるからして、世界的宗教又は普遍的宗教と名くるのであります。そこで宗教の發達進化し行く有様を考へて見るに、皆な自然宗教からして漸次に倫理宗教に向つて進み、初めは少しもその宗教の中に所謂道德的の要素の見えなかつたものが偉大なる道德をその中に含有して行く様になるのであります。之れから先きの講演になりまして、或は印度或は猶太或は波斯或は希臘と云ふ様に諸國の宗教の發達を叙述する條下に於ても、どうか無心に讀下せずして、必ず常にこの宗教の發達趨進の有様に意を留めて研鑽攻究してもらひたいのである。さうすれば學者必ず多少の得る所があらうと思ふのです。さうでないといふと神の名前や太古の迷信の陳列を見聞する様な感じが起こり、今日の文明の世にはそんな迂遠なことは入らないと云ふ様な考がすぐ出て來て、さつぱり興味がないことになり、是れは宗教學を取りて遺憾なことである。よく此邊には御注意を願ひます。宗教の發達する工合は劣等自然宗教から高等自然宗教に、高等自然宗教から半倫理宗教に、半倫理宗教から純倫理宗教と云ふ様に、次第に開展進化して行くもので、今私は重に其有様に就いて自然その道行が分かる様に講述するつもりであります。が、併せて又一方では現今世界の宗教の大大立て物と云つたら、佛教と基督教とであるから、此兩宗教を骨子として、之れを二大中心として、或は希臘或は羅馬或は北歐羅巴或は波斯或は支那或は埃及或は

バビロニア或はアッシリア等の諸宗教が進化發達し、さうしてその極佛基兩宗教の二大宗教に攝屬されてしまふ有様を、順を逐つて次第に叙述しやうと思ふ。則ち佛教と基督教とは純倫理宗教が今日迄に進化發達して來た極點であつて、是れより先き將來に於て眞に世界的又は普遍的宗教と稱することの出来る一大宗教が現出す可き二大水源を形ち造つてをるのであると云ふことは、今更ら申す迄も無いこととして、特に此に自分の喋々を要せないことである。従つて將來に於ける一大普遍的宗教の現出に、最も適切な好材料を供給するものは佛基兩教であるが、今この佛基兩教が斯く迄開展發達して來たに就ては、自ら順序次第があつて決して一足飛びにかうなつたのではないと云ふとは勿論であるから、今この次第道行きを逐次章を重ねて説明することゝ致さう。

第二章 埃及宗教の概況

埃及と云ふ國は世界中で非常に古い國であつて、その文化は又すばらしく早くから開けてをり、彼の科學哲學文學工藝など云ふことにかけては、當時埃及は世界の先進國であつたと云ふことは、何人もよく承知してをることとて、今更らこと新しく云ふ迄もないのである。彼の有名なる希臘の哲學者ピタゴラスやプラトンの如きも埃及人に學んだ所極めて多く、猶太教の祖師モーゼも亦その埃及滞在在埃

埃及の文化は由つて教養せられてをうたつたと云ふことは明白なる事實である。従つて埃及の宗教が希臘人や猶太人の宗教思想に影響したと云ふことは又疑ふ可らざる史上の事實である。彼の埃及の天然崇拜が希臘の天然崇拜に影響してをると云ふことは、比較神話學の證明する所であつて、例之ば希臘に起つたエロイシスの密行は埃及のイシスの密行から來てをるのだし、イシスと云ふ埃及の女神がその夫神オシリスの死を傷んで、その死體探求に地獄に迄降つていつたとの神話は、希臘に遣入つてからはデーメーテルと云ふ母神がその娘なる女神ヘルセフォネーを地獄の王ハデーヌが奪つて逃げたのを追ひかけて、遂々地獄に迄追つていつたと云ふ神話となつて現れてをる。又猶太人が宗教上の儀式として行つてをる割禮と云ふ儀式は、猶太人の祖先が埃及に流浪してをつた時分に、埃及人の宗教から得た儀式であつて、それをその當時の埃及人は、亞非利加の土蠻から習つたのである。それと云ふのは、今日有名なる亞非利加探險者リブングストローム氏の報告に由れば、現今まだ亞非利加の土蠻中に割禮の風が残つてをるとのことであるからである。又猶太の宗教は元來偶像教でなかつたのに、モーゼの當時猶太の人民が偶像を大變尊ぶ様になつたのは、埃及の宗教が偶像を崇拜してをつたのを見習つてからのことである。猶太にて神の厨子アークを大變尊ぶするの亦埃及人の偶像教から假りて來た思想である。埃及のヘリオポリスと云ふ所では太陽の崇拜が盛んで、

太陽の犠牲に小牛を奉ることが熾んであつたが、猶太人が動物を神の犠牲に奉る習慣は、矢張猶太人が埃及滯在中見習つたので、埃及の宗教から來てをるのである。かやうに埃及人の宗教思想と云ふものは、アールヤ民族やチタ民族の如き偉大なる宗教的思系を有せる人種に影響してをるのであるから、吾人は先づ初めに古代の埃及人が有してをつた宗教思想の大要を知つてをる必要がある。加之埃及人は恐く世界の人種中で靈魂の不滅てふことを信じてをつた最も古い人民であつたのであるのみならず、彼の埃及古代の文化と云ふものは、前にも云つた通り、中々たしいしたもので、その宗教の如きも天然崇拜あり、動物崇拜あり、唯一神教に近き信仰あり、頗る賑々しい有様である。してみれば、埃及國の宗教と他の國々の諸宗教との交渉關係を別にし、唯この點だけを埃及人の宗教思想に一瞥を試みやうと思ふのは、宗教學者の希望する所であらふと思ふ。仍て私は先づこゝに埃及の宗教如何を考察して見ましやう。(尚ほ埃及の宗教に就ては拙著「世界宗教史」三三―三六頁を參照せられたし)所がこの埃及人の宗教思想の取り調べは、まだ十分附いて居らないことが、澤山あるので、彼の埃及の宗教がどう云ふものであるかと云ふことに就ては、學者に由りて著しくその見る所が違つてをる様である。然るに、晩近シアマホリオン一七九〇―一八三二と云ふ學者が、深く埃及の考古學を研究してその爲めに、埃及に關する吾人の知識は大に精確になつて來たのである。然し新しい事實が現れてくれば、來る程幾多の疑問が續

々として起つてくると云ふことは、又免れ難い譯合であるから、埃及の宗教に關する學者の説は、非常に反對してをるものがある。その中重なる反對説は二つであつて、則ちその一は、埃及古代の宗教は、唯一眞神を崇拜してをる所の唯一神教だと云ふ説で、他の一はいやさうでない。埃及の宗教は、もつと餘程程度の低くい、原始的宗教であつて、それは、チーレ博士の云はるゝ廣い意味のアニミズム(即生氣崇拜)自分の辭で云へば、自然宗教の階段に屬してをるものであると云ふ説である。然してこの何れの説も、まだ十分に眞理の全般を云ひ現してをるものとは云はれない。畢竟埃及の宗教は、一言以て之れを云つて見れば、極下等な生氣崇拜の如き宗教と、頗る發達した宗教である唯一神教との二つが混合して出來てをるのであると云ふのが、一番穩當だらうと思ふ。尙ほ別の辭で云つて見れば、埃及の宗教は、當時一般人民の信じてをつた、生氣崇拜の如き下等な宗教に、當時の學識ある僧侶が、唯一神教的の解釋法を興へて説明したものであると云ふのが、先づ穩當であらうと思ふ。

埃及の宗教に現れた最も著明なるものは、動物の崇拜と、死人の靈魂の崇拜、特に死んだ國王の靈魂崇拜であります。猫とか牛とか鱈魚とか河魚とか云ふ如き種類の動物は、大に尊崇されてをりました。さうしてそれがだん／＼年がたつに從つて、教育ある人々の信じてをる神々と結び附いて來まして、是れ等の動物は、皆な高尚なる天上諸神の權化の様に考へられて來ました。是れは、丁度我國の御神馬など云ふ

類のものより、尙ほ一層深遠な意味を持つてをりましたのであつて、我國では、牛は天神様の御使ものであるし、鳩は觀音様の御使ものなど、云つてをりますが、埃及では各動物は神々の御使ものどころではなかつて、神そのものゝ化身である。應現であるかと考へてをつたのであります。

死者の靈魂、特に崩御された國王の靈魂を崇拜することの熾んなことは、埃及程甚しい國はないのである。彼の死者の靈魂が再び歸り來る場所であるかと考へた死體は、非常に鄭重に取りおいて、ミイラとして保存しておく。有名な三角塔も、ミイラ保存の墓場として、建築されてあつたのである。埃及では結婚して子孫の計を爲すのも、畢竟は一朝自分が死んだあとでも、自分の死體保存を托するの人をこしらへておくつもりでやるのである。

埃及人は人の肉體の死後、永く存續してをる所のものは、靈魂だと考へて、之れをカーと云ふてをつたのであるが、そこでこの死人の靈魂である所のカーは、死後その食物も入用であるし、また其のカーに教育を施すことも切要であるかと考へてをつた。さう云ふ譯けてあるから、埃及人は死人の靈魂を教育する目的でもつて、墓場の四方に書畫を掛けたり、又彼の死人のミイラを入れる棺桶の中には、死骸と共に書畫を入れてをる。さうしてその書物の中には、死者を幸福にする咒文などもある。その咒文は人々生前にもよく暗誦して、死後その功德にあづからうとしてをるので

ある。即ち太陽の神が朝な々々東天に昇りて、その光明の麗はしき恵を以て、万物を照臨せられ、さうして夕に至れば西天暗黒の地に還没さるゝ通り、人も亦生れて此土に來り、死してその靈は下界の暗所に歸入するものであると考へてをつた。そこで下界には又魍魎魍魎の住んでをる部分と無數の幸福快樂を以て充ち満ちてをる部分とがある。そこで若し死人生前の用意や、又はその死人の後に遺された友人故舊が、その死人の跡を吊ふことが、よくその法にかなつてをるときは、死者は彼の世にて無上の福祉を得、若し然らざるときは、死者は非常なる苦痛に遇ふものと考へられてをるのである。

埃及の宗教は又天然崇拜であつて彼の太陽の神化である。オシリス及びヒラム(又の名レ)は埃及の宗教に見えたる最古の神々である。前者はスヒトスと云ふ所で、主として崇拜せられ、後者はヘリオポリスで崇拜されてをるのである。さうしてオシリスとラムとはどう云ふ神であるかと云ふにラムとオシリスとは畢竟道徳上から之れを云ふならば善惡二神であるが、是れは共にアヘブやセト(暗黒の蛇と謂はる)など云ふ神と同じく、夫々光明と暗黒夏と冬、地面の肥沃と瘦せ地などの互に相反した天然物を神に見たて、二人にラムとオシリス、アヘブ、セトとなつて現れて來たのである。尙ほ別の辭で云へば、明暗夏冬土地の肥瘦など云ふことを以て夫々是

れ等ラムやオシリス、アヘブやセトの兩神が與へてくれるものであると考へて來たから、此に此二神が想出されて來たのである。

埃及の神話に由れば、オシリスと云ふ神は、その弟神なるセトに殺されてさうしてセトはオシリスの子ホルス(年少の太陽と云ふ神に、仇を回へされたが、オシリスは再びこの世にをらざ、そのまゝ地獄へ行き、こゝで地獄の王様となつたと云はれてをる)之れに反してラムは神々や人間の父祖であるし、地上を治めた所の一番初めの王様であると考えられてをる。だからラムはその後次第に埃及の國神として尊崇される様になつた。

ラムの如き神が埃及全國の神即ち國神として勢力を振ふ様になつたのは、埃及國が幾多の部落に分かれてをつた時代から段々と統一を経て、埃及全國に君臨する同一國王が出來てから後のことである。則ち埃及が國內小部落に分かれ、各割據してをつたのが、次第に統一されて、同一主權の下に立つ様になつて來てから、後ち初めてこの各部落々々に特有なる神々が、同一ラムの神權の下に統一されてしまふ様になつて來たのである。が、云ふ風であるから、埃及建國以來初の國王六代間は、メンフィス府のプタハ(此神は希臘人のヘラ)と云ふ神が主權を得、第十二王朝の時代には、セバク又はサウネと云ふ鱈魚の神が主權を掌握し、第十八王朝の時代には、シーラム府のアムシと云ふ神が主權を握つてをつた。然しその後には、ナイド

クヌム、トート、ハトールなど云ふ神々が、更る々々勢力を得て来たが、後には是れ等の神々も皆な同一至上神ラーの權化である、化身に過ぎないのであると考へられる様になつて来た、是れは一方では、多神教的想像が益々その神々を澤山に製造してくる傾がある、と同時に、唯一神教的思想がその神々を成る可く一にまとめ、融合統一してこやうと云ふ要求を以てをるからのことである、例之ば新しい王朝は古い王朝に代つて起つたり、又は新しい通商などが、諸外國と開かれたりなどしてくると云ふと、こゝにそれに相當した、新らしい保護神などが出来てくる譯けてあるから、新しい神々の數は日に月に増して行く譯けてある、然るに之れと同時にその時代の知識ある學僧等は、それ等の多神を成るべく、唯一の神に攝歸してこやうと云ふ傾向を持つてくる、そこて是れ等の諸神は、皆な同一々神ラーの權化である化身であると、かう考へてくる様になり、こゝでラーの唯一神教でも起りさうになつたのである。

アモン、ラーに上る讃歌

汝アモン、ラーを恭敬す、萬物の創造者、法の主、諸神の父、動物を造つて、食物を與へ、穀物を生ずるの主、一有つて二無きの主、汝は、諸神中、唯一の王なり。(此、細譯、世界宗教史の條五二頁参照)

自分は嚮者に既に、埃及人の死に關する思想を一言して置きましたが、彼の埃及文

學中で、最も著名なる遺書は、所謂、死人の書と題せる一奇書であります、この書物の中に書いてあること柄を見るに、當時埃及の宗教は、尙ほ多くは魔術的宗教の時代に、彷徨しつゝありました様に見えてをります、が、然し又其中には既に埃及の宗教が、多少、道德的精神的に、進化發達して来た有様も見えてをります、それと云ふは彼の「死人の書」と云ふ書物の、第二百二十五節に云ふてをる所を見ます、分明に此傾向が現はれてをります、則ち或人が死んで地獄に行き、地獄で十二人の裁判官の前に出て、その人は生きてをります間に、決して悪い事をしたことはいないと誓つてをりました、そのときその言にかういふことを云つてをります、私は盗みも致しません、謀反も致しません、神様をも潰しましたことはありません、神の動物と云はる、神聖なる動物の皮を剥だともありません、奴隷を虐待したことも有りません、偽善をしたこともありませんと、かう云ふことを誓つてをります、今是れ等の誓詞に由つて考へて見ますと云ふと、埃及の宗教は、嚮者の動物崇拜や天然崇拜などの外形的、供儀的宗教からして遂に内面的、道德的精神的宗教に進んで来たことが、明に見えてをります、換言すれば、自然宗教から倫理宗教に進まんとしてをるのであります、埃及の宗教は今、最早や、單に國民全體の公事的儀式であるばかりでなく、又個人々々自己の精神上の道德主義を律して行く所の大原理となつて來ました、さうして人々各自自己の精神を洗ひ清めた結果、初めて死んだ後アアルの野に往つて、生

れるとが出来、決して外形的の儀式ばかりでは、此無上の幸福は得られなむと考へる様になつて来たので、是れ自然宗教から倫理宗教に進む過渡期でありませう。

第三章 バビロニアとアッシリアの宗教

彼のセム民族が、オイフラテス、チグリスの両大河畔の土地を侵略する以前に於て、オイフラテス、チグリスの両大河畔の地には、その文化可なり域に、進んでをつた人民が住んでをつた。この人民は、スメリア人とアツカチア人とであつて、セム民族では、多く多分支那人と同じチュラニアン族に属するのであらう。そこで今オイフラテス、チグリス河畔に攻め入つて、バビロニアの地を占領したセム民族、即ちバビロニア人(カルデア人)の一名であつて、その首府バビロンの名稱から来たのである。この宗教が、ほかのセム民族の宗教と異つた、一種特別の點があるのは、則ち此スメリア人やアツカチア人の影響である。換言すれば、バビロニアの宗教が同じセム族であるイスラエル人や亞刺比亞人の宗教と違ふ點のあるのは、アツカチア人の影響である。彼のバビロニアの宗教中に見ゆる、天地開闢の物語や、星を見て人事の吉凶禍福を占ふ占星術の如きものは、皆なセム民族以外の人民例之は前に云ふたアツカチア人の宗教思想の感化である。然しながら、バビロニアの宗教が、今日文献の上で遺つてをるものは、皆なセム民族が、オイフラテス河畔の土地を略奪して、から後

のことであるから、つまり今日吾人に知らるゝところのバビロニアの宗教は、多少他人種の影響を蒙りてをるにしろ、それは一種のセム民族の宗教である。と云つても、差し支かへ無からうと思ふのである。斯くバビロニアの宗教が他のセム民族の宗教と違つてをるから、チーレン博士は特にバビロニア、アッシリアの宗教と他のセム民族の宗教とを區別して、既してをる。バビロニアの宗教は、その初め支那の宗教と同じ、精霊崇拜であつて、是れ等の精霊をバビロニアの太古に於ては、チと呼んでをつたが、魔術や咒文であつて、是等の精霊に祈りを捧げてをつたのである。然るに、是れ等の精霊からして、立派な神々が形ちづくられて来たのは、全く學僧の力に藉るものである。さうして、是れ等の神々の數は、七星に形どつて七つあるし、又は一年十二ヶ月に擬して、十二種としてをる。バベルにて崇拜せらるゝ最古の神は、モアであつて、モアは、元來水神である。モアは人間に學問美術等の文明開化を教へた神であるが、その起源は、波斯灣頭エリスなど、の海邊の人民の中に、尊崇された魚神であつて、つまりその邊の人民のトテムであらう。それは、モアはその形が魚であつて、その讃歌を聞くも、又明にトテムたることを現してをるからである。モアは、天の神であつて、諸神の王として、尊崇せられ、國王もその神命には、服従せねばならぬものと考へられてをる。モアは、元來君主の義であつて、アムに對抗して、諸神の至上の主と考へられてをる。然しその後、彼の領地

は下界即ち地獄である様に考へられて来た、シンは月の神であつて、日の神サマヌより一層世人の尊崇厚く、神々と人間との媒介者として知られ、又人間の爲めに悪鬼を追ひ拂ふ所の善神として崇敬されてをつた、ニネブは戦神であつて、ネルガルは獵神である、その形は獅子又は半獅半人の形を以て現はされてをるから、是れも恐らくトテムの遺物であらう、特にバベルにて尊崇されてをる神は、マルツクである、これはエアの見神として尊崇されてをつた、マルツクの頭は鷲の形をしてをるから、是れ又その昔はトテムであつたのであらう、その手に三叉戟を揮ひ、四頭の犬を従へてをるのは、嵐の神であることを現はしてをる、マルツクは首府の主神となつたからして、神々の頭領となり、全世界の王として考へられて来た、それであるから、天地もマルツクの造る所であると思像された、一國の王も實はマルツクの子孫であり代表者であると思へられてをる、それであるから、マルツクは國家と國王との運命を豫言する所の神である、占星者は木星を以てマルツクの星と考へ、希臘人はマルツクをツオイスと同一視した、かう云ふ風であるから、メビロニアに於ては、マルツクは諸神の主と云ふ位置に立つ様になつて来て、其宗教は天然崇拜からして、遂に唯一神教の域内に迄進んで来た、メビロニアの王ネブカドネツアルは、無論他の多くの神々を尊崇はしてをつたが、又マルツクを以て自己の尊崇する唯一至上の神となし、マルツクの見神ナブを以て、マルツクの神命を自己に傳ふる媒介者で

あると考へ、ネブカドネツアルの身軀はマルツク神に由りて創造せられ、其天祐に由りて國家を治め、敵人を征服しつゝあると思つてをつた、それであるから、メビロニアの宗教は純粹の唯一神教にはまだならないが、モラトリ即ち拜一神教であつた、と云ふてもよいことは、イスラエルの古代宗教である、ヤハエーの拜一神教と同一であつたのである。

女神イスタルは、恐らく當時社會が母長制度として、女が男の上に立つて一家の主權を掌握し、てをつた、時代に考出せられたる女神であらう、イスタルとは女主の義である、イスタルは春の神ツムチを愛し、ツムチを戀ひ慕ふことが、切であつたが、ツムチは春の神であるから、春がたつてしまふと、春と共に死に去りて行き、又來年の春にならなければ、生れ代はりて來ぬと云ふ神話が生じて来た、又イスタルは男神タムムツなる戀人の死を悲んで、どうにかして、再びタムムツを蘇生せしめんものとして、生命の水を得んが爲めに、遙々常闇の國(又は歸へり途なきの國)に降りましたが、イスタルはこゝにて死の女神アルラトの爲めに、その衣冠を掠奪せられ、疫病の神ナムタルがらして、色々の疫病を受けて、苦められてをつた、すると如何んせん、イスタルが此世に久しくをりません爲め、世は愛情なく、生命なく、如何にも乾燥無味のものとなりましたから、エア神は使を常闇の國に遣はして、死の神アルラトに、イスタルを早速復飯す可きことを命じました、そこでイスタルは、芽出度その戀人たるタム

ハツと共に地上に歸へり來るとが出来たと云ひます、イヌツバラは又イヌツバラと云ふものを愛し、之れを己れの夫とせんとしましたけれども、イヌツバラは之れを拒みましたから、イヌツバラは、カ、の爲め疾を以て襲はれ、その瘡す薬を得んが爲めに、遂にこの世を去るに至つたと云ひ傳へてをよます、彼の同くセム民族の神である、ノイニシア人のアシエトレトやカタマン人のアシエラは、イヌツバラの別名と考へてもよい位、その性質が似寄つてをるものがあつた。彼の神なるものはどこから生れて來たか、人間がどうして出來たか、天地はどうして造くられたか、など云ふ疑問の解釋は何づれの國でもさうであるが、皆後世學問などの考へ出したことであるが、バビロニアでもさうであつて、二つの怪物と考へられた男女の王大海からして、アブスとチアマトと云ふ二の神を生んだが、このチアマトはマルツクと大争ひをやつたと云ひ傳へられてをる、マルツクは渾沌の龍を二つ斬りにして、その身軀の兩半から、天と地とを造り、之れに尋いで、一年四季を造り、最後に動物や人間を造つたと云ひ傳へられてをる、然し又一説に由れば、人間はニアが粘土に自己の血を和して造つたとも云ひ傳へてをる、これはニアがを信ずる人民と同血族であることを現はしてをるものであつて、而すがその昔は、バドニア人のトテムであつたことが分かる、鬼に角神はかやうな玉合に人間を創造してゐいたが、その後ち何にか氣づくはない、神慮にかなはないことでもあつた。

と見えて、大洪水を起して、人間を一切溺死さしてしまはんと計畫した、するとニアは竊に船を造つて己れの愛する所の人間だけを救つた、そこで他の神々は會議を開いて、ニアの所致を難詰し、ニアの責任を問ふた、然しニアは他の神々が何等の理由もなく、善人悪人を區別せず、人間一般を溺死せしめんとすることの殘酷にして、不道理なることを喋々辨駁した、そこで神々もニアの説に服して、將來は大洪水の如きものを起して、善人悪人の嫌ひなく、人間を一齊に塵にする如きことを止めて、悪人丈その罰として、黒死病や飢饉に由つて、殺すがよからうといふことを決議した、思ふに此洪水の神話は、南方バビロニアに屢々あつた、洪水から考へ出して來たものであつて、セム民族移住以前からあつた神話である様に思はれる、彼の舊約全書の中の、洪水の話も、全くバビロニアから傳つたものであらうし、又此説話の影響は遠く印度にも及んだと云ふことである。

自然宗教に於ては、魔術を用ゐる呪文を稱へて、精靈を呼び迎へんとする、所謂神憑り、神下しなど云ふことは、非常に廣く行れてをるものである、そこでセム民族がバビロニアの地に這入り、この地に於て、早く既にこの魔術の使用など云ふことは、バビロニアに行はれてをうた様であるが、それをセム民族が、バビロニアの地に入り込んでから、一層開發し發達させたのである、然るに此魔術と云ふことは、また直にバビロニアの占星術と手を携へて、非常な發達を遂げ、是れ等に関する書物もサルム

ン王紀元前八世紀の頃の時代には、既に出て来たてをつた様である。さうして日月星辰は、一切精霊の住いて住居しつゝある所であると考ふる様になつたから、日月星辰の變化は、吉凶禍福を卜占する唯一の材料に供せられたのである。然しこの事實を見て、直ちにセム民族の宗教は拜星に初まると云ふのは、速断も又甚しと云はなければならぬ。セム民族の宗教は決して拜星に初まつたのではなくて、拜星のことは、あとから附け加はつたのである。

アッシリア人(その名種も亦セム民族中のカルデア人てバビロニアの地民地の首)は凡ての開化を、バビロニアから傳へた如くに、又その宗教をもバビロニアから傳來した。然し乍らアツスルとラムマンとの二神は、アッシリア固有の神であつて、殊にセム民族に特有なる部族の長から考へ出された神である。實にアツスルは、非常に能く、セム民族の神たる特色を現してをるので、バベルに於けるマルゾクと同等の位置を占め、アッシリア人が戦争攻伐をするにも、皆なアツスルの神命として考へてをつた。是れは丁度イスラエル人が國家のどんな事業をするにも、國神ヤーエルの命令であると同様である。アツシリアに於て、非常に能く現れてをる、ラムマンは最近の研究結果に由れば、嵐の神であり、善惡兩神の二性質を有つてをると云ふことが分つた。然し又バビロニアのナブ神が、アツシリアに輸入せられて、一時アツシリアの

拜一神教の神格となつたともある。之れを要するに、バビロニア、アツシリアの宗教は、尙ほ多く自然宗教の域を脱せな、國民的宗教以上に進まないものであるが、然し乍ら彼の洪水の神話を見ても、又多少その宗教に、道德的要素が附け加はつて來たことが分かる。さうしてアツスルの如きも、アツシリア國民の崇拜する、唯一至上の神様であるには違ひないが、尙ほ段々とその考察が高まつて來て、アツスルは世界萬國の民からも、等しく尊敬禮拜せらる可きものであると云ふ思想が生じて來て、こゝでその國民的宗教は、漸く普遍的宗教になつてこやうとしてをる。そこは丁度イスラエルに於て、彼のヤーエルの一神崇拜や、國民的宗教からして、預言者の唯一神教や、普遍的宗教が、起つて來たと同じ關係である。然しアツシリアでは、その宗教の發達はイスラエル國の様に、拜一神教からして、十分完全なる唯一神教になつて來ることはまだ出来なかつたのである。

第四章 猶太教の起源及びその發達

猶太教はその初めイスラエル人種の間に起つたモザゼの宗教に基いてをるのであるが、そのイスラエル人と云ふのは申すまでもなく、セム民族に屬してをる人種である。して此人民は西方亞細亞のチグリス河やオイストラテス河の西から、地中海

の東岸亞刺比亞の北方より、延いて埃及のナイル河の畔に、一時遊牧の生活を營んでをつた人民である、それと云ふはイスラエル人の遠祖であつたアブシハム——紀元前二千年頃の人——はオイフラテス、チグリス河畔に生長し、そうしてその人民はその後西方埃及に移住したからである、然るにこの人民が埃及に居つた時、埃及王から虐待された爲め遂に埃及を逃げ出してシナイ山中にさまよつてをつたこと數歳の後、矢張今日のパレスチナの地ヨルダン河の畔に来て、そこに以前から住んで居つたカナアン人(矢張セム民族の間に雜居する様になつたのであります)。

イスラエル人が埃及を脱してシナイ半島に流浪してをつた間、常にイスラエル人を率ゐてをつたイスラエル人の頭領は舊約全書(バイブル)即ち聖書は新舊兩約書から成り立つてをります、その中の舊約書ですの中に於て、殊に有名なるモーゼ——紀元前十三世紀頃の人——と云ふ政治上にも亦た宗教上にも共に拔群なる英傑であります、次手に云つてをくが、或學者はモーゼに初めてイスラエルの歴史的人物が初まり、アブラハムの如きは全く神話的人物としてをる人もある、今此モーゼと云ふ英傑がをつて、埃及人やカナアン人の中に立つて能く政治上にはイスラエル人の統一を計り、宗教上にはヤーエー即ちエホヴァと云ふ神のことを教へて、此の神はイスラエル人の特別守護神であると説き聞かせ、さうしてこの共同の守

護神を上を戴いてをるイスラエル人は、互に一致團結して能くその部族の爲めに計つて、忠なるものでなくてはならないと諭したのであります、傳説に由ればモーゼはシナイ山上でエホバから彼の十戒(舊約全書出埃及記第二十章)を面授し、さうしてそれを人民に與へたと云ふてをる。

今このヤーエー即ちエホヴァと云ふ神様はどんな神様であるかと云ふと、それは申すまでもなく前に云ふた通りイスラエル人の守護神であるが、此ヤーエーと云ふ字義は哲學者などの云ふ實在即ち宇宙の本體の義であると云ふ説も前にはあつたが、それは今日では信ずる學者は先づあるまい、最も此説は舊約全書の出埃及記の第三章の第十四節に我は有つて在る者(即ち實在者又は實在)てふ文を根據として立てた説だが、こんな哲學臭い説は古代のセム民族にはない筈だから、今日の學者は採らない、そこでヤーエーと云ふのは、落つる者と云ふ意味であつて、畢竟雷が落つると云ふことから來たものである、であるからヤーエーとは雷神である嵐の神であらうと云ふ説がある、カール、コルニル氏の如きは此の説である、然しエーヴルドやスメンドは此説を採らない、然るに又他の一説はセイス教授の説で、それはヤーエーはクヒータ人の神が、イスラエルに輸入されたものであらうと云ふのである、又他の一説はヤーエーは印度のドヤールウス、希臘のツオイス、羅馬のユピテル(ヨピス)と同く、天空の神であらう、その證據にはエホヴァ、トセバオト即萬軍の主

ホバと云ふ語が聖書にあるが、この萬軍とは天の群星を指したので、ヤーエー即ちエホバは是れ等の天體の主であつて、即ちその語原は印度のドヤールウスと同じく、それは太古イスラエル人がカルデア、波斯などと交通してをうた時に、是れ等の諸國の手を経て印度からイスラエルに傳はつたのであつて、ヤーエーも矢張印度あたりから輸入された神であらうと云ふ説では、色々學者間にも説である、かう云ふ風に、ヤーエーと云ふ文字の古義に就いては、色々學者間にも説があつて一致せぬが、要するに自分の考へては、ヤーエーはシナイと云ふ高い山に屢起つた神變不思議な雷電の恐しいので、彼イスラエル人がそれを見て、遂に神として尊崇したであらうと思ふ、然るにその風雨雷電の神が、段々時代を経るに従つてイスラエルの一族を守護する、無形の酋長の如きものと變つて來たのであらうと思ふ、此ことは今一々長がたらしく、此にその考證を擧げてをる暇は無いが、聖書の詩篇などの記事を読んで、明にヤーエーが風雨雷電の神であると云ふことが分かり、之れと同時に、ヤーエーは、イスラエル人の無形の君主の如き位置を有してをうたことは、舊約書の諸所に見えてをるからの事である。

元來イスラエル人は遊牧の民であつたのだから、その宗教の如きも至つて單純素樸なものであるが、イスラエル人が埃及から脱走して來て、ヨルダン河の流を渡つてカナアンの土地に殖民する様になつてからは、此に一定の土地を得、さうして從

來米草を逐つて諸方を漂泊してをうた無稽家なものの流浪人であつた遊牧民のイスラエル人も、先づ土着の人民となつたから、そこでその宗教も以前遊牧時代の宗教とは代つて農業を常職としてをる人民の有してをる宗教となつてこなければならぬ譯けである、そこでイスラエル人も元來土着の人民で且つ農業専務の人民であつた、カナアンの人の宗教を思はず知らず真似る様になつて來ました、則ちカナアンの人がバアルの神の本體であると云つて、天然石の直立したマツセバを拜んだり、男神バアルの配偶女神の本體を樹幹アシメラであるかと考へてをうた様に、ヤーエーを蛇形又は牛形の偶像であらばしたる神の厨子アルクの中には、ヤーエーが實際降臨しますと思つて、それを尊崇してをうたし、殊に甚しきはアルクを神の御輿の様にして戰場へ擔いで、ヤーエー自身の親征であると考へてをうたのである。

かやうな工合にイスラエルの國教とも云ふ可きヤーエーの宗教が、段々とカナアンの人の宗教の風を眞似する様になつて來ましたから、當時の有識者間には、かう云ふ風にイスラエルの國教が他國の宗教から大影響を蒙つて、追々異國風に變つて來るのは、イスラエルの國家の獨立と云ふ土から云つても決して喜ぶ可きことではない、國教の獨立は又國家の獨立に大關係があることであるから、これはどうしても一番此風潮を喰ひ止めなければならぬ、ヤーエーの宗教はカナアンの宗教

である所のバールの崇拜と混淆してはならないと、かう云ふ見解が中々當時の有識者具眼の志士中には熾んに行はれて來ました。

抑、イスラエル人がモーセに連れられて埃及を脱走し、さうしてその後ヨルダン河畔に來て住つてからも、まだイスラエル國には是れと云つて一定した國王と云ふ者がなく、一つの共和政治の神政々府であつた、唯事ある時に當つては、有力なる武士即ち師士シヨフエテム——ギデオン又はサムソンの如き師士の錚々たるものである——と云ふものが、上に立つて事を取り、戰爭攻伐の事に與つてを、つたのであるが、それではどうも軍國の大事件を統べて行くに都合が悪い、國家の大事を料理して甘く案配よくやつて行くには、是非とも常設の國王が必要である、唯戰爭でもあるときに急に擔ぎ出す師士だけでは間に合はないと云ふので、遂に國王も出來た、そこで紀元前千五十五年初めて撰拔されてイスラエルの王になつた人は、サウルと云ふ人であつたが、此王の當時イスラエルは四方の強敵を引き受け北はシリヤ東はアムモン、モアブ南はアーマレク、エドム西はフィリスチア人がを、つて常に攻撃を免れなかつた、然し是れからしてイスラエルの國勢は次第に隆盛の域に向つて來て、ダビデ(紀元前一〇二五頃王となる)王及びその子サロモ(紀元前九九三頃王となる)王などの時代に至ると、その國境は遠く地中海埃及からオイフラテス河畔に廣がり、殊にサロモ王は印度にまで通商の路を開きエルサレムに結構華麗なる神殿を興し、ダンからベルシエバに至るまでその人民は皆な擊壤鼓腹泰平の餘澤に霑つてを、つて、イスラエルの國勢は恰も太陽が正午の中天に達したと云ふ様な有様になつた、そこで後世耶穌もその説教中に何にかと云ふと、サロモの榮華と云つて、イスラエルの國家繁榮の標本によく引かれたのである、然しダビデ王とサロモ王とを比較して云ふならば、ダビデ王の時がイスラエル國全盛時代でサロモ王の時は稍傾きかけた時である、さうしてサロモ王以後國は二つに分離し、北方をイスラエルと云ひ南方を猶太と云ひイスラエルはサマリヤに都し猶太はエルサレムに首府を定めたのである。

イスラエルの國家が國王も出來てかう云ふ風に隆盛になると云ふと、ヤーエーの性質も次第に進化發達して來て、元來は一國の會長を神にして眺た位に見て居つた所のヤーエーも、今は大にその様子が變つて來て、勢力の強大なる無形の國王と崇められ、公明正大の裁判官と尊ばれ、イスラエル人に取つてはヤーエーは寛大なる保護者となり熱誠ある朋友の位置に立つに至つたのである、イスラエルの國利民福は一にヤーエーが日夜その不可思議力を以て經營される所のものであると考へられて來たのである、そこで又元來その御祭の如きことも質素簡單であつたのに反して、今は宏大にして莊嚴美麗を極めると云ふ様な風になり、殊にサロモ王の建てられた神殿の如きは、その建築の立派であること、實に驚く外はない

のである。従つて神に事ふる祭司の如きものも非常に澤山に出来たのである。祭司は、何を神即ちヤーエーに立て、神意を承けて疑事を決する所の判官の役をも勤めたのである。そこで又ヤーエーの神意は即ちイスラエル國に於てはその疑事を決するの律法となつたので、この祭司の神に何を立てた判断が、後世神聖なる猶太の法律即ち僧法トラーの起源をなしたのである。故にヤーエーは成文律制定以前に於ける、生きた無形の法律である。ヤーエーはイスラエル人を戦陣に抜くるの勇將であると同時に、人民を總べくする有力なる君主である。ヤーエーは年々土地に豊饒なる收穫を興ふるの至上神であると同時に、人民の道徳を支配するの監督者である。人民の過を正し、過不及なき品性を陶冶するの嚴師となつたのである。かう云ふ工合にヤーエーの宗教が段々熾んになると共に、又預言者即ちナビなる者がイスラエル國にその頭を擡げる様になつて來ました。元來どこの國でもさうであるが、預言者と云ふものはその初めは神意を占ふ位の卜者の位置にあつた者で、我國の市巫や巫のたぐひである。則ちその人は他人には出來得ない、一種の神に通ずる方法手術を知つてをると見做されてをる所のものが、即ち預言者である。抑、此預言者の本來の語彙はナビ、即ち神の口になる者の義であつて、我が國で云ふ口寄の義である。則ち神がその人に乗り移つて、その人の口を経て神意を他に告白せられるのであるから、預言者とはつまり神の口に等しいものであると

云ふ意味である。預言者の本來の意味は神の口でう意味であるが、それが段々進化して來て預言者は神意を承けて將來國家の吉凶禍福を豫言するものである。所謂預言者である。と云ふ意義に變はつて來たのである。そうしてその後ち預言者中には、自己の双肩に國家の大事を擔つて立つと云ふ様な、立派なえらい人物が續々輩出する様になつて來た。そこで軍國の大事は一に預言者の一言一句に由つて決せられ、國王と雖も預言者の言ふ所は是非之れを採用せなければならぬと云ふ位に預言者は當時の社會に尊ばれて來た。預言者の古いもので且つ有名なものは、サムエル(前に云たサウル王と同時代)の如きものがあるし、その他エリヤ、エリシヤ、イザヤ、エレミヤ、アモス、ホセア等は有名なるものである(紀元前九、八世紀以後の人は是れ等の預言者の稱へた所の宗教になつてくるとその職見は實に當時の人民に一頭地を抜いてをるので、之れを従來のイスラエルの宗教に比べてみると尤で變はつたヤーエーの新宗教新信仰であつたと云つても宜い位である。それはなぜと云ふに、その所謂大預言者以前のイスラエルの宗教は、イスラエル國民丈けに限つた宗教である。イスラエル以外の他の國民には共通でない宗教である。その國民々々に限つた所謂國民的宗教であつたのに反して、豫言者の宗教は獨りイスラエルの國民のみに限つた宗教でなく、世界中何れの國民にも共通した、普遍的の宗教、世界的の宗教であつたからである。固よりイスラエルの人民は預言者以前ずつと昔か

ら、ヤーエーと云ふ一つの神を崇拜してをつて、モーゼの教へた所も、ヤーエー以外にはイスラエル人の祭る可き神はないと説いてあるが、それは單にイスラエル人自身の新神を捧ぐ可き神がないと云ふだけのもで、他に全く神がないと斷言した譯けてはない、古代のイスラエル人と雖、矢張り自分と同族のカナアン人にはバルと云ふ守護神があるし、モアブ人にはケモシユと云ふ守護神がちゃんと附てゐる、アムモン人の守護神はミルコムであると云ふことは承認してをる、して見ればイスラエル人はヤーエー以外には自己のたよる可き神がないと云つた丈けに止つてをつて、ヤーエー以外には宇宙間絶對的に一も神なるものがないと斷言した譯てはない、ヤーエー以外に矢張り他國人の間にはケモシユもバルもミルコムもあるのである、之れを宗教學上の術語で以て云つて見れば、イスラエルの宗教は唯一神教即ちモノシリズムではなくつて、拜一神教即ちモノレトリであるのであると云はなければならぬ、然るに預言者になつてから此モノレトリ即ち拜一神教を排してヤーエー以外には一も神なしと云ふ所の一段勝つた見識に立つた唯一神教を起して來たのである、こゝが預言者の非常にえらい所である、従つて又預言者は獨り唯一神教を創めて稱へ出した計りではなくつて、從來のイスラエルの宗教がイスラエル人丈に限つてをつた、偏狭な國民的宗教であつたのに反して、世界萬國天下何人でもその宗教を信奉することの出來、その宗教の信者となるとが

出來ると云ふ所の、普遍的な世界的宗教を造り出した所に、又其えらい御手際が現はれてをる所である。

そこでどうして預言者は從來イスラエル國に行はれてをつた、國民的宗教を變じて世界的普遍的宗教と爲したかと云ふに、是れは元來イスラエル國の一般人民と預言者との思想の高下如何んによつて、定まつたものであつて、預言者は一般人民の知識程度に比べると、餘程その思想が進歩してをつたからのことである、則ち預言者は從來のイスラエル人と同く、ヤーエーは神聖な神であると考へたが、ヤーエーにして神聖なる神である以上は、正義公道を重んずる所のものでなくてはならない、依怙最負（よこしま）などある所の神ではない、してみればイスラエル人であらうが無からうが、そんなことには構つたことはない、唯まつすぐに正義公道をさへ實行する人民でさへあればよい、それは皆なヤーエーの宗教を奉ずることが出来るのである、イスラエル人であるからどう、ないからどうと云ふ譯はない、縱令イスラエル人であればとて、道にかなはない不義不正の行爲をやれば、容赦なく神はそれを罰するのである、そんな人はイスラエル人であつても、とてもヤーエーの宗教信者とはなられないのである、従つてイスラエル國民が或は偶像を崇拜したり、他の多くの神々を祭つたりするときは、ヤーエーは容赦なく是れを罰して、遂にその罪尙ほ大なるときは、イスラエル國全體の人民を擧げて是れを滅ぼし給ふやも計り知られ

ないのであると、かう考へて來た、こゝに於てイスラエルの宗教は、預言者によつてその神を初めて正義公道てふ思想の下に考へて來て、初めてその宗教を倫理的と爲し、結局ヤーエーを以て吾人に正義公道と云ふ如き、道徳上の美德を強ゆる所の道徳的の神と考へて來た、然るに又吾人道徳上の目的理想なるものは、同時に二つあるとを得ない、道徳上の理想即ち至善なるものは、必ず唯一でなくてはならないと云ふ所からして、遂にその吾人道徳上の理想である神は、又唯一にして二個ある可らずと考へ、さうして遂にヤーエー以外のバアル、ケモツシユ等の神は、神にして神に非ずと排斥し去つて、みごととヤーエーの唯一神教を建設し、イスラエルの宗教をモノソトリ即ち拜一神教からして、唯一神教に進歩させたのである、是れは實に預言者の力である、勳功である、と云はなければならぬ、——實に其大勳功である。既に預言者の様にヤーエーは正義公道を欲し給ひ、偏愛を嫌ひ、善者に與みし、惡人を罰することは、イスラエル人であらうと、他國人であらうと、そんなことには頓着ない、實に公明正大を好む神であるとして見れば、ヤーエーの宗教は、敢てイスラエル人と云ふ如き、一個の國民の全體を擧げて、其宗教の對手となるのでなくつては、ヤーエーの宗教は、信ぜられないと云ふことは、ない、唯何人でも正義公道にさへかなつた人てさへあれば、ヤーエーの宗教を信奉することが出来る譯合である、換言すれば、ヤーエーの宗教は、必しも某々の國民全體を通じ、その媒介によつて、それを

信ぜずとも、優に個人としても、其正義公道の徳を養ひさへすれば、能くヤーエーの宗教を奉ずる信者となることが出来るのである、そこで又イスラエルの宗教は、預言者に至つて、國民的宗教の範圍を超越して、個人的宗教となつた、してそのヤーエーの個人的宗教は、獨りイスラエル一國民に限つて信ぜらる可き宗教ではなくつて、世界萬國の人民一般にその信徒となることの出来る宗教であるから、普遍的若くは世界的宗教となつたのである、それであるから、豫言者に至つてイスラエルの宗教は、國民的偏狹的な性質を脱して、世界的若くは普遍的宗教となり、同時にそれは又個人的及び倫理的宗教となつたのである、斯くの如く豫言者は、吾人の道徳を重んじ正義公道をのみ尊んだのであるから、宗教の宗教たる所は一に吾人精神の清きに在りて存し、外形の儀式作法には依らない、心の清き者こそ眞に幸であつて、それは天國の住人である、ヤーエーの求め給ふ所のものは、牛や羊の如き有形的の犠牲の血肉ではない、それは眞に吾人の無形的精神の犠牲である、慈悲の心である、虔信の情に在つて存すと叫んだが、豫言者の宗教は形式的でなくつて精神的であると云ふことが分るのである、乍去惜む可きは、何れの時代でも、盲者千人に目明か一人の世の中で、當時のイスラエルに於ても、大言耳に入らずして、豫言者の聲は餘り反響がなくつて、世に行はれさうでもなかつた、ヘツエキア(紀元前七二五—六九六)王やヨシア(紀元前六四〇—六〇九)王などが、幸に豫言者の説を容れて、當時の宗教

を改良しやうと思つて、多少その計畫をされたこともあつたが、遂に十分その功を奏するに至らなかつたのは、返へす々々々も遺憾なことであつた。

既に豫言者の正義の聲は世人の耳目を惹くに足らず、當時イスラエルの政治は腐敗し、國民奢侈遊情に流れて、宗教は偶像崇拜の多神教に墮落したと云ふ有様であるから、遂にイスラエルの國力も疲弊して、イスラエルの國都サマリヤは紀元前七二二にアッシリアの王サルゴン^{II}の爲めに滅され、尋いで紀元前五八六年に猶太のエルサレムはバビロニアの王ネブカドネツアルの爲に滅され、猶太の人民は悉く捕へられて、バビロンの地に遷され、オイフラテス河畔に、異郷配所の月を眺むるの不幸を啣つに至つたのである。

猶太人がバビロニアの囚虜となつたことはイスラエルの歴史上非常な出來事であつて、是れから後イスラエル人かバビロニアからして、赦るされて還へつて來て、再びエルサレムの地に神の宮を再建する様になつた後の歴史は、その宗教史上に至大なる變化を呈してをるのである。このことは更らに前へ行くに従つて段々講ずることとしやう、唯一つ此に吾人宗教學を講じ、宗教の科學的研究を旨とする者が、どうしても看過することの出來ない所のものは、彼のイスラエルの宗教はどうして預言者の時になつて、上に云ふた様に變化して來たのであらうか、どうして元來國民的宗教であつたヤーエーの崇拜が世界的となつたのであるか、元來預言者

はなぜヤーエーを倫理的に見る様になつたのであるかと云ふこの疑問は、宗教の發達を調べる上に、非常に必要な事柄であるから、是非一言してをかなくはならないのである。

抑々ヤーエーと云ふ神は、元來イスラエル人の特別守護神であつて、彼のイスラエル人が、その昔埃及に滞在してをつた間に、埃及人の爲めに非常な壓制を蒙り、その虐待を逃がれてカナアンの地に遁逃して來た時から、既に業にイスラエル人の特別守護神であつたイスラエル人は、特にヤーエーの寵愛を蒙り、殊遇を辱うしてをる人民であると信じてをつた。そこで傳説に由れば、イスラエル人が埃及王の暴政を脱し、埃及兵の追撃を免れてカナアンの地に逃亡してくるときに、神は亞細亞と亞非利加の間に横はつてをる例の紅海の水を、一時にから々々にほしてしまつて、イスラエル人がカナアンの地に逃亡して行く血路を開き、難なくイスラエル人を彼岸に逃がしてやり、その後とから埃及の騎兵が、イスラエル人を追撃にやつて來たときには、神が一時に紅海の水を再び元にもどして、埃及の騎兵の容易く渡ることを妨げられたと云ふことがあり、又イスラエル人がシナイ半島の沙漠中に漂泊してをる間には、神が絶えずマンナ即ち天賜飲食を雨降らして、イスラエル人の食物の缺乏を補つてくれられたと云つてをる。彼の今日モーゼの十戒(舊約全書出埃及記第二十章第一節より第十七節迄に在る)として、世に傳はつてをる所のもの

も又モーセがシナイ半島の山上で、ヤーエーより面授した所のものであると云ひ傳へられてをる位である(然し今日聖書の科學的研究の結果は誰れもこんな傳説を正直に信ずる者は一人もないことは勿論である)然し又その十戒の精神はモーセの思想であつたらう、かう云ふ風にイスラエル人はヤーエーの特別の恩寵殊遇を辱うしてをる人民であると云ふ者は、昔からイスラエル人の腦裏に深くしみこんでをる所の事柄である、そこでイスラエル人がカナアンの地に遣入りこんだ後でも、常に敵國外患の爲めに苦められてをつたが、イスラエル人の心には我れ等は今こんなな四方の強敵の爲めに苦められてをるけれども、ヤーエーと云ふ力強い神が、常に我等を守り給ふてをる、萬軍の主エホワは將來必ずイスラエルの敵を亡し給ふて、我等に幸福を與へ、不羈獨立の立派な自由國民と爲し給ふに相違ないと堅く信じてをつたのである、イスラエル人にはこの信仰が強かつたから、彼れ等は非常に熱誠に富み事に當つても堅忍不拔挫けずめげず、能く艱難辛苦に打ち克つて行く事が出来たのである、従つて彼れ等は現世的であり樂天的であり活動的であつて、決して印度のアーリヤ人種の中に現はれた様な出世間的厭世的寂靜的な分子は少しも無かつたのである、イスラエル人の中に出世間的な厭世的な人生の多苦觀が起つて来たのは、除程後世のこととて、バビロニアの囚虜以後のとてもあらふか、舊約全書中の傳道の書の如き厭世思想の主なる例を、そこでイスラエル人には

昔からヤーエーに對して、かう云ふ堅い信仰があつて、ヤーエーはイスラエル人を援けてその敵國を亡ぼし、イスラエル人を至勝の世となし給ふに相違ないと、固く信じてをりました、然るに如何んせん事實は是れと丸んで正反對に出で、イスラエルの國勢は陵夷日に振はずと云ふ有様である、常にイスラエル國は敵國外患の爲めに苦められてをつた、殊にその甚しきものは、之れを前にしてはアッシリア王サルゴシの爲めに、其國土の半を侵掠せられ、イスラエルの北都サマリヤは陥落し(紀元前七三二)之れを後ちにしてはバビロニアの王ネブカドネツアルの爲めに、その南都モルサネムも亡されて、どう／＼その人民は捕はれて外國に流浪しなければならぬと云ふ悲境に沈淪して来ました(紀元前五八六)して見ますと云ふとイスラエル人が昔が固く信じてをつた、ヤーエーの冥助に由つて、その國家が隆盛の域に達するであらうと云ふ希望も、到底何時のことやらもう分がらなくなつて来て、是れも恐く齋餅に歸し水泡に等しきものになりさうである、これは果してどうしたことであらうか、神様もどうもさこえない譯であるとかやうに考へて參へりました、そこでこの事實を解釋せんが爲めに、豫言者の普遍主義や倫理的宗教が現れて来たのであります、則ち豫言者の考に由れば、今日イスラエル人がこんな風に國家多難の厄に逢ふ所以のものは、イスラエル人がヤーエーの神命に負いて、パアルの宗教に同化し偶像を崇拜したり、その外政治上にも社交上にも色々な不道德を

行ふからして、天言はず之れを人に由つて知らしむて、ヤーエーはそれを懲罰し給ふが爲めに、こんな敵國外患を以つて苦め給ふのである。それと云ふはヤーエーは元と神聖な神様であつて、正義公道を重んじ給ひ、少しも偏頗依怙の神でないから、縦令、ヤーエーの國民たるイスラエル人であつても、それが悪いことを行へば容赦なく懲罰して、將來をこらしめ給ふのである。若しイスラエル人にして、今にしてよく改むること無くば、ヤーエーは遂にイスラエル人全体を亡ぼして、その懲罰を行はせらるゝかも知れない、かうなつてからイスラエル人は後悔をかも何んのせんすべもないことである。であるから宜く早く過去の過を改むるに吝なることなく、一日も速に正義公道に立ち還へつたがよからうと、かう云ふ風に預言者は説き立て、來たのである。それであるから昔はヤーエーと云ふ神は、イスラエル人の特別守護神であるからして、少々イスラエル人は無理な不行跡をやつても、殊に寵愛恩恵を垂れ給ふ。ヤーエー神は、イスラエル人を救護し給ふに相違ないと、考へてをのたが、事實はどうしてもかうはいかない、常に敵國外患の厄ばかり見てをるから、そこで預言者が出て來て、いやヤーエーと云ふ神はそんな偏頗な依怙負最をする神ではない、ヤーエーは正義公道の神である、それであるからイスラエル人と雖も苟も正義に反し公道に負いた行爲があれば、ヤーエーは容赦なくそを罰し給ふのであると、かう説いて來て、從來のヤーエーの見方とは全く見方を變へて來た、

これは時世の變遷上どうしてもかう無ければならない所である。そこで從來のイスラエルの宗教の特色である國民的偏狹主義を全排して、世界的また普遍的な倫理宗教を打ち建つる様になつて來たのである。さうして預言者が倫理的にヤーエーを觀ずると同時に、從來ヤーエーの拜一神教たるモノレトリは一變して唯一神教即ちモノシズムに進化して來たのである。この點から考へて見ても、宗教は發達進化するものであると云ふことは、決して疑ふことの出來ない。宗教史上の事實であること云ふことが御分かりになるであらう、實に今日では宗教は万古不變のものであるなど云ふことが御分かりになるであらう、實に今日では宗教は万古不變のものであるなど云ふ考へは、事實を無視したる大なる獨斷論である。時代後れの陳說と謂はなければならぬと云ふことが、事實上立派に證明されたのである。實に宗教も亦人文史上の一大事實であつて、社會人文の進歩と共に進々化々して發達止む時なしと見るのが、最も適當な見方であり、且つそれでなければ宗教の生命は死んでしまふ。宗教に災する様になり、宗教の爲に計つて忠ならず、所謂最負の引き倒しとなるのである。宗教が若し發達進化しないもので、イスラエルの宗教がいつ迄も國民的宗教で止つてをる様なことであつたら、それこそ大變で、預言者の二層高尚なる生命ある倫理宗教の恵は何れの日が之れを見るときを得んやである。猶太人は久しくバビロニアに囚虜の身となり、オネフラテス河畔に殊邦異域の月を眺めるに至つては、又何ぞ一片思郷の情に耐えざらんやである。斯かる逆境に莅

んでは、人間の宗教心と云ふものが著しく覺醒せられ、平素は餘り宗教のことなどに耳を傾けない者でも、かう云ふ場合には何んとなく神様の救を待つと云ふやうに立ち至るは自然の狀勢であるのであるが、殊に元來宗教心に富んでをる猶太人のことであるから、かう云ふ場合には一層深い宗教心が興奮されてくると云ふことは、今更申す迄もない位のことである。當時バビロニアに囚虜の身となつてをつた猶太人等は、彼れ等がかやうな工合に異郷の囚虜になつたのも、皆な彼等が嚮者に神の命に背いて偶像を拜んだり、他邦人の神を崇拜したりした天罰であるとかう考へて來た。そこで此考の深く猶太人の身にしみる様に感ぜられて來た時は、益々神の冥罰が恐ろしくなつて來たときで、そこでとうか先非を悔い改めて神の怒を鎮め、再びさよととの恩寵に興りたいと云ふ心が、日毎月に切なるを致し來たつたのである。殊に此の思想を鼓舞したのは、失名預言者即ち第二のイザヤである。然るに恰も好む當時波斯國の王キユロスがバビロニア國に攻め入り、紀元前五三六にはバビロニア國を打ち亡して、猶太人の當時バビロニアに囚虜となつてをる所のものを悉皆開放して、その本國に還へることを許してくれた。そこで猶太人は大喜びで地獄で佛と云ふ有様でもつて、キユロスは恐くヤーエーが猶太人の先非を後悔したのを見て、其罪を赦し救助に降し給つた所の猶太人の教主即ちメツシアであらうとさへ想像するに至つた。斯う云ふ風であるから、兎に角紀元前四五八と四

四五の兩年に夫々エツラ及ネヘミアの兩人の指導の下に、猶太人が赦されてバビロニアからして本國エルサレムの土地に還つてくるや否や直ぐ、同年即紀元前四四五年ネヘミアは前に兵火に罹つてしまつたエルサレムの神殿サロモ王の建立せしものを修め、今度こそは一意専心ヤーエーの御心に契ふ様に、その唯一眞神に奉事したいと云ふ考で、色々猶太人の守る可き宗教上の制度儀式の様なもの迄一定した。してこの事に主として與つた人は、エツラと云ふ學僧である。此學僧の當時波斯國から携へて還つて來た、宗教上の律法や又古來より猶太人の間に傳はつてをる、宗教上の口碑等を參酌して、猶太人の宗教上の制度儀式の事などを編定したのが、僧法即ちトラトーである。舊約全書の申命記は此の僧法の記録であると云つてもよい。

以上述べた通り當時の猶太人には明かに自己はヤーエーの神命に背いて、罪を犯してをる、偶像崇拜と云ふ悪いことをしたと云ふ觀念が出来て來た。此に於て彼れ等の宗教的意識中には明かに罪惡と云ふ觀念が現れて來た。そうしてこの一旦犯した罪惡に對して、神に御詫をするのは、自ら深く反省して先非を悔い改め、嚴に僧法の定めた宗教上の掟に従ふより外に仕方がないと考へて來た。そこで益々僧法なるものは嚴重に猶太人の守る可き、唯一神聖の律法となつて來たのである。さうなると云ふと、預言者に更つて、この律法の解釋義解を職としてをる、學僧等は非常

に重んぜられて来て、神意の如何は一に僧法の條綱を解釋する、學僧に出つて傳へらるゝものと考へられることになり、その結果猶太人が僧法を偏重するとの甚き途に又宗教の眞生命を失ひ、律法的に化石し去るに至り、生きた宗教の精神は藥に似たくも無い、形式的儀式主義に下落してしまふ様になつてくるのは、又是非もない次第である、此點は大に耶蘇が反對された所なので、彼の律法の形式に凝りかたまつたパリサイ教徒や、サドカイ教徒を呼んで、偽君子偽善家と云はれたのも、全くこの爲めである、何んば律法にはサバヌ即ち安息日には、猶太教徒は仕事をしなからぬと云ふ規定があるからと云つて、今みす／＼疾みなやんでをる病人を見殺にしてそれに藥を與へると云ふ仕事さへも、してはならないと云ふが如きは迂愚の極で、法文に拘泥するの甚しきものと云はなければならぬ、當時耶蘇は安息日に病人を治療したと云つて、耶蘇を難詰した學僧に反抗されたのも、誠に無理のないとてある、してまたかう云ふ社會であるから、耶蘇の眞精神が貫徹しなかつたのである、丹頂の白鶴はどうしても鷄群中のものではないのであらう。

僧法は供儀の式を規定すること頗る嚴重であつて、僧法は先づヤーゴーは神聖にして犯す可らず、モウ垢く可らざるものと爲し、神と人との間に非常なる懸隔を設けた、そこでヤーゴーの祭器は神聖にして尋常一様の人は、手も觸れてはならないと規定した、祭司の長は年に一回エルサレムに在る神の宮に遣入ることが出来る、けれ

ども之れも常人には全く禁ぜられてをる、輕ろしく神殿のことを語るも亦罰を蒙るとしてある、かやうな工合に神の聖き御物てふ考から致して、清淨を尊ぶ風が起つて來たし、動物にも淨穢の二を分つて、穢れたとしてある動物の肉は、之れを食することを嚴禁されてをる、又猶太教徒以外の人の料理した食物は、食ふことが出来ない、異教徒と食卓を共にすることも出来ない、猶太人のみ獨り清淨な人民と考へて、他國人を同朋とさへ呼ぶことを嫌ふ迄に、自教徒と他教徒との間に懸隔を附けた、殊に猶太人は安息日の制を守り、割禮を重んじた、かう云ふ風であるから猶太人は知らず識らず、他國人と自己とを峻別するの氣風を養生して來て、その結果獨り自ら高しとする、支那人の所謂中華夷狄と云ふ様な考が熾んになり、その思想は偏狹となり、隔在別居の民となり、憍慢不遜の氣風を増長する様になつて來たのである、猶太教の末路は實にかう云ふ風であるから、とても一視同仁博愛平等を義とする世界的宗教となり、万國の民を等しくその法幢の下に集めると云ふ、普遍的宗教の天職を盡すことが出來様筈がないで、かゝる事業は一切之れを基督教の双肩に委ねてしまつたのである。

しかしながら猶太教がかう云ふ風に律法的に化石した間、立ちて、獨り古來預言者の精神的宗教の福音を宣布したものは、聖書の中に在る詩篇と、當時諸方に散在してをつた、猶太教會の組織とであつた、聖書の詩篇はずつと古くからあつたもの

も無いではないが、主としてこの頃に出来たものであつて、その思想は預言者の宗教を極平易通俗に謠つて、何人にも分かる様にしたものである。それから猶太教會と云ふのは、エルサレム以外の地に散在してをつた猶太人即ちデアスポラが、神の宮にも參詣出来ず、神聖なる祭事儀式にも與かることが出来ぬ所からして、互に安息日には一所に集合して、聖書を會讀し、宗教上の懺改などをやる爲めに出来た會堂である。無論エルサレムの外、神の壯なる儀式を行ふことが出来ない筈に云るからして、各地方の猶太教會では、莊嚴華麗なる儀式をやるのではなく、唯前に云つた通り安息日に寄り合つて舊約書の會讀をやるに過ぎなかつた。斯く地方々々の教會に、却て宗教の眞精神が残つてをつて、猶太教の眞に清淨潔白なる精神的要素は、エルサレムの神殿よりは却つて地方教會の茅舍草屋の中に存してをつたと云ふことは眞に奇なる現象であるが、又各宗教に於ける通則である。猶太人は元來現世的の人民であつて、死後未來のことは少しも氣が注かなかつた人民である。此點は印度のアーリヤ人種などとは大變違つた所であつて、寧ろ支那人殊に日本人によく類してをると云はなければならぬ。猶太人の天國と云ふのは死んでから先きの天國ではなくつて、此世のことである。此世の黄金世界になつた時の事である。してその現世の黄金時代と云ふのは、主として猶太人が神力の保護に由つて、敵國外患を撃ち平げて、天下泰平を致したるの時を指すものである。

治上に彼れ等が自由を得、不羈獨立を致し來つた時を云ふのである。サロモ王やダビデ王の榮華の王朝を再建したるの時を指すのである。それであるから猶太人の所謂救主即ちメツシアなるものは、その初めに於ては、全く吾人靈魂の救主ではなくつて、政治上軍事上の救主である。猶太人を塗炭の疾苦より救ひ、獨立自由の民としてくれる所の救主である。個人々々の無形的精神上の救主ではなくつて、有形的國民の救主である。一言で云へば最も有力なる國王の義である。それであるから、猶太人は自己の救主は矢張昔の有力なる王、ダビデの裔から出ると信じてをつた。救主即ちメツシアと云ふ語が、舊をぬつて即位式を擧げた王と云ふ義の字で、決して靈魂の救主と云ふ意味ではなかつたのである。耶蘇が自ら救主即ちメツシアと稱へながら、おれは政治上の救主ではなく靈魂の救主だと、慮外千萬なことを云つたから、當時の猶太人から疎んぜられてしまつたのである。次手に一言して置く。然し耶蘇を基督と云ふのは、基督はメツシアてふヘブライ語の希臘譯であつて、矢張その字義は舊を塗られたるものゝ意味である。然し耶蘇は自ら政治上の救主ではなくて、精神上的の救主即ち基督であると稱するに至つたのである。かやうな工合に猶太人の考と云ふものは、徹頭徹尾現世的であるからして、死後の世界、死んだ靈魂の行く先きなど云ふ思想は、その初には毛頭なかつた。黄泉國即シニオルと云ふ辭も、古くよりあつたが、その意味は甚茫漠として、日本人の黄泉國位の考か、またはそ

れより一層幼稚なものであつたらしい、靈魂の死後存続と云ふ考も、その初は又甚だ漠然として捕捉することの出来ないものであつたらしい、然るに猶太人が段々世故にたけ、浮世の經驗を重ね、人生の蹉躑多く、世事意の如くならざるを見、不正不義の者榮えて、正義公道を重んじ、孤節を守りて義死するの志士に却て不幸多きを思ひ合はすに至つたときは、如何にも此世に於ける神の攝理の不公平を嘆ぜざるを得ないからして、遂に人間の靈魂はその死後も尙ほ存在して、此世に於て受けざる賞罰殃慶を、來世にて受け、善人は縱令此世ではその善行の報酬に合はざるも、未來死んでからあの世に於て、神からきつとその報賞を受くるものであると考へて來て、靈魂の死後存続未來死後の觀念等益々明確を致し來つたのである、惡人も亦善人と同く、その靈魂は死後存続してを、つて、此世で造つた惡事に對する罰を蒙るのであると考へられる様になつて來たのである、かやうにして從來は殆んど缺けてを、つた靈魂不滅の觀念や未來死後生活を希求する精神が漸く明瞭になつて來たのであります、してかやうに猶太人の思想に變化を來たしたのは猶太人の境遇の變異から來たので、バビロニアに追放されてを、つた間に波斯の宗教から影響されたのもその一原因であります、それであるから今進んで基督教の發達を叙するに先ちて一寸して波斯の宗教のことを述べておさましやう。

第五章 波斯の二元教

波斯の宗教ほど今日歐羅巴でもその歴史的研究の進んで居ない宗教は先づないであらふ、從つて専門の學者の中にも非常にその説が分かれてを、つて、中々一致して居ないのである、それであるなら到底今波斯の宗教に就いては永く動す可からざる確實な真理としてその宗教の真相はかうである、と斷言する譯にはいかぬが、先づ今日知識の程度に於て、少しく波斯の宗教が如何なるものであつたかと云ふことを述べてみやうと思ふ。

波斯人は他の印度歐羅巴人と同く、死んだ先祖の靈魂を崇拜してを、つて、之れをフラグシと云ひ、彼れ等の子孫の守護神となつてを、つた、彼れ等の子孫に衣服飲食を班與するは一にこのフラグシの惠に由ると考へられてを、つた、死んだ先祖の靈魂の存在を知ると同時に、まだ死なない生きてを、る我々子孫も亦肉體の外に目に見えぬ靈魂即ちフラグシを有してを、ると考へて來た、人間と天然物との區別を明瞭に知り分けることの出来なかつた彼等は、日にも月にも星にも風にも森にも水にも、皆な各々その無形の靈即ちフラグシが附いてを、ると考へ、又死んだ先祖の靈魂は日月星辰等の天然物に化ると云ふ信仰を有つてを、つた、火と水とを太古から神聖視してを、つたことは、非常であつて、火は惡鬼を拂ふ力を有し、動物植物の生命とな

ると考へてをつたから、^{カミ}火を絶やすことは、宗教上非常な罪である、水は雨にしる川にしる、共に物を清淨にするものであるから、大に神聖なものと考へられてをつたのである、それであるからアナヒタと云ふ神はオクス、川の水を神に見たてし、之れを水の女神としたのである、アルマイチは地の女神であつて、希臘のデーメテールの様に淑徳高い母神として尊ばれ、アナヒタはイスタルやアフロデテールの様に戀愛の神となつた、アメレタトはその初め植物の生命を掌る神であつたが、後ち不死を與ふるの神となつた、ハオマ(印度のソマ)樹は風樹、風の聲を發する鬼神の憑る所の神體であるとして崇拜されてをつた、ミトラはその初め餘り重く用ゐられて居なかつた神であるが、後ちには重要な位置を占むる様になつた、ミトラは極初めは太陽の神であつたか、但しは又人と人との約束を嚴守することを掌る神であつたかと云ふことは、不明である、アルヤマンは結婚の守護神であるし、ヴェは風の神である、印度のサリトラは波斯のエレトラグナであつて、印度のインドラは善神であるが、波斯では惡鬼の巨魁である、印度では善神である、デブといふ語は、波斯では惡神、ダエブとして用ゐられ、之れに反して、印度の惡神、アスラは、波斯の善神、アフラとなつた、かやうに印度と波斯とは神の名稱が反對になつたばかりでなく、その神の祀を掌る祭司預言者の性質も、亦反對になつて來た例之は、カピとかカラバンとかウシクシユとか云ふものは、印度では善良なる祭司預言者として

尊敬されてをつたけれども、波斯では人間を惡事に導く妖僧として考へられてをつた、今波斯と印度との間に、元とは同一のアルヤ人種の宗教でありながら、段々とかう云ふ違ひを生じて來たのは、同一アルヤ人種でも、一方は波斯に入り、一方は印度に渡つた爲め、その四圍の境遇事情を異にする所からして、その宗教にも、正反對の結果を生じて來たものと見える、さうして又同じく波斯に入り込んだアルヤ人種の中でも、早く一定の土地を得て、農業の人民となつたものと、さうでなくして、永く遊牧の生活を送つてをつた人民との二つが出来て來て、従つて比較的、開化して農業耕作に従事してゐる人民は、常に遊牧の蠻民からして、襲撃され、しばしばその田畑等をも荒され、家畜をも掠奪されると云ふ風になつて來たから、そこで又その比較的、開化した農業の土著人民は、アフラ神をその守護神に請祀して、その保護を祈ると云ふ有様になつて來た、そこで、^{カミ}からして、アフラは善良なる人民の守護を掌る神となり、その性質は益々善良となつて來るし、之れに反して、永く遊牧の野蠻的生涯を送つてをつた人民の方は、アフラと反對に、ダエブの保護を仰ぐと云ふ有様になつて來たから、此に宗教上の二元的對立が愈々明晰になり、世は善惡兩神争鬪の場所である、この兩神の修羅場である、と考へらるゝの様になつて來た、然れば之れを要するに、波斯の宗教は同一人民中の開化したもの即ち農耕の民と、まだ開化しないもの即ち遊牧の蠻民との間に、文野の差が生じて來て、その

結果その進んだ開化を持つてをる人民の崇拜した神は、次第に倫理的の性質を帯びて来て、遂にその宗教は少しも倫理的の着色のない、自然的宗教に向つて進化して來ましたが、之れに反してその遊牧の蠻人中に、永く残つてをつた神は、到底倫理的に進歩してくる望は無く、永く自然的宗教の原狀に止つてをつたのである。してこの波斯の宗教をして自然的から倫理的に向つて進化發達せしむるに、與つて大功ありし人は、ツアラッシュエトラと云ふ釋迦や耶蘇の様な、えらい人物であつた。ツアラッシュエトラはイランの西ウルニア湖畔アトロパタネとメチアとの間の地に生れた偉人で、父はブルシアスバと云ひアーダルバイヤンの人、母はツクドローアと呼び、ラガ市の産である。その生れた年代に就ては色々説がある、先には紀元前一二〇〇と二三〇〇年の間に出た人で、イスラエルのモーゼと同時代であると云ふ説もあるが、ジキアクンシ氏最近の研究に由れば紀元前六六〇—五八三の間に出た人である。と云ふツアラッシュエトラに就ては、丁度印度の釋迦に於ける様に口碑傳説の頗る奇妙不思議なるものがあつて、附着してをるから、彼のケルンやダルメステラ等の學者は、ツアラッシュエトラは全く歴史上に實際あつた人物ではなく、あれは後世の人の作りものであるとさへ、公言して憚らない様になつたが、波斯教の聖經アエズタ中の最後の讚詩ガタを、虚心平氣に讀んで見た學者は、ツアラッシュエトラを以て歴史上全く無い人間であるとは、斷言する譯にいかない、却てそれは寧ろ

正しく歴史上に在つた人間であると云はんければならないと云ふことに、氣注ぐてありましやう、然しながらツアラッシュエトラは、縱令歴史上正しくあつた人間に相違ないとしても、その傳記は色々不可思議な怪談を以て着色されてをると云ふことは、疑ふ可からざる事實であらふ、傳説に書いてある所に由れば、ツアラッシュエトラの生れたときは、釋迦の誕生の時と同じ様に、色々の奇瑞現れ、悪神は一時に屏息したと云ひ、悪神に奉事する惡僧どもは悪神アングラマイニエの命を奉じて、ツアラッシュエトラを殺さうと計つたが、成効しなかつた、そこで善神アフラはアエズタの眞理をツアラッシュエトラに啓示し、善惡の兩界あるとを教示せられ、ツアラッシュエトラはこのアフラ眞神の豫言者として、誓つて悪神ダエブを折伏しやうと思つた。ツアラッシュエトラは古今を通じて其中頃に出現して來た豫言者であつて、今から時がたつて世界の終になると云ふと、再びツアラッシュエトラと云ふ教主が世に降生すると考へられてあつた。ツアラッシュエトラは丁度佛教でいふ彌勒の出世に當るのである。ツアラッシュエトラの力に由つて、善惡の争闘は全く止んで、善の世界は惡の世界を全く征服してしまふのであると云ひ傳へられてをる、是れ等は實に何れの宗教にも共有の説話であつて、何れの宗教も皆その宗教中の偉人を神聖にする爲めに、附會した外部の附屬的色彩であるに相違ないが、是れ等の色彩があるからと云つて、各國の宗教に見えてをる偉人賢聖を以て、歴史上全く無かつた人だといふのは又餘り

極端な考方であらふ、ツアラツシエトラは歴史に無かつた人物どころではなく、
イダルババイヤンの土地に生れ王族の血統であるスピタマ族に出るのである、ツ
アラツシエトラは十五歳にして初めて宗教的生涯に入り、三十歳迄は宗教上の修
行に一向餘念無かつたのであるが、釋迦や耶蘇と殆んど同年である三十の年を以
て自己の宗教を世に稱道し、爾來七十七歳を以て易篋するに至る迄一に斯道の爲
めに鞠躬盡瘁したのである、殊にツアラツシエトラが道を得て十二年の後、國王
ギシエタリスバを教化して自己の信者となし、ツアラツシエトラはギシエタリスバ
の外護に由つてその教をセイスターン及びバクトリアの地方に弘通することを得、
ギシエタリスバとチユラニアン民族の王アルヤスバとの間に戦争の開かれた
のも、全く宗教上に關する三王の争より起つたのである、實にギシエタリスバのツ
アラツシエトラに於けるは、丁度頻毘沙羅王の釋迦に於けるコンスタンチヌス大
帝の基督教に於けるが如き關係であつた、ツアラツシエトラ布教の全盛時代はそ
の四十二歳から六十歳に至るの間に在るのであるが、ツアラツシエトラは遂にその
教敵たるチユラニアン人種である、ツィリ、プラタルワクシユなるもの、凶手に罹
つて死んだと云ひ、又は途上雷鳴に逢つて震死したとも云はれてを、ツアラツシ
エトラが生れた時は丁度前にも云つた通り、波斯人が漸く遊牧の生活を離れて農
業耕作の土着民となつた時である、波斯人がその發達史上に於て、大變動をなした

時である、今迄は少しも道德的の分子のはいつてをらない、自然的宗教が、漸く倫理
的宗教に向つて進んで來た時である、この時期に於て倫理上より觀察して、純粹に
して清淨無垢なる眞神の啓示を教ふる神の豫言者として現はれ出でたるものは
ツアラツシエトラである、善神アフラが惡神ダエヴを挫かんとしてその神力を注
いでをつた時に當つて、その善神アフラの豫言者として現はれたのがツアラツシ
エトラである、印度に在つてはインドラ神がヴァナ神を征服して勝利を博した時
に當つて、波斯に於けるが如き豫言者の出現を見なかつた、波斯に於ては、恰もイス
ラエルに於てヤーエーの宗教が、カナアンのパアルの宗教に滅されやうとした
とき、そのパアルの自然宗教を排斥して、一層高い倫理的なるヤーエーの宗教を極
力鼓吹した豫言者エリアが出現した如く、光明や眞理や生命の神アフラの一預言
者ツアラツシエトラが出現したのである、さうして眞神アフラの光明や眞理や生
命に對して、闇黒や虚偽や死の惡神ダエヴを征服するの使命を全うせんと努めた
のである、唯ツアラツシエトラの教へたアフラは、之れをイスラエルの豫言者エリ
ヤの稱道したる神ヤーエーに比するに、前者は抽象的であつて、後者は具體的であ
つた差異あるのみである。

果して然らばツアラツシエトラの教へたアフラ、マツダとは如何なる神であるか
と云ふに、そのテアラと云ふ語の起源は、天然現象から來たので、テアラとはその音

は天空の神であつたかも知れないが、ツアラツシエトラの宗教心の鏡面に浮んだ
アフラ神は最早や自然的宗教の領域を脱して、倫理的宗教の範圍に一步履み込ん
でをるので、則ちツアラツシエトラは時勢に憤慨して、當時一般普通の標準よりは
一層高等なる道徳心宗教心から考へ出して來た神が、このアフラ神である。元來ア
フラは主と云ふ意味の言葉で、則ちその神を祀る信者が神徳を尊稱して彼れ等の
主と崇めたのである。それであるから従つて又宗教信者は銘々その自己の信ずる
神即ち主アフラを有してをる譯けてある。然しツアラツシエトラは是れ等の個々
各別の神々を指してアフラと云つたのでは無くつて、是れ等の神々を湊合統一し
て、一切万物の主と云ふ意味でアフラと云つたのである。これは丁度モハメッドが
唯一至上の眞神をアルラーと名けたのと同じである。故に一つ有つて二つ無きの
主と云ふ意味で、ツアラツシエトラは神をアフラ即ち主と稱したのである。ツアラ
ツシエトラはかう云ふ意味でアフラと云ふ神を呼んだが、まだ足りないでもつて、
アフラに加ふるにマツダと云ふ語を以てして、アフラ、マツダと稱したのである。し
てこのマツダとは言語學上には全知の義若くは天地万物の創造主といふ様な意
味をもつてをる語であるさうだが、要するにツアラツシエトラのいふマツダとは、
唯一眞神の義に用ゐられてをるのである。則ちアフラ、マツダとは唯一眞神なる我
れ等の主と云ふ意味である。このことは波斯の聖典ガタの讚詩を讀んでみればす

ぐ分るのである。ガタの讚詩に由ればツアラツシエトラはアフラ、マツダを以て自
然界及び道徳界の唯一の眞主として崇拜してをつたのである。さうしてこの唯一
眞神の助けに由つて不道徳の悪鬼を退治しやうと努力すると云ふのが、ツアラッ
シエトラが自らその天職としてをつた所のものである。

ツアラツシエトラは世の中に存する善悪二元素の二つを以て、善神と悪神との争
闘から起つてくると教へた。善神の教ふる所に従つて善に與みするものは、善神ア
フラの冥助を蒙つて未來天國の樂土に生れることか出来るし、悪神に黨して悪事
を働くものは未來永久の罪科に處せられるのである。吾人々類が善事を行ふと云
ふ氣になるのは、善神の心霊が我れ等の心に乗移るからであるし、その悪事を働う
といふ氣になるのは、心霊が我れ等をさうさせるのである。要するに人には善玉と
悪玉との兩者が付いてをつて、始終この善悪兩玉が各人間を已れの方へ引き付け
やう引き付けやうとしてをるのである。然し人は悪神を避けて善神の導に從はな
ければならないのである。吾人は善神アフラに從つて悪神ダエブを退治せねばな
らぬ。さうして今日こそ世の中には善神悪神の力が殆んど五分々々であるが、最後
には善神の全勝に歸するといふことは少しも疑ひないのであるから、人は何んて
も悪を改めて善に遷らねばならないのである。かやうに現今の世の中の實狀真相
を窺つてみるに、善と悪との争闘場修羅場である。然しツアラツシエトラは終には

悪は善に勝つ可きものでない善は最後の勝利者であることを体認して善に與みし
て悪を退治せねばならぬと教へた然し彼自らは何に故に善と悪との二元が現今
の世の中に相對峙して存在する様になつたかと云ふ善惡の起源に就てはツアラ
ツシユトラは一言も云つてをらない唯かう有る——善惡の兩者は相對峙して存
在してをる——のが世の中の真相であると云ふ極めて實際的の斷言に過ぎない
のであつた然しこゝには是非一つ見のがすことのならぬことはツアラツシユトラ
の教へた宗教は善神アフラマツダの神意を躰して惡を去つて善に與みせよと云
ふに在るのですから何れの國民でも又何人でも善に與みして惡の退治に努むる
人はその宗教の信者となれることが出来る譯け合であつてその信者となる所の
ものは獨り波斯人に限つたことはないのである東洋人でも西洋人でもアールヤ
人種でもセム民族でも差し支へはないのであるとツアラツシユトラの
弘めた宗教は最早や國民的宗教ではなくつて世界的宗教である倫理的普遍主義
であると云はねばならないといふことである。

ツアラツシユトラの教へたアフラマツダの宗教は餘り抽象的であつてイスラエ
ルの宗教に於て見た様なヤーエーの如く具體的でない従つてアフラマツダは人
民一般の宗教となるにはまだこの上に餘程變更を加はへて當時民間信仰と調和
する必要があるので又アフラマツダの一神教の中にもアメンシアスベンタヤ

ツアラツシユトラの教へたアフラマツダの宗教は餘り抽象的であつてイスラエ
ルの宗教に於て見た様なヤーエーの如く具體的でない従つてアフラマツダは人
民一般の宗教となるにはまだこの上に餘程變更を加はへて當時民間信仰と調和
する必要があるので又アフラマツダの一神教の中にもアメンシアスベンタヤ

波斯人は死人の復活と云ふことを信じてをつたその考へは餘程詩的で面白いが
一寸此に一言してみやう則ちツアラツシユトラの教ふる所に由ればツアラツ
シユトラを距ること三千年の後に於てソシアヌスと云ふ救世主が現はれてくる
その時には五十七年間に凡て死んだ人類が復活するそこで抜ひ清よめの火をあ
びるが善人はその火にあつても少しも身體を傷つけると云ふ様なことはないし
かし惡人は直ちにその身體に大苦痛を受ける是れからして一時世界は善惡兩神
の大修羅場となるが激しい戦争の後善神アフラマツダ勝利を得てアハルマンや
アツヒなど云へる惡神は全く退治されてしまふこゝで善神全く勝利を得て惡神
を撃ち出し汚れたる地獄も清められこの世界も再び若か返り此世は全く善神の
支配にのみ版して一切の罪惡災害など云ふものは痕を絶つてしまふのであると
考へられてあつた固より批評的に之れを考ふればこの思想はツアラツシユトラ
の抽象的にして無形なる善惡二元の對峙て思想を非常に具體的に有形的に移
つして考へたものであつてツアラツシユトラ以後の發達にかゝる思想であると

云ふことは云ふ迄もないのである。然し兎に角波斯人は一時かう云ふ風に世の中の善悪でふことを考へてをつたのである。又彼のチンプト橋即ち算定橋の有名な物語は、アエスタ聖典の餘程古い部分にもある様である。則ち此橋は善人悪人の運命の定まる断末間の審判とでも云つて善いのであつて、善人は死んでから此橋の上を無事に通過して、アフラの樂土に往生することが出来るし、悪人はどうしてもこの橋を無事に越すことが出来ず、直ちに橋下に墜落して地獄におつこつてしまふのであると考へられてをる。

今こゝに述べた波斯教の教義は、ツアラツシユトラその人の案出した教義ではなかつて、却つて後世に造り出されたる煩瑣なる教義である。ツアラツシユトラの教へた所のものは、こんな複雑な煩瑣な教義ではなくつてもつと簡易直截な福音である。それは神學上の問題ではなくつて、實踐道德の要旨である。従つて又波斯教の中に存してをる幾多の煩雜な儀式は、皆なツアラツシユトラの自ら製定した所のものではなくつて、却つて後世の人々が案出した所のものである。彼の汚を厭つて清淨を愛する爲めに、波斯人は色々複雑な宗教上の儀式をもやつてをる様であるが、是れ等は皆なツアラツシユトラ以後の發達にかゝるものである。ツアラツシユトラの當時に於ては少しも斯かる煩雜なる儀式を用ふることはなく、唯この世は善惡兩神の争闘場であるから我れ々人間は善神を助けて惡神を退治せんければならぬ。然しこの善神の經營し給ふ宇宙の化育を贊助するのは何でも外の事はない。唯吾人も亦善神の意を躰して勉めて善事を實行して道德を進奨する様勵むに在るのでと、かう説いてをるのである。何とツアラツシユトラの教は耶蘇や釋迦と同じ様に至つて平明なる福音ではないか。彼の煩瑣なる教義や複雑なる儀式の湧き出したのは寧ろツアラツシユトラより餘程後世のことである。

第六章 基督教の發達 其一

猶太人が常に國家多難の秋に當り、バビロンなどに俘になつてをつた間には、その人民を敵國の抑壓から救つてくれるに足る、強大なる國王が必ず出世さるゝに相違ないと信じてをつて、猶太人は常にこの勢力ある國王即ち救主が出るゝと云ふ堅い信仰と希望とをもつてをつた。それであるからアッシリアの勢力が北方王國イスラエルを壓伏しにかゝつた時は、預言者イザヤはこの國家危急存亡の秋に當つて、神は必ず猶太の前王ダビデ王の子孫中からして、猶太の國家を救護す可き救主メッシアを世に出すに違いないと云ふことを豫言し、バビロニアが南方王國猶太を滅した時には、豫言者エレミヤはダビデの血統中から必ずその人民の疾苦を塗炭の中に救ふ可き救主の現れ来る可きことを疾呼したのである。この時に當つて俄然波斯王キユロスはバビロニアを滅ぼして、多年その所に囚虜となつてをつた

猶太人を基督解放してその本國に還へしたから猶太人はキエロソムこそは眞の猶太人の救主メッシアであらうと考へる様になつた。そこで猶太人が一たび其本國に復歸するや先づ神の宮を修めてダビデ・サロモ王の古昔の舊觀に復さうと努めてをつた。然るに一難去つて又一難來り世多きは期する所と迷ひ紀元二世紀の頃希臘思想の影響としてエルサレムに在るヤーゼーの神殿はユピテル神の祀殿となり又その之れに尋いでシリヤの王安テオクス・エピファネスは猶太人の宗教に事の外なる迫害を與へ令を發して安息日の嚴守を止め聖書を誦するを禁じましたからキエロソムも又眞に猶太人の救主即ちメッシアではなかつたと氣が注ぎ遂に彼れ等の眞の救主なるものは斯かる國王では無く斯かる自然的の人間ではなかつて人間以上の超自然的存在者で無ければならぬと考へる様になつて來ました。救主即ちメッシアは天地創造の初めからして神の撰抜に由つて神と共に存在してをつた所のもので、後善人を助け悪人を挫くの審判官たる者でなくてはならぬと想像する様になつて來ました。ダニエル書やヘノック書に於ては、愈々この思想が明瞭に見えてをる。然し彼の所謂サロモの讃歌に於ては、再びメッシアは一個武勇の英將の様に謳はれてをるが、ヘノックのメッシアは既に耶蘇以前に存してをつた猶太思想であつて、サロモの讃歌は羅馬のポムペイウスの時代に淵源してをるものであるから、畢竟するに耶蘇降誕の前後に於て猶太人の宗教思

想はその救主たるメッシアを見るに、或は超自然的人間以上のものと觀じ、或は人間中のえらい武力ある國王と見る。舊來の猶太思想との間に彷徨してをつた様に見える。去りながらメッシアと云ふものゝ性質が次第に變化して、その初めは此世に於て政治上に猶太人を救つてくれる救主である。えらい猶太の一國王であると思つてをつたメッシアも、その思想が眞に事實として、現はれてこぬ所からして、遂に段々メッシアの考へが變つて來て、超人間的超自然的に向つて來たと云ふことは疑ふ可らざる。歴史上の事實である。これからして又羅馬が猶太を屬國として、壓政を猶太人の頭上に加ふると云ふ有様になつて來てからは、ガリラヤの猶太人は益々メッシア出現の希望を盛に持つて來たが、彼れ等の多くが思つてをる様な、一大勢力を持つた猶太人の王と云ふ如き意味のメッシアは千百歲遂に來る時はなかつた。然し偶々此時に當つて、猶太の荒野に立つて、猶太の人民に教ふる者があつた。曰く天國は近けり汝等悔い改めよと、こは實に耶蘇に先つて眞神の福音をその人民に傳へたものである。この人はバプテスマのヨハネと云ふ者である。然るにヨハネは硬直な人であつたから端なくも偶々國王ヘロデ・アンチパスの忌諱に觸れてその頭を刎ねられてしまつたのである。

此時に當つてヨシユア即ちイエス・耶蘇は、パレスチナの地に出世されたのである。耶蘇の降誕は猶太のヘロデ紀元前七三一四王の御世羅馬ではアクスツス紀元前

六三〇紀元後一四帝在位の時であつて、從來世に行はれてをる紀元元年より三四年前になるので、日本の神武天皇即位前六六〇年の昔である。その降誕された土地は或はベスレヘムであると云ひ、或はナザレで育つた人だと云ひ、色々説があるやうであるけれども、兎に角耶蘇は猶太の一寒村に生れた人に違いない。さうして耶蘇は又佛教の開祖釋迦の様に、門閥の家に生れたのではなく、一賤工ヨセフとマリヤとの間に出来た兒と云はれてをる。耶蘇の三十歳に至る迄は耶蘇が如何なる教育を受けられてをつたかと云ふことは、今日殆んど不明である。唯路加傳の中に耶蘇は十二歳の時猶太の學者とエルサレムで問答し、學者達もその智慧の殊勝なのに驚いたと云ふことが書てあるのみである。然しながら年長じてからは耶蘇は他の人々と共に猶太の最後の預言者バプテスマのヨハネの説法を聴聞され、それに悔い改めよの説教に耳を傾けられたやうである。然るにヨハネは不幸にも國王の諱忌に觸れ、斷頭場裏一片の露と消えてしまつたが、その説法の深旨は、返らに新しい一層進歩した形式を以て新福音として、耶蘇の口に山つて宣傳される様になつて来たのである。ヨハネの所謂悔い改めよ天國は近きに在りとの説法は、天國は既に汝等の裏に来てをるぞとの、耶蘇の新福音となつて現れて来た。嚴正にして肅然犯がす可らず、憚る可らざるの趣あつたヨハネの説法は、今や眞個に洋々として寛容海の如き耶蘇の温い愛の福音となつて現はれて来た。從來君臣の義てふ嚴肅な

る關係を以て考へられてをつた神と人との關係は、今や父と子と云ふ最も温い愛情上の關係を以て表はれて来た。怨に報ゆるに怨を以てし、義に報ゆるに義を以てし、眼は眼を以て報い、齒は齒を以て報い、汝の隣をいつくしみてその敵をうらむべしなど云へる猶太教の律法主義は、今や怨に報ゆるに徳を以てし、その隣人を親んで己れの敵を愛し、己れを誼ふ者を祝し、己れを憎む者をよくし、なやめやむる者の爲めに祈禱せよ、人若し我が右の頬を打たば尙ほその左の頬をも之れに向けよ、人若し汝の上は衣を欲せばその下た衣をも之れに與へよと云ふ愛の福音となつて現れて来たのである。故に耶蘇は曰く、凡て疲れたる者重を荷へるもの、我れに來れ我れ汝等をやすませんと、預言者ホセアの所謂神の好み給ふ所は、一に精神的慈の徳であつて、有形的なる牛羊の犠牲ではないと云つた精神は、今や殘る限なく耶蘇の福音中に明瞭に云ひ現されて来た。天國に入るの門戸は、パリサイの教徒等が考へてをる如く、やれ安息日の制を墨守するとか、やれ斷食を行ふとか、人の見てをる前て態と神に祈つて見せるとか云ふ様な、虚式虚儀の偽善的行爲の末に在つて存するのではなく、眞に能く我が心の清さを致して初めて天國の關門を開くことが出来るのである。故に耶蘇は山上の訓誡に於て明かに公言してをる。心の清き者は幸なり、その人は神を見ることを得可きが故にと、又耶蘇は汝等は彼の偽善者の徒の爲す如く、口に現はば祈つてその聲を他人に知らしめ、それによつて天國に入る

と思ふ勿れ汝等の右の手で爲す所の慈善の行は之れを汝の左の手にだに知らしむること勿れ眞に天國の寶珠を握らんとする者は先づ世の名聞利養を捨てなければならぬ世の中の榮譽や富貴の爲めに心を紊だしてゐる者は到底天國に入ることが出来ないのである故に耶蘇は云はれた富んだる人の天國に入ることの難きことは尙ほ大なる駱駝が針の小孔を通ほるよりも困難であると佛教が彌陀の淨土は眞個に往き易い所だけれども往く人が中々ない所謂易往無人であると云ふのも亦此れと同じ理窟である天國に入るには所謂人心の汚を去つて道心の清きに住せねばならぬ要は永いと云ふには及ばない天に在す汝等の父の完全が如く汝等も亦完全す可してふ一言の服膺に在つて存するのである然れば耶蘇の見たる天國は最早や從來の猶太人が希望してをつたやうな政治上に猶太人の全勝を期し猶太人が天下を一統して得たる黄金世界でもなければ、ノック書などの夢想してをつた雲井造の中に現はれる様な空想的の天國でも無い耶蘇の思つてをつた天國は個人々々の道德の完成に由つて初めて到達し得らる可き道德理想の圓滿完全に實現された世界である人々皆な天父たる神の如く完全の位置に到達した境界を指すのである人々皆な若しその天父の神の完全なるが如く完全たるを得ばそは明に現世の中に天國を實現したものと謂つて宜いのである斯かる天國を此世に實現せんとするならば人々皆な神の意を昧し神が愛である如

く我れ々々人間も亦彼我の間に愛を以て交はらなければならぬ唯之れ丈のこととが實行出来さへすればそれで十分であるさう云ふ社會には眞の天國が實現されるのである然れば耶蘇の根本思想は神が愛でありさうして吾人々類がその天父の愛を容れることが出来たらばそは又直ちに神に對しては愛神となりその同一天父に事ふる吾人々類に對してはそを取りも直さず同胞兄弟と見做して一視同仁四海兄弟てふ愛人の實を擧ぐることが出来ると云ふことになるのである一言以て之を言へば耶蘇の根本思想は神を天父と觀じ神は愛なりと見るよりして此に又愛神愛人の行爲を生み出してくるのであるとかう云ふことになるのである然し勿ら惜む可し當時耶蘇の深い革新的な考は到底世俗の解する所となることが出来なくつて遂に奸人の讒誣に陥しられ耶蘇は齡僅に三十三歳を一期として而かも名も知れない二人の盜賊の中に伍して荆の冠に賤められゴルゴタ山上に磔殺さる様になつてしまつたのは返す返すも残念なことであつた然れば耶蘇は齡三十にして初めて神の道を天下に稱道し三十三歳にして不幸の横死を遂げたのであるからその福音の宣傳に従事せられたる歲月は僅に三年位に過ぎなかつたのであるから若し之れを釋迦が二十九歳で出家して三十五歳に成道し四十五年間説法して凡そ八十歳位で涅槃の雲に隠れたと云ふことに比ぶれば佛基兩教の教主の生涯の中には一種言ふ可らざる奇態なる差異があつ

て、一は激烈悲壯にして非業の横死を遂げ、他は如何にも平和無事にして圓滿にその終を全うしたるが如き、この佛基兩教の教主の生涯上の異同は、又その教主の死後、二教發達の異同の存する大原因を形作りつた機である、尙ほ次手に一言附け加へてをき度いのは、釋迦が四十五年間の説法は殆んど他の妨害障礙と云ふ如きものは無くつて、極々平和に布教の功を奏せらるゝことが出来た様であつたが、耶穌はその布教の當初に於ては、左のみ大迫害を蒙つた様な跡はないが、その後年に至るに従つて、愈々益々猶太教徒と間の衝突が激烈になつて來て、遂に耶穌自らをして、パリサイの徒サドカイの徒を初め、當時の學僧等を呼ぶに皆な偽善者偽君子と云ふ名稱を以てせしめ、さうしてその罵詈謗の言を過うせしめた結果、遂に是れ等の教徒と大衝突をやらかして、とう／＼その時の太守ピラトは、耶穌は國事犯罪人に非ずとさへ宣告したにも關らず、耶穌を憎む私怨骨髄に徹した國人は、無理にその犯罪を構成して遂に耶穌を磔殺するに至つたと云ふ事實は、佛基兩教主の生涯上に餘程遠つた有様を呈してをると思ふ。

先づ耶穌はかやうな工合にして、後世全歐洲を風靡するに足る、一大宗教の教祖とも仰がる可き身を以て、不幸世に容れられなく、且つあまつさへ三人の盜賊と伍を同うして、ゴルゴタ山上で磔殺されて、あはれ墓なき最後を遂げられてしまつたが、耶穌の弟子たちは、愈々自分の御師匠様が亡くなられてしまつたから、夫々相ひ率ゐてガリラヤの地方に遁れ去つた、さうして彼等は一時その耶穌と云ふ教主御師匠様の風采は接することが出来なくなつてしまひましたが、後とに遺つた耶穌の御弟子たちは、是れが爲めに自分達の信仰や宗教心が薄すらいだかと云ふに決してさうではなく、却てその教主耶穌を追慕する念や教主に對する信仰心は、益々熾んに燃えたつばかりになつて參りました、それと云ふのは、まづたとへて云つても、自分の父母にしる兄弟にしる、能く看護の手を盡し、相當な醫者にもかけ、さうして色々手を盡したけれども、とう／＼藥石その効なく、遂に病死したと云へば、幾分かまだねざめがよろしいのであるが、自分の父母が或は水難火難、はては強盜追刺などの毒手にかゝつて横死をしたと云つた日には、どうしてもねざめがわるくつてたまらないものである、今耶穌も悪人の誣ゆる所となつて、國事犯罪人てふ汚名を負つて、剩へ盜賊と共に不幸の死刑に逢はされたものでありますから、その弟子としては、教主をしたふ心が彌や増に増して來たと云ふことは、まことに無理のない尤もなことであつたと思ふ、こゝは耶穌と釋迦とに對する、その遺弟の信仰の非常に相違してをる所であらふと思ふ、釋迦は四十五年間説法の結果、極めて平穩無事に涅槃の雲に隠れたが、耶穌は僅にその頭角を社會に現はしてから、まだ三年になるかならない中に死なれ、殊にあられもない罪に陥しゐられて悲壯なる横死を遂げられたとき、居るから、其遺弟の教主を追慕する信念は實に非常な

ものであつたらうと云ふことは、今日からも亦容易く追想され得るのである。そこでこの感情の沸騰してその頂天に達するや、彼れ等弟子たちの信念中には、耶蘇が死んでから三日目に蘇生して、その墓場をぬけ出して天に昇つたと云ふ信仰が、いとなくじきに出來上つて來てしまつた。その天に昇つた耶蘇を弟子輩の中では、我れも見ただ彼れも見たと云ふ様にうわさとりどりになり、遂にその昇天した耶蘇は更らに天より降つて來て、再び此世に出て、泣き悲める彼れ等遺弟を慰め、親ら審判して善人を救ひ悪人を罰し給ふに相違ないと云ふ信仰が、彼れ等遺弟間に潮の湧くが如くに行はれて來ました。斯様に當時の使徒輩の宗教心、その宗教的信仰と云ふが如きものは、猶太教以外に將に一新機軸を出さんとしてをつたのであるが、その外形上の儀式作法の如きものに至つては、まだ猶太教と全然離隔したと云ふ譯けてはなく、猶太教のしきたりを餘程そのまゝ襲用してをつたのである。唯此間に立つて彼れ等教徒の一致團結の中心點をなし、その信仰の唯一焦點となつた所ものは、耶蘇てふ教主の觀念である。彼れ等遺弟は皆な同一教主に隸屬し、同一教主を奉戴してをる。同朋兄弟であるてふ所の觀念である。して又教主耶蘇がなくなられる前に、弟子等と共に袂別の盃を舉げられ、葡萄酒と麵麩とを以て刑れの盃をやられたが、此ことは當時を追憶する最もよき紀念であるから、遺弟はその教主の死後永く此紀念の會合を催し、互にその信念を修養しつゝあつたのである。これが

後世に發達する聖餐式の初めである。さうして此間貧者を憐み寡婦を衿み孤兒を恵む等の慈善事業は、彼れ等の實際やつてをつた宗教的生涯であつたのである。斯く一方には遺弟の信仰心があるし、之れに加ふるに猶太國に從來口碑傳説として行はれ來つた、教主メツシアの考などを以てし、さうして遂に是れ等の信仰と傳説との二方面から教主耶蘇の一身を考察するよりして、遂に今日我々が新約全書の馬太傳や馬可傳や路加傳等に見る如き耶蘇基督の人格を生み出したのである。して是れ等の書物は先づ耶蘇が死んでから、百年弱に出來上つた書物である。決して耶蘇の傳記として耶蘇在世中に出來てをつたものではない。矧んや耶蘇自ら筆を執つて書いたのではないと云ふことは申す迄もなく、又是れ等の書物は前に云ひました通り、主として當時遺弟の信仰の眼を以て書いたものであるから、無論純粹の歴史的傳記の書物でないといふとは無論である。

耶蘇の高弟でありますヘテロは、彼の耶蘇は十字架上に磔殺されてから、三日たつて昇天せられ、さうして我等の教主即ち基督(メツシア)となられたと信じてをりました。ポロも亦此事を確信してをりました。然し耶蘇の弟子達が耶蘇を思ひ慕ふ精神の熾んなることは、中々是れ丈では足りませんでしたから、尙ほ進んで、抑々耶蘇は耶蘇の聖母マリアが、その夫の胤を宿したのでは無く、精靈の感化に由つてマリアの胎内に宿つたのが耶蘇であると考へて來た。そこで耶蘇がパプテズマの

ものであつたらうと云ふことは、今日からも亦容易く追想され得るのである。そこでこの感情の沸騰してその頂天に達するや、彼れ等弟子たちの信念中には、耶穌が死んでから三日目に蘇生して、その墓場をぬけ出して天に昇つたと云ふ信仰が、いつとなくじきに出來上つて來てしまつた。その天に昇つた耶穌を弟子輩の中では、我れも見れば、彼れも見たと云ふ様にうわさとりどりになり、遂にその昇天した耶穌は更らに天より降つて來て、再び此世に出來て、泣き悲める彼れ等遺弟を慰め、親ら審判して善人を救ひ悪人を罰し給ふに相違ないと云ふ信仰が、彼れ等遺弟間に潮の湧くが如くに行はれて來ました。斯様に當時の使徒輩の宗教心、その宗教的信仰と云ふが如きものは、猶太教以外に將に一新機軸を出さんとしてをつたのであるか、その外形上の儀式作法の如きものに至つては、まだ猶太教と全然離隔したと云ふ譯けてはなく、猶太教のしきたりを餘程そのまま襲用してをつたのである。唯此間に立つて彼れ等教徒の一致團結の中心點をなし、その信仰の唯一焦點となつた所ものは、耶穌てふ教主の觀念である。彼れ等遺弟は皆な同一教主に隸屬し、同一教主を奉戴してをる。同朋兄弟であるてふ所の觀念である。して又教主耶穌がなくなられる前に、弟子等と共に袂別の盃を舉げられ、葡萄酒と麵麩とを以て別れの盃をやられたが、此ことは當時を追憶する最もよき紀念であるから、遺弟はその教主の死後永く此紀念の會合を催し、互にその信念を修養しつゝあつたのである。これが

後世に發達する聖餐式の初めてである。さうして此間貧者を憐み寡婦を衿み孤兒を恵む等の慈善事業は、彼れ等の實際やつてをつた宗教的生涯であつたのである。斯く一方には遺弟の信仰心があるし、之れに加ふるに猶太國に從來口碑傳説として行はれ來つた、教主メツシアの考などを以てし、さうして遂に是れ等の信仰と傳説との二方面から教主耶穌の一身を考察するよりして、遂に今日我々が新約全書の馬太傳や馬可傳や路加傳等に見る如き耶穌基督の人格を生み出したのである。して是れ等の書物は先づ耶穌が死んでから、百年弱に出來上つた書物である。決して耶穌の傳記として耶穌在世中に出來てをつたものではない。矧んや耶穌自ら筆を執つて書いたのではないと云ふことは申す迄もなく、又是れ等の書物は前に云ひました通り、主として當時遺弟の信仰の眼を以て書いたものであるから、無論純粹の歴史的傳記の書物でないといふとは無論である。

耶穌の高弟でありますペテロは、彼の耶穌は十字架の上に磔殺されてから、三日たつて昇天せられ、さうして我等の教主即ち基督(メツシア)となられたと信じてをりました。パウロも亦此事を確信してをりました。然し耶穌の弟子達が耶穌を思ひ慕ふ精神の熾んなることは、中々是れ丈では足りませんでしたから、尙ほ進んで、抑々耶穌は耶穌の聖母マリアが、その夫の胤を宿したのでは無く、精靈の感化に由つてマリアの胎内に宿つたのが耶穌であると考へて來た。そこで耶穌がパプテズマの

ヨハネから洗禮を受けられて、ヨルダン河の水より上られた時には、精靈は鴿の形を以て降つて來天上よりは聲あつて、こは我が心に契ふ我が愛子なりと稱へられたと云ひ囁して、主耶穌を以てその生るゝ時からして、既に人間以上の存在者と觀じ死んでから初めて天に昇つたのでは無くつて、天から降つて此世に來た、神の遣されたものであると信ずる様になつて來て、遂に耶穌を以て神と二身同躰であると考へる様になつた、さうするところ、起つてくる第二の問題は、何ぞ神は自分が態々この世に降生させた耶穌を、僅か三年間の短日月の中に、敵の毒刃に罹つて敢へなき最後を遂げしむる様な非道なことをしたのであるか、これでは自然神がその神子を切角降生せしめた目的を、達する譯にいかなかつたてはないかと云ふ問題である、此問題に對して當時の遺弟は、ポロロと同一耶穌の十字架上の横死は、全く吾人々類の祖先が神に背いて犯した遺傳罪を贖ふ爲の義死である、志士仁人が身を殺して、以て善を爲す所の、最も理想的最高標本である、それは全く人類贖罪の爲めであるとかう解釋して來たのである。

耶穌の説法された場所は、申す迄も無く猶太國であつて、猶太國以外には寸歩も出てをられなかつたのである、然し元來耶穌の新福音は、既に業に獨り猶太人丈けに教ふる所の宗教ではなくつて、世界萬國の民に教ふるのを目的としてをつた所の宗教であつたけれども、如何んせん人は多少境遇事狀の爲めに、左右せらるゝと云ふことは、得て免るゝことの出來ないものであるからして、その教旨こそは既に世界的であれ、その實際の有様はまだ世界的にはなつてをらぬことが多くあつた、然るに基督教をして全く此臭味を脱出して、眞に能く世界的たる使命を全うせしむる様になつたのは、ポロロの力であると云はなければならぬ、勿論耶穌の直弟子十二使徒中その最高弟はペテロであるが、ペテロは主として猶太人中に基督教を宣傳してをつたので、まだ世界萬國に基督教を布教するにはどうしたらよからふなどと云ふことは餘り注意してをらなかつた、然るに主としてこの事業に一身を委ねたのは、異邦人の使徒と稱せらるゝポロロその人である。

ポロロはその初めの名をソールと云ひ、小亞細亞のタルソスに生れた人である、最近歴史家の考證に據れば父は希臘人であつて母は猶太人であつたと云ふことである、それであるから氏自らも初は、パリサイ教徒であつた、従つてガマリエルなる者に師事して深く律法を學び、猶太教の敵であつた、基督教徒を殄滅することを以つて、自分一生の事業としてをつたのである、そこでポロロは一日偶々基督教徒を迫害せんが爲めに、ダマスコス府に行きました、が、其途中で耶穌の亡靈がポロロに現はれたと信じて、此に無限の神啓に接し、翻然先非を後悔して、基督教徒となり、その先きに基督教を誹謗した舌を以て、神の福音を宣傳し、基督教徒を迫害した手を以て、信者を基督教に引き入れる具に供したのである、思ふにこのポロロと云

ふ人は非常に神經の過敏な人であつたと見える、そこで當時耶穌は不幸にして、非業の横死をゴルゴタ山の十字架上に遂げ、従つて其遺弟の悲嘆愁傷の状は、到底一と通りや二通りではない、牧者既に撃たれて綿羊の四方に散亂するが如く、その遺弟は教主の死と共に、泣く／＼四方に流離散亂するの宥様を實地に目撃するに至つては、是れ迄パリサイ教徒として基督教徒を迫害したもの、元來神經質なるポーロは、一片同情の熱涙に咽ばざらんやである、斯かる心を以てポーロは基督教徒に接してをつたから、知らず識らずの間夢幻の中に耶穌が現れて、基督教徒迫害の爲めにダマスカスに赴くポーロの途を遮つたと考へたのであらう。

かう云ふ工合に俄かの出來事からして、ポーロは基督教徒になつたのであるからして、ポーロはまだ一度も生前耶穌の音容に接したことがなかつた、そこでポーロはペテロなどの様に、耶穌の實際の人格的感化に逢つたことは、一度もなかつたのである、かう云ふ風であるから、ポーロは耶穌の生前の説法よりか、寧ろその死後の實狀特にその耶穌の非業の横死と云ふことに深く感動して、その死を以て信仰の中心點となす様になつた、そこでポーロに至つて、その後世に發達す可き基督論即ち基督神子論が、既に業にその萌芽をもつて來たと云ふても差し支へないと思ふ、さうして又ポーロに至つ初めて基督教徒が獨り猶太人ばかりを相手としてをらずに、眞に世界萬國の民を、斯教の信者とするに至る所の、世界的基督教なるものが、全

く此に現れて來たのである、ポーロの説に由れば、耶穌は元來人間であつて、それが一朝磔せられて十字架の上に不幸の死を遂げたのは、眞に吾人々類の罪に代つてお死にくだすつたのである、人類即世の罪人一般に對する救の爲に、人類一般の代償として死なれたのである、耶穌の死は吾人々類の爲めの贖罪である、則ち所謂義死である、従つて耶穌の死は猶太一國民の爲めに、代償的贖罪の死を遂げられたのである、元來人間であつたのが、死んでから初めて昇天して、神と同位置に上つたのである、なくつて、耶穌はまだ死なな以前、生れない先きから、既に神と共に住んでをられたのである、耶穌は實に神の愛子である、神の生き寫してある、一切人類の道德上の理想である、當時の宗教的哲學者輩の思惟してをつた、神の別かれてある所の、ゴス(ロ)ゴスと云ふは先づかう云ふ意味で、則ちロゴスとは希臘語の言葉と云ふ、(ロ)ゴスの字、それが色々な意味に用いされて來たのであつて、後にはロゴスとは手取早く云へば神子と云ふこと、同である、かう云ふ風に考へて來た、か様の意味に用ゐられる機になつたので、同である、と、かう云ふ風に考へて來た、かう考へて見れば、耶穌基督と神とは二にして而かも一々にして二と云ふ様になり

基督の神とは二身同體であると云ふ様に考へられて來たのである。

既に述べました通り、耶穌は吾人々類の思想である、吾人々類が日々手本とす可き所の偉大なる聖賢であります、耶穌は實に吾人々類に代つてその罪を償はんが爲めに十字架に義死したのである、然るに吾人々類は耶穌がその一死以て吾人々類

に與へてくれると云ふ、その救の恵に吾人々類は如何にして沐浴することが出来るか、吾人々類は如何にしてその救の恵を受け容れると出来るかと云ふ問題に答へて、ポロは一方ではパリサイ教徒の律法的立脚地からして、之れを解答したし、又他方に於ては、ポロの信心深い道徳心からして、之れを解釋してをる、抑々パリサイ教徒の教ふる所の律法に由れば、強いものは弱い者の代はりになつて、その義務を果してやる事が出来るとなつてをるのである、それであるから、耶蘇がその一死以て、人類全體の爲めに代つて、人類全體の罪惡を償はれたと云ふことは、無論尤もなことである、然しポロは尙ほ斯かる律法的立脚地のみからして、耶蘇の死を觀察しないで、更らに一層深遠幽邃なる觀察點より之れを解釋したのである、してこの深遠幽邃の立脚地と云ふのは、前にも云つた通り、氏の信心深き純潔なる道徳心から來た解釋である、こゝがポロの天才の現はれてをる所、又その特色の存する所なので、基督教が猶太教以上に秀で、その發達進化を完成する様になつたのも、實にポロのこの手腕に由ることである、則ちポロは吾人々類が神の恩恵に沐浴し、その天恵を受容し得る所以のものは、一に吾人々類の信仰の力に由る、主耶蘇基督を信頼するに在る、神子基督との精神的親交を爲すに在る、天父の神愛によりすがるに、赤子の如く從順なる真心を以てするに在る、尙ほ別の辭で云ふならば、救主の意を我が心に體認して、基督の心を以て心となし、かやうにして以て吾人

の宗教的道徳的精神を一洗するに在りて存するのである、尙ほ別の辭で云つて見れば、吾人々類の天性汚れた、きたない私慾の情を一洗し、肉の汚を捨て、靈の清きに歸し、神子基督の如き純潔なる道徳的人類に生れ更はることである、斯くして初めて吾人は基督の救に遇ひ、神の天恵に與かることを得るのである、かやうにポロの信仰はその要は吾人々類の道徳的性質の改良刷新と云ふことである、純潔高尚なる信心深い道徳上の理想を以て、その精神要義としてをるのであるから、ポロの基督教は到底猶太一國のやうな、狭まゝい範圍の内にとぢこもつてをる可きではない、それは遙に廣い世界萬國の民の中に宣傳せらるゝに、少しも差支へなきものとなつて來た、是れポロが基督の中には猶太人なく希臘人なく奴隸と自由民との區別なく、男なく女なしと宣言した所以である、かう云ふ風に吾人々類が赤子の至情を以て、天父の愛に信頼することを以て、教の本義としてをるポロの普遍主義が、猶太教の束縛を脱し、律法的偏狹主義の拘束を離れて世界的となり、一切の人類を以て同胞兄弟と見做し、何人も天父なる一神の御前に立つては、兄弟姉妹である、と云ふ、一視同仁博愛平等の主義を鼓吹する様になつたと云ふことは、決して偶然でないのであります、ポロは斯かる道徳的博愛の精神を以て充されたる信者の團躰を稱して、基督の躰と稱しました、基督教信者の團躰たる教會は、則ちこの基督の躰であります、そこで又ポロの様に、天國を以て吾人々類の道徳理想の圓

満した境界を指すのであると、かう云つた以上は、此に又原始時代の基督教に往々見るが如く、耶穌は又じきに再び此世に降つて来て、自ら此の世を治め、天國の親政を初めらるゝと云ふ様な、秘怪的な夢想に等しき信仰は、直ちに廢滅に飯し去る可きである、このことはポロ、自らその書簡中に於て、信者中には不心得にも謬つて、斯かる秘怪的に耶穌の再來を信仰してをるものを、堅く戒められた位である、然し斯くの如く基督教を解するに、純乎たる道德的立脚地に立ち、四海同朋てふ一味の信仰に躰達直入するは、獨り能くポロの普遍主義世界的宗教のみ能くなし得可き所のものであつて、從來の如く猶太風の偏狹的なる國民的宗教を奉ずるの徒に在つては、百年解することの出来ない事柄であります、是れは獨りポロの手腕を藉り、その普遍主義のみ能く、基督教をして世界的たらしむるの實を擧げしむることを得たのである、して見れば基督教に取つてはポロの感化影響と云ふものは、眞個に偉大なものであると云はなければならぬ、ポロが自ら我れは耶穌の直弟子ではないけれども、能く使徒と稱するの資格あるものであると公言して憚らず、さうしてその自己の普遍主義を遂行して世界的の基督教を弘通することを以て、畢生の目的としてをつたのは、決して偶然のとてない、ポロはアティーンのアレオ岡上にて知らざる眞神の福音を異邦に傳へて以後、常に猶太以外の布教を努めたが、ポロは羅馬に布教中暴主ネロの爲めに、紀元後六四年頃遂にその毒手に

に罹つて死するに至つたのは、返す々々も残念なことであつた、斯くの如く基督教が羅馬帝國傾の中に弘まつた當時と云ふものは、基督教は非常なる迫害を蒙り、紀元第四世紀コンスタンチヌス大帝が基督教を羅馬帝國の國教とさるゝに至る迄は、政治上からも哲學者の側からも基督教徒の迫害されたことは、筆紙に盡せないのである、基督教の殉教者として命を殉じた者の數も實に莫大であることを記憶せねばならぬ。

上に述べました通り、ポロを初めとして、既に原始基督教徒の中に於ても、耶穌は十字架上に磔殺されました後、三日たつて直に昇天して神の御前に至り、神の座下に昇つたと、かう信ぜられてをりますのです、既にかう云ふ信仰にして成り立つたとしますれば、今はその順序を轉倒して、耶穌は元來神の子であつて、神と共に太初より天國に居つたのであるが、それが人類の罪を救ふ爲めに天から降つて来て、三年間説法してその最後遂に十字架上に磔殺されたのであると、かう信じても差し支へないとならう、則ち耶穌は元と我れ々々と同じ人間であつたが、それが十字架上に磔殺されてから、直に昇天して神の御前に行つたと、かう云ふ信仰があれば、それを更らに一步進めて、否、耶穌は元とから人間ではなかつたので、太初から神と共に在つた神の獨り子なるロゴスであつたのである、それが權に人間となつて此世に降生し、人類一般の罪を救ふ爲に磔殺されて死んだのであると、かう解釋する

様になつてくると云ふとは自勢の勢であらう、今かう云ふ風に、耶穌の一身を觀察する様になつた所の思想を代表してをる者は新約全書中第四の福音書ヨハネ傳である、この福音書は紀元二世紀の初めに出來た書物で當時の希臘哲學に通曉した基督教徒が編纂した、一種の基督神子論であると云ふのが現今學者の信じてをる説である、ブライデラー氏の如きは此の説である、約翰傳の考に由れば、耶穌は此世界にて神を代表せし者であつて、即ち神子である、ロゴスが肉身を得て、人となつたものである、それであるから、まだ神を見た人はないけれども、神はその獨り子たる耶穌基督に由つてよく現はされてをるのであると云はるゝ所以である、それだから約翰傳にかう云ふとを云つてをる、未だ神を見し人あらず、唯うみ給へる獨り子すなはち父の懷にあるものゝみ之れを彰はせりと、かう云つてをる、ロゴス即ち基督は此世の救主であつて、此世は元來神と惡魔との争闘場である、罪と惡との修羅場である、肉體と靈魂との争ひ場所である、そこで吾人々類は如何にして此罪をのがられ、肉體の汚れを去つて靈魂の聖に就くとか出來るか、と云ふに、當時の希臘風の哲學者に由れば、或は禁欲主義の實行を勧めるとか、或は秘密修法でも教ふるであらうが、神はその罪より人類を救済し、肉の汚れを去つて精神の聖に至らしめんが爲めに、神子基督を態々此世に誕生せしめたのである、耶穌が十字架上に流されたる血は、實に人類一般の爲めにその罪を洗滌せられんが爲めの義舉である

と、かう教ふるのが基督教である、して神子耶穌基督が磔殺された後に於ても神は聖靈をこの世に止めて信者永久の榮となし給ふのであるから、基督教は耶穌の死刑と共にその終を告げたものではなくつて、耶穌の死後尙は永遠にその發達開展を成し遂ぐるのである、してみると云ふと基督教は耶穌の死を以て終つたのではなく、却て耶穌の死を以つて初まつたものと云はなければならぬ、かやうにして基督教の發達進化は、未來永劫無窮にして終極する所ないのである、既に基督教にして耶穌の死と共に終つたのでなく、却て耶穌の死を以て其起點として、夫れ以後永遠に發達開展して行くものであるとすれば、基督教は又耶穌の以前に於ても早く既にその萌芽は此世に存在してをつたと見なければならぬ、換言すれば基督教は早く既に、基督教以前の猶太教の中に、その根底を有してをつて、それが基督教になつてから、大に發展したと云はなければならぬ、してみればモーゼの律法や猶太教の豫言者の教は、亦基督教に先つて存してをつた基督教であつて、猶太教は基督教の將來に發展す可き素因を成してをる者である、従つて猶太教は基督教に先つて存してをつた基督教と謂つてもよいのであります、之を要するに約翰傳の思想は、希臘哲學に通曉してをる基督教信者が、基督教思想と希臘思想とを融合調和し、希臘の哲學風なる無形のロゴス思想と有形なる耶穌基督の一身とを、合同一致せしめ、耶穌の一身を觀るに形而上學的立脚地を以てし、さうして進化の思想

を以て基督教を解釋し基督教と希臘哲學とを打つて一丸とせんとしたものでありますから、その見解は哲學的であると同時に、又宗教的であると、形而上學的(思辨的)であると同時に直覺的であります。

こゝで一寸話はわき道へ這入るが、基督教が希臘思想から蒙つた影響に由つて、所謂中世の基督教が出来る工合を見やうと思ふには、先づ希臘羅馬それから北歐民族の宗教思想を知らなければならぬから、先づこれ等諸國の宗教思想を一寸こゝで述べておかうと思ふ。

第七章 希臘の神話的宗教及びその哲學の影響

先づ希臘の宗教はその最も古き時代に於てはどんなものであつたらふかと云ふに、今日遺つてをる古器物に徴し、古文書(主としてかのホメーロスの詩篇)中の文辭を能く味つてその文面以外に存する意味を考へて見るに、太古希臘の宗教は、精靈崇拜であつたに違ひない様である、さうして精靈崇拜と云つても、殊に死んだ先祖の靈魂を崇拜する所の、祖靈崇拜であつた、即ち詩人ホメーロス(紀元前一〇〇〇頃)のイリアドやオヂッセーなど云ふ書物を讀んでみると、パトロクロスと云ふ勇者の戦死を傷んで、厚く葬るときが書いてあるし、ミユケーナイと云ふ所の古墳の中には、死者に贈るその裝飾品を、多く埋めてあるのを見れば、人の死んだ後、その靈魂

の存在してをることを信じてをつたことが分かる。

死んだ人の靈魂は、そが生前愛してをつた所の者には、幸を與へ、その憎んでをつた所のものには、禍を送ると云ふことも、信ぜられてをつた若し人ありて、その親戚朋友と云ふ様なものが、他人の毒手に罹つて、殺害でもされたときは、その殺された靈魂の怒を鎮める爲めに、是非復讐(たがひ)をしてやらなければならぬのである、人が畢竟家族を有ち、父がその子供に財産を傳へ、子供が成長してから、婚姻をするのも、亦結局その死後、我が靈魂に供物を具へ、己れの死靈に不便を感ぜぬ様にしてもらひたいからである。

希臘人は、死んだ祖先の靈魂の存續を信じてをつたことは、上既に述べた通りであります、太古草昧の世、人々の知識がまだ進歩してをりませぬ時代でありますから、彼の活動してをる所の者は、何んでも蚊(か)でも、人間と同じ靈魂をもつてをるものであると、かう信じてをりました、そこで山でも川でも森でも野原でも、草食ふ牛羊、造一切人間と同じ様に靈魂をもつてをると考へる様になつて來ました、この信仰は又餘程發達した後世の希臘の宗教思想中にも、その痕跡を止めてをりました、彼の立派な神々も、もとは是れ等の山や川や森や野原や牛や羊などの精靈から進化して、こゝに至つたのでありますから、やゝともすると、そのお里(あた)が現れまして、立派な神々もその靈魂からして進化して來た所の元の動物に、一時なりとも變形する

ことがありますが、ツオイス神と云へば、希臘の唯一至上の神であるのですが、そのツオイス神が時々、鶯の相形ウツクに變るのは、この適例であります。其外ポサイドーンと云ふ神は、馬の性質を具へてをるし、アポローンと云ふ神には、狼の性質の有るのも、亦この例證でしやうして、又是れは同時に、希臘の宗教は、トテム崇拜とも、非常に密接な關係があつたと云ふことを、反證してをります。ツオイスの神木が、樹カシで、アテーネーの神木が、オリブ樹であることより考ふれば、是れ等の神が、元と是れ等の樹靈であつたことが分かる。其外パンは、森の樹靈から來た神で、ニエムフェーは、河靈の神で、サチエロスは、野の樹靈から起つた神である。特に地の神としては、ゲーとか、デーメーテルとか、ペルセフォネーとか、云ふ神があるが、是れ等は、地に豊饒を播く神であると同時に、地下に埋葬せられた、死人の靈を護る神である。ハイデースも亦地下の神で、即地獄の閻王である。して、恐くこの地下の神は、地上の神即ち土地の神からみると、後に出來たものであつて、畢竟地が五穀を實カのらせて、豊饒を與へてくれるものだから、そこでその地の靈を神として、此にゲー神など、云つてをつたのが、更らに地下に降つて、死人の行く地下、即ち地獄の神となつたのであらう。然るに是れ等の神も、段々時代の進歩、世の進むに伴つて、發達して大變立派な性質をもつ様になつて來たのである。彼のアテーネーの如きは、初は、確にアテーネー府のアクロポリス岡の山靈に過ぎなかつたのであつたが、後にはアテーネー府の膨脹と共に、

全市を守る女神となり、アテーネー府民が、尙ほ小亞細亞の沿岸に殖民する様になつてからは、アテーネー府民の守護神は、又イオーニアの殖民地を守る保護神となつた。かう云ふ風にして、昔は極一地方々々に限り、極一局部に偏して、その小局部の守護神であつた所の神々も、段々進化して、廣い範圍を守る神となり、従つてその神の性質も、追々理想的に、立派になつて來て、遂にホメーロスの詩篇などに現はれる様になつてからは、非常に麗はしい宏大な神格となつて來たのである。然しかう云ふ宏大な神格も、そのもとを質せば、皆な人靈ヒトコの様に、天地間にうろつきあるいてをつた精靈であつたのである。

初めの程は、名も知れない、山や川や岡や森や野に、さまよつてをつた精靈を、愈々立派な組織ある神格に造り上げたのは、全くホメーロスと云ふ人の、詩的天才の功である。勿論彼の所謂ホメーロスの詩篇なるものは、一人の手に成つたものでなく、多くの人の作に出たのであらうが、兎に角ホメーロスが組織ある神格を造り出したのは、確に希臘の宗教に於ける、一大革新の行はれたものと、謂はなければならぬ。それと云ふは、このホメーロスの前、即紀元前一〇〇〇年頃に當つて、希臘國に有名なるドリアン人の移轉と云ふことがあつて、その社會上の有様に、一大新面目を開き、諸方の邦々を征服して、殖民事業又その緒に就かんとしつゝある時であつた。そこで社會上の改革が、かう云ふ風に行れてきたにつれて、宗教の改革も是非起らぬ

ばならないのである。今この必要に迫まられて、表れて來たのが、ホメーロスの新組織を興へた宗教である。

ホメーロスが新組織を興へた希臘の宗教に於ては、その主なる神は、ツォイスである。ツォイスは一切諸神の首長と崇められてをる。ツォイスは印度のドヤールウスと同じく、その語義は天と云ふことであるが、この天と云ふ意義は、早くからして全く忘却されてしまひ、從てツォイスは天の神ではなくつて、ツォイス、クトニオスと云つて、下界の神となり、或はツォイス、エナリオスと云つて、海の神となつた。しかのみならず、希臘人のツォイスと云ふ語も、遂に亞刺比亞人のアルラー、波斯人のアフラと同じく、個々の神の固有名ではなくなつて、一般に神と云ふ普通名詞の様になつて來ました。各地方々々の人民は、皆其地方特有の、山や川や森等の神を、ツォイスとして崇拜してをる。そこでツォイスは是れ等の特種の神々からして、抽象して造り上げられた神であるから、大變普遍的な高い神になつて來ました。ツォイスは一切の神一切の人の父であるとして云はれたのは、是れが爲めである。

斯く國家組織が整頓完備してくると共に、ツォイスは斯かる尊い神になつたが、其昔農業を一番尊んでをつた時代に出來た地の女神デーメーテールの如きは、扱けられる様に至つたのは、決して偶然でない。そこで又ツォイスに繼いで高貴なる神は、アテーネー及アポロロンである。アテーネーは元鷓鴣の神化に外かならぬ所の神であつたのに、その後智慧の神となり、アポロロンも羊の神に過ぎなかつたのだ。が、今は音樂の神となり、其宣託は以て國家の大事を決する時の、重き價值を有する者となつて來た。野原の神に過ぎなかつたヘルメースは行旅の先導者となり、死人の靈魂の嚮導となり、商人の保護神となつた。從來は唯馬の神に過ぎなかつたポサイドロンは、又騎武者の保護神となり、レームノスと云ふ火山多き山地に、崇拜された。ヘーファイストスは鍛工の保護神となつた。

かやうにホメーロスの宗教に於ては、その神は一定の組織を得て、その性質非常に高尚となり、從來の樹靈山靈川靈、その他風伯雨師の如きは、皆な一定せる人間の形體と性質とを得るに至つたので、あります。元來詩人の手に由つて組織せられました。ホメーロスの宗教に於ては、その神々の性質、兎角美的に秀越してをるけれども、道徳上から眺めて見れば、幾多の缺點を有し、非難さる可き點が頗る多くあります。例之神にして詐偽を行ひ姪欲に耽り、毫も正義公道を守らないで、自己の愛憎好惡に由つて、賞罰を行ふが如き、何れも皆な道徳上の缺點であります。是れその後、エレア學派の哲學者クセノファネースが、ホメーロスの教ふるが如き不徳不倫の神は、眞實の神でない、と非難した所以であります。

人間のこの世界は、不公平の世界であります。善人が苦んで悪人が却て快樂を縱にしてをると云ふ、轉倒の世界であります。然るにこの不公平の世の中に於ても、神様

だけは至極公平で、神は正義を重んじ、必ず善人を賞して、悪人を罰し給ふのであるとかう云ふことがあつてこそ、初めて人々その堵に安んずることが出来る譯けてあるが、今ホメーロスの教へてをる神は、さう云ふ點にかけては、少しも信用が出来ぬ、甚だ不公平な神であるから、そこで世の中が何んとなく味ぢ氣なくなつて來て世の中には一昧全體何ぜこんな悪と云ふ様なものがあるものであらうかと云ふ疑問が起つてくるのである、是れは實に必然の理數であり、そこで紀元前八世紀の頃に於て、ヘーシオドスと云ふ詩人が出て、大にこの疑問を解釋しやうとしました、則ち世の中に害悪のあるのは、プロメーティウスと云ふ者が、天から神の火を盗んで、それを人間にもつて來て與へたから、それとツオイスが怒つて、諸有害悪を一の箱の中へ詰め込んで、それをこの世に送つて來た所、プロメーティウスは疾くに其事を知つてをつたから、その箱を受け取まいとしたが、プロメーティウスの兄弟のエイビメーティウスが、其箱をもらつて、その蓋を明けてみた所、その中から、諸有害悪が飛び出して、暫くの中に世界中に蔓延し、その結果世の中に害悪が出來たとかう説明してをります、或は又此世界の變遷を以て、五期に分ち、第一期は金世界、第二期は銀世界、第三期は眞鍮世界、第四期は神人世界、第五期は鐵世界であると云ひ、今やその鐵世界の時代であるから、人心は冷酷であつて、人情は紙より薄く、一切の害悪は世界に充滿してをると説いて、是れに由つてこの世の中に、害悪の存する理由を説明し

てをります、要するにヘーシオドスの時代はホメーロスの時代に比べると、一層社會が複雑になつて來たから、人生の不幸、浮世の不如意に感じて、ヘーシオドスは斯かる説を立てたのであらう、その外ヘーシオドスはホメーロスに一步を進めて、ホメーロスの様に、純粹に神話のみからして、天地の開闢や、神々發生の順序を、説明せず、更に進んで不完全ながらも、多少思辨を雜えて、天地開闢説や神統記を構成したのである。

希臘のデルフォイにあるアポロンの神殿は、希臘人がその神アポロンの神託を請ふ所の聖地であります、デルフォイは元ビュトーンと云ふ地靈の住んでをつた所で、昔からビュトーンの神託を得る場所となつてをつたが、後ち一の傳説が出來て、アポロンの神託がビュトーンと云ふ大蛇を退治したといふ神話が生じ、讀者は我國の神代に須佐之男命が出雲の肥河上にて足名椎手名椎の爲めに八俣遠呂智を退治されたことを思ひ合はされたし、遂にデルフォイはアポロン神の住んでをる聖地と云ふことになつた、さうしてその神託を請ふにも、其初めビュトーンの神託を受けてをつた時分は勿論、アポロンの神託を受ける時代になつて柄も有形上に卜占の様なことをやつて、神託を請ふてをつたのであるが、それが段々無形的に、佛教の禪定若くは三昧にても入る様な工合にやつて、神託を請ふことになつた、アポロンの神託を請ふことを掌つてをつた祭司は、ピュチアと云ふ女の巫であつ

た、是の女巫が丁度禪宗で云ふ三昧に入つて、身心脱落すると云ふ様な状態になつて、そこで髣髴として、アポロンの神の御夢告を得るのである。軍國の大事件は云ふ迄もなく、殖民事業にまれ、外國との條約にまれ、何んに由らず、アポロンの神託を請ふて初て決行するのである。それであるから、アポロンの神託は獨り希臘の宗教のみでなく、廣く一般の文明に大關係を有してをるのである。罪惡若くは瀆れと云ふことも、まだ純粹道德上の意味ばかりではなく、肉體の瀆れと云ふ意味に解し、神に對する罪惡とは、肉體の瀆れをも構はず、神事にたづさはるに在ると云ふ様に解し、釋し、従つてその肉體の瀆れを除く爲めに、水と火とを以て之れを洗ひ淨めるのである。それであるから清淨と云ふのは、重に肉體の清淨である。然しながら又清淨と云ふ罪の無いと云ふことを當時の希臘人は全く道德上の意味に解さないでもない。それはエビダウロスに在るアスクレピーオスと云ふ神の殿堂には、かう云ふ事が揭示してある。則ち神の宮に入ることを得る者は、獨り心の清き者に限ると云ふ揭示がしてあり、デルフォイの神の宮扉にも、善人は一滴の水でも能くその身を清めることが出来るけれども、惡人は縱令大海の水を傾け盡すも、尙ほ能くその罪を洗ひ清めることが出来ない」と書き附けてある。今是れ等の辭に徴して考へて見れば、デルフォイのアポロンの宗教は、餘程自然的宗教からして、倫理的宗教になりかけてをると云ふことが分かるであらう。アポロン神の祭日には、詩人は詩を賦し

て、それを公衆の前に披露してその技を闘はし、壯年の者は互に仕合しあひをやつて、自己の身體の發達、他人に勝さつてをる所以を誇るのである。それであるから、アポロン神の宗教は、希臘人の文學を發達せしめ、希臘人の身體の發育を奨むる上に於て非常なる助を與へたのである。彼の己を知れと云ふ哲學及び道德上の訓言は、デルフォイの神殿に高く標示せられた千古の格言であつて、ソクラテースの哲學の確く守つてをる金句であるが、之れと同時に又アリストテレスをして中府の徳と云ふことを説かしめたる、その中府てふ格言も、亦デルフォイの神殿の門扉に、疾くに既に印刻されてをる文字である。元來神殿や神像をもつてをらなかつた希臘の宗教も、アポロンの宗教に至つて、立派なる神殿の建築となり、華麗なる神像の彫刻となつて、現れて來たのである。それであるからアポロンの宗教は獨り希臘に於ける宗教思想の發達を助けたばかりでなく、文學美術建築彫刻道德學問と云ふ上に於ても、至大なる發達進歩を促す原動力となつたのである。

紀元前第六世紀の頃は、希臘の國民が非常なる進歩發達をやつた年である。則ち國家統治の基礎は出來上るし、諸方の殖民地は次第に繁盛して來るし、航海の業も開けるし、貿易も熾んになるし、府庫漸く殷富となつて、人民の自由思想は益々發達し、獨立の精神確乎として助かす可からざるてふ有様になつて來ましたから、學問の側に於ては、頓がてイオニアの天然哲學者を生むの準備をなし、宗教の側に於て

は、どうも何んだか在來の神話では満足が出来ず、物足りないと言ふ風になつて來ました。靈魂の歸着死後の運命と言ふ様なことに就いて、眞面目なる考察を回らす人々は澤山にふへて來て、結局ホメーロスの教へた通り、人界を離れて、天上高く懸け離れて居る、オリュムポス山の神々や、吾人靈魂の落ち着き場所は、影の如く朦朧たるハイデースの下界だと云ふ位のところでは、到底満足が出来ない様になつてきた。吾人はどうかして、神の本體に歸入し、冥合して、救れたい、靈魂の幸福を得たいと言ふ様な希望が續々として起つて來た。そこで先づデーメーテルやコレやデオニユッスと言ふ様な、下界の神が大變なつかしくなつて來て、先づ是れ等の神々を祭つた昔の儀式の、エロイシスに行はれてをたつたものを復興して來た。殊にデーメーテルは、其女コレを下界の神ハイデースの手から取り還したと云ふ神話があるものだから、この神話は人々死より救はれたいと言ふ當時の願望に投合して、遂に是れ等のデーメーテル、コレ、デオニユッスと言ふ様な神を祭る、太古の儀式から脱化して來たエロイシスの秘行と言ふ一種の宗教的儀式作法が生じて來ました。この宗教的儀式作法の發生こそ、實に希臘の宗教發達の上に、至大なる原動力となつたのであつて、人の能く知つてをる如く、從來の希臘の宗教は、所謂國民的宗教であつて、則ち希臘人と云ふ血統をもつてをる人へのみ限つて、その信者の團體に入することのできる宗教であつたが、此エロイシスの秘行に在つては、決してさう

でない、その儀式行事に與ることを得る者は、獨り希臘人に限つたことではない、如何なる人種でも構はない、奴隸でもよい、唯その人がこの宗教團體に加入しやうとさへ決心すれば、それによいのである。決して人種の異同とか、血統の相違とか云ふことには頓着しないのである。この宗教團體に加入しやうと思つた人が、豫め先づ己れの道德を清くして、身の罪惡の濃を去り、さうして靜に、一種の宗教的作法を行つて、神と感應同交せんことを謀れば、それによいのである。それであるから、このエロイシスの秘行に至つて、初めて希臘の宗教は國民的からして、世界的に遷り、偏狹主義を離れて、普通の宗教の關門内に、ふみこんだと言つても差し支へないのである。是れは丁度イスラエルの宗教が、預言者を待つて初めて普遍的となつたと同じことである。エロイシスの秘行には、人種の異同を問はず、奴隸でもなんでも構はない、皆なその信團に這入ることが出來ると云ふ所は、丁度使徒パウロが、基督教の普遍主義なることを稱道して、基督の前には男なく女なく、奴隸なく主人なく、希臘人なく猶太人なく、凡てが基督の中に於て、一に歸すと云つたのと、その思想符節を合すが如くである。してみればエロイシスの秘行は、實に希臘の宗教史上に、特筆大書す可き、一大進歩であると言はねばならないのである。

かやうな工合に、宗教上の思想は段々と發達して、高尚の域に進んで參りましたから、益々世界人生に關する疑問は、深く且つ多くなりました。世界はどうして出來て

來たのであらうか、人間はどこからやつて來てどこへ向つて去るのであらうか、人生に幸不幸と云ふ事實有るのは何ぞであらうか、抑々人間の運命といふものは、一瞬全體どう云ふ譯け合ひのものであらうかと云ふ様な疑問が益々ふへて來たのである、そこで當時是れ等の疑問を解釋するに、従前よりも一層進歩した説明法を採つたものは、彼のオルフォイス(實際あつた人物でない様です)と云ふ詩人の名前を冠して、オルフォイスの作と稱へて、世に行はれてをつた、一種の神秘的思想である、その思想が如何にも秘怪であつて、且つその作者の眞の名前が傳はつてないことは、丁度猶太思想に於ける黙示録と好一對であらふ、オルフォイスの神秘思想はヘーシオドスの世界開闢説(この天地開闢説に由ると、太初にカオスと、ガイアとタルタロスとエロースとあり、是よりして夜とか死とか天とか山とか海とか云ふものが出來て來たし、さうして天と地とからして、クロノスを頭として、澤山の巨怪即ちチタンを生じ、クロノスと女神レアとの間に、ヘスチア、デーメテル、ヘーラ、ハイデーイス、ポサイドーン等の神々が生れ、最後にツォイス神が生れた、然るに巨怪チタンとツォイスとの間に争闘が起つて、互にしのぎをけづつて激戦したが、遂にツォイスが勝つて、ツォイスはハイデーイス、ポサイドーンの三人と共に世界を分領してしまつたと説いてをるのである、讀者は我國古代の神話とを對照せよ)を、自家の藥籠中に取り入れて、而かもそれを自由に解釋し、餘程抽象的哲學風の意味を附けて、考へる様に

なつたのであるから、これは丁度アレキサンドリアの敎校の學者オリゲネスやクレマンヌを初めとして尙ほ進んでは彼のグノーシス學派が、聖書の神話を解釋するに、自己の哲學思想を以てしたと、同一である、即ちオルフォイスの神秘思想は、當時希臘に於る神話を、出來る丈高尙に且抽象的に哲學風に解釋して、その結果發生して來た産物であるとして、差し支へないのである、それでこのオルフォイスの思想は、希臘後代の哲學の發達に大影響を及ぼし、特にプラトーンの哲學に影響してをると思ふものは、決して少くないのである、オルフォイスの神秘思想に由れば、希臘從來の多神を皆一神に湊合統一して、唯一神教を立んとしてをる、そこでツォイスもハイデーイスもヘーラ、オースも、デオニユッスも、皆一つの神であつて、畢竟唯一つの神に歸着するようになるのである、して是等の神は、結局一つであつて、又同時に凡てを包含してをるのである、ツォイスは万物の初めてあり中であつて、又その終である、結局ツォイスの一神のみあつて存し、他の群神は皆ツォイスの一神に攝歸するのである、が云つてをる、デオニユッスはツォイスの息子神であるが、チタンの爲めに計られて殺されてしまひ、その身体はずだずだに切り裂かれてしまつたが、その靈魂丈はアテーネーと云ふ神の助で、消え失せる所の厄運を免れたが、ツォイスは再びデオニユッスを新に創造した、然るに又ツォイスは巨怪チタンを退治して、骨の灰になつたものと、チタンが殺したデオニユッスの身体こゝろの粉とからして、人間を

造たところで人間には神にさかちふチタンの如き悪性質と、又神と同性質なるデオニユッスの如き善良なる分子とが混合して出来てをるのである。であるからデオニユッスの分子は人間の靈魂精神であるし、チタンの分子は人の肉體である。であるからして、魂は肉體を脱して純粹に靈魂ばかりとならなければならぬ。してみれば肉體は靈魂を閉ぢこめてをく牢屋である。これは明に又プラトーンの哲學に影響した思想である。しからばその精神の牢獄である肉體を、吾人は如何にして脱するとを得るかと思ふに、それは吾人の道徳を能く實踐躬行し、肉體の慾を慎んで、禁慾的修行を爲すに在るのである。決して一時肉體を殺したからと云つて、それで以て靈魂の解脱と云ふ譯にはいかなないのである。たとひ自殺して肉體を一時殺したからと云つても、それでもつて靈魂は救れないのである。なぜなればこの場合には、靈魂は再び他の肉體の形を取つて表はれてくるからである。それであるから、靈魂の眞解脱を得やうと思ふならば、道徳の實踐躬行と禁慾主義の實行とに由るの外、別に途はないのであると云ふのが、オルフォイスの靈魂輪廻の思想であつて、婆羅門教の靈魂輪廻説と殆ど同一である。して又このオルフォイスの靈魂輪廻説も、婆羅門教の靈魂輪廻説も、共に太古の精靈崇拜の遺物であるのである。人間の靈魂は、かやうに肉體の牢屋に繋がれて解脱することが出来ずに苦んでをるが、吾人は少しもその事を知らない。尤るて赤の盲人である。それであるから、靈魂と肉體との關係を説いて、その解脱を得る道を教へてくれるものは、救ひの神デオニユッスと、その祭司の僧オルフォイスとである。さうして又信者がその救の恵に與かるには、秘密の修法を行ひ、禁慾主義を實修せねばならない。若し吾人にして、一たび斯かる秘法と禁慾主義とを實修した時は、未來福徳圓滿なる樂土に生れるし、さうでなくつて神を演じた行のあるときは、その罪罰に由つて、地獄に落つるのである。

以上略述した所は、オルフォイスの秘的思想であるが、この樂土と地獄との考は、又大に一般人民の信仰心を惹くに足つたと見えて、歸依者も多くあつたが、如何んせんその思想は新舊兩思想を譯けもなくつなぎ合はせた様なもので、少しもその間に思想の統一がなく、太古の迷信の分子を混じてをつたから尙ほ知識ある人々の信念を満足さする譯にいかなかつた。當時の知識ある人々は、かやうな秘怪的信仰に訴へて、安心立命を得ることは、到底もう出来なかつたのである。彼れ等は正に吾人の理性を十分に満足し得る所の、自然的なる知識からして、その安心立命の道を得んと希望しつゝあつたのである。

勢ひかういふ風になつて來ましたから、希臘の思想界には、超自然的の説明を離れて、世界宇宙のことを人間の知識に照らし、自然界に行はれてをる、自然の理法に由つて解釋しやうと云ふ企てが起つて來なければならぬ筈であります。それであるから、吾人の理性に無限の信用を措いて出發しました、イオニアの哲學が、

當年希臘の地に初て誕生しましたのは、決して偶然ではありません。然しながら、この紀元前第六世紀の頃に起りました、イオニアの天然哲學者は、自己の學說を組織するに急にして、また從來ありきたりの多神的宗教を攻撃するには至りませんでした。然るにエレア學派のクセノファネース氏になつてから、自分の哲學の立脚地からして唯一神教を組織し、神の唯一にして獨存全知の實在であると主張して、ホメーロスやヘーシオドスの教へた様な、人間の顔形かほかたちを有し、人間と同じ様な愛憎好惡の情に驅られ、人間の罪惡たる、詐偽姦淫竊盜をなすてう、從來の多神は、神にして神に非ずと論じまして、大に在來の宗教を攻撃しました。

然るに是れ等の攻撃よりも、尙ほ一層在來の宗教に取つて、危險であつたのは、當時宗教信者の間に、漸く將に行はれんとしつゝあつた宗教上の懷疑思想であつた。是れ等の懷疑思想が、クセノファネースの外部から來た宗教の攻撃よりも、尙ほ一層恐しかつたのは、是れ等の宗教的懷疑は、遂に宗教の信仰そのものを根底から破壊してしまふからである。則ち是れ等の宗教上の懷疑と云ふは、外かのことでもない、この世界に行れてをる、神の攝理に關する疑である。神は正しきものであるに、何ぜ正しい所の善人が、始終惡人から苦められ、善人は敗北して、惡人が勝利を占めるであらうか、神にして若し正しきことを好まるゝものであるならば、是れ等は不公平の所行ではないか、何が故に正義の神は、善人に與みし給はずに、惡人を助け、惡

が勝つて善の敗北に終らしめ給ふか、嗚呼かうして見れば、斯かる神は果して有るのであるかどうか、と云ふ、正義の神の攝理に對する懷疑である。正義の神の存在に關する疑である。是等の懷疑は、今や正に希臘に於ても、イスラエルに於けると同じ様に、漸く盛んならんとして來たのである。テオグニステオグニスの如き既に斯かる疑問に懊惱されてをつた。然しながらアイスキュロスは、善人が苦み、惡人が却て榮えるのは、所謂親の因果が子に報つたのであつて、善人の父祖の中に、惡人があつて、その父祖の爲した惡事の結果が、その子孫に報つたので、惡人の子孫たる者は、如何程善根功徳を積んだとしても、その父祖の爲した惡事の罪亡ぼしをし終らん中は、苦禍を得るのである。之れに反して今日惡人が幸福に暮すのは、その祖先の中に、善人があつて、善根功徳を積んだ果報で、以て、現に今惡事を働きながらも、尙ほ幸福に暮すことが出来るのである。かう考へた、是れは丁度イスラエルの律法が、親の因果が子に報う、汝等の祖先が酸い葡萄を食つた爲めに、汝等子孫はその因果で、今こんなには齒がういた罰を蒙つたのである。と、かう云つたのと、同じである。然しかう云ふ思想は、永く續くものでない、イスラエルでもさうであつたが、希臘でも亦同じとである。段々個人の獨立、個人の自由、個人の位置と云ふものが認められて來た後は、個人の責任と云ふことも、亦段々明になつて來て、自分でやつたことは、亦必ず自分で責任を以て、その結果を負はねばならない。従つて又他人のしたことは、我が身が引き受ける

に及ばないのである。所謂自業自得、自因自果と云ふ者が、非常に勢力を占める様になつてくる。かゝらなつてくると、最早や親の因果が子に報うと云ふやうな説明法で、善人が不幸に苦み、悪人が時を得顔に、跋扈することを、説明し氷釋し去るの、理由とはならないことになつてくる。イヌラエルの豫言者、既にこれを云ひ、希臘の詩人ソフォクレース亦この論者であつた。そこでソフォクレースは、イヌラエルのヒオプ書の記事と同じ、斯く善人が苦み、悪人が榮える世の中ならば、人は生きてをるより、寧ろ死んだ方がましである。幸福の頂上は、生れぬにしかず、若し誤つて生れ出たとすれば、早く再び生れぬ前の元と来た家にもどるに若かず、この方が生きてをるよりか、餘程幸である。と云つた。この辭は實に舊約聖書中の傳道書の書の中に云つてある。一切皆な虚し、世は凡てあだなりと觀じた、厭世的、人生多苦觀と、丁度軌を一にしてをるのである。さて又オイリビデースになると、尙一步進めて、斯かる不正不義、不公平極まる神を目して、誰れか又た神と稱せん、神にして尙ほ且つかう云ふ不正不義、不公平極まる代物であるならば、吾人は將た何れの邊にか正義公道の行はるゝの領土を求めんや、之れをしも尙ほ人は世に神ありと稱するか、否なや々世には最早決して神は無いのである。と、かう斷言して憚らざるに至つた。オイリビデースの宗教的懷疑は、美事神の存在を否定する無神論を稱へ出すに至つたのである。斯くの如く宗教の内部から起つた、宗教上の懷疑は、傳るその外部から来たクセノ

ソアラネーの如き哲人の攻撃よりか、一層危険である。斯かる宗教内部から起つた懷疑は、宗教をうちからはから、裏切する謀反入てあり、内訌であるからして、殆んどそれの防ぎやうがないのである。以上のような懷疑的思想を承継いで起り、それを哲學の範圍に迄引き込んで来たのは、紀元前五世紀に於ける、有名なる詭辯論者の一派である。詭辯論者プロタゴラスは、吾人の知力は到底神の存在を認識する譯にいかないと云ふことを公言したが、詭辯論者クリチアスに至つては、神なきことを云ふものは畢竟無いのである。神なき云ふものは政治家が巧みにそんなものを捏造し出して来て、人民の恐怖心に投じ、その恐怖心を利用して、能く人民に政府の云ふことをきかせ、さうして上手に世を治めやうと云ふ奸策からして、神と云ふものを案出して来たのである。と斷言した。近世英國のホップスの説は、又是れである。此に於て希臘の宗教は支離滅裂、全く土崩瓦解し去らざらんと欲するも得ずと云ふ有様になつて来た。かう云ふ風に在來の宗教が倒れ、信仰は地を掃つて無くなつてしまつたと云ふ時代には、人々その無信仰、無宗教主義の結果、その道徳は頹敗し、風紀は紊れ、倫常は地を攘ひ、風俗は亂れると云ふ様になつてくるのは、自然の結果である。そこで曠世の大道徳家、不世出の碩哲ソクラテースは、詭辯論者が一度壞敗し去つた道徳宗教を再び鞏固なる基礎に置き復へさうと、日夜憂慮されてをうた結果、ソクラテースは先づ詭辯

論者の様に法螺を吹き辭巧ことばたくみに他人を瞞着することはかり考へずに、眞摯正直まづ、眞面目に學問を研究し、先づ己れを知れて、ゾラフオイの神訓に従つて、自己の無知なることを昧認し、自己の無知なることをして有知ならしめんが爲めに、學問道德の眞義を究め、風教の頹敗を既倒に回へさんと努められたのである。ソークラテースは詭辯論者の様に、徒らに當時の宗教を攻撃して、人をして益々無信仰に陥らしむるも、何んの益もないことである。と云ふことを觀破したから、ソークラテースは敢て濫に當時の宗教を攻撃せず、寧ろ自己の信じてをる全知全能至善至徳の唯一眞神と、當時の宗教思想とを調和して、寸分なりとも人民を無信仰の奈落から救ひ出して、その風教の挽回を計らんとした。然るに彼れは遂に世に容れられず、却て國神を潰したと云ふかどを以て、當時の政府から牢屋の中に自殺を賜はつたと云ふ有様であつた。かくソークラテースの肉體は、その毒杯の一と吸りと共に、葉に置く露と消え失せてしまつたが、ソークラテースの精神、ソークラテースの思想は、永窮不滅である。千歳を経て益々光輝ある進歩をなしたのであるが、當時に於てもソークラテースの思想を繼いで起り、さうしてそれを大成した人は、プラトーンである。プラトーンは哲學上に於ては、本體即ち眞實界と假象即ち非眞實界との二元論を立て、神はその眞實界に於ける究竟至善の最高靈體であると説いて、人は肉體を解脱し、感覺の慾を離れ、至善至高の靈體を以て、その最終の目的理想として、こ

の神の眞實界を欣求して、この世界に歸入せんければならんと云ふ、思想の種を蒔いたのである。此に於てオルフオイスの禁欲主義や、靈魂輪廻の思想も、亦プラトーンが眞實界と假象界、靈魂と肉體と云ふ、二元的の哲學思想と共に又、プラトーン哲學の中に現はれて來たし、さうしてそは又實に彼れオルフオイス自らの中に現はれたよりも、一層高尚なる形式を以て、現れて來たのである。さうしてこの思想は又プラトーンよりか餘程以後に、表はれた希臘哲學の一である彼の宗教的プラトーン學派、殊に新プラトーン學派に於て、益々宗教的發現を爲す様になつて來たのである。然しこのことに就いては、尙ほ次ぎの章で御話する機會がある筈だから、ここではこれだけにして止めてをくが、プラトーンの神の思想は、アリストテレース氏尙ほ之れを承け繼ぎ、氏の哲學はプラトーンの二元論に反して、主として一元論的に立てられたものであるが、その神は矢張後にはプラトーンと同じく、過境的に世界以上の存在者として考へたのである。そこでプラトーンの哲學は二元論であつて、その神は過境的であるからして、つまりプラトーン哲學では、眞實界と假象界との關係が十分うまくつかなかつたから、そこでプラトーンは此兩界を結び附ける爲めに、世界靈(宇宙の精神)と云ふものを立て、之れを結び附けて來たが、世界靈は更にストア學派に於ては、世界組成の一種子一理諦として、その万有神教の根本原理となつて來て、この一理の顯現を以て、宇宙万有を説明するのであるから、そこで

從來希臘人の信じてをつた多神は、皆この一理からして權に表はれた權化である。化現であると解釋した、然しこれくらいのことでは、到底舊宗教の信仰を挽回して、人々に宗教上の安心を與ふる譯にはいかなかつた。然るにこの世界靈の思想の萌芽は、埃及及び猶太の地に移植されて、遂にロゴスの思想となつて、一大發展を爲すに至り、遂には吾人の道德上の理想であつたロゴスが、眞に肉を得て、生きた人間の形を以て、耶穌基督として、世に表はるるに至つたのである。尙ほこのことは、次章に於て、もう一層明瞭にしやうと思ふし、又讀者に更に基督教の條下の一讀を、願ふのである。(此の章の終末は哲學に關係すること深く、從つて哲學史の知識皆無にては、要第一頁から、百二十一頁迄を一讀せられんことを望む。)

第八章 羅馬帝國內に於ける諸宗教の混化

羅馬の古代宗教は希臘の宗教と全く同一で、唯羅馬の宗教と希臘の宗教と違ふ所は、羅馬の宗教は希臘の宗教よりも、一層宗教上の儀式作法が多く行はれてをのみであるとかう云ふ説は、もう今日では陳腐であつて、科學的に宗教を研究する者は採用しない説である、それと云ふのは、羅馬の宗教が希臘の宗教と同一になつたのは、羅馬の共和政體が出来てから、當時希臘の文明を輸入した結果のことであつて、それより以前は羅馬の宗教は、希臘の宗教からみると、一層原始的に能く印度歐羅巴人種の宗教の特色を表はしてをると云ふことが分かる、宗教學者ウセネル氏の説に由れば、現今ニユージーランドの土蠻の宗教は、丁度此程度に在ることである。

そこで古代羅馬の宗教に於ける神は、先づ是れを大別して三種とすることが出来るやうと思ふ、則ちその第一は家の神と野の神で、その第二は日々の出来事や仕事の守り神、即ち保護神であつて、その第三は國家の鎮護を掌る公けの神である、但しこゝで神と云つても、その神は英語のゴツツ即ち神格の義ではなくつて、寧ろ精靈の意味である、太古羅馬の家族には、皆な一定の家靈とでも云ふ可き、その家々若くは家族特有の守護神があつた、フェスタの如きは家の竈(カマド)を守る女神であるし、ラレス・ベナテスはその家族の祖先の死靈である、之れに反して、テルミヌスは國境を守るの神である、ファウヌスは野の神で、シルヴァヌスは森の神で、リムファは川の神である、然しその位置は餘り高くはなく、テルミヌスに及ばざること餘程遠いである、小兒の如きもその生れてより生長する迄の間、クニナスタチナ、エヅラ、ロクテウス、アデオナ、アベオナ等、更々四十三の保護神を有してをるのである、マルスの如きは希臘のアレースと結び就てから、戦争の神となつたが、その初めは人をその死から護つてくれる神であるし、又家畜や田地を守る神であつた、さうしてマルスは狼と牡牛とツツ啄木鳥の諸性質を有してをつて、且つ羅馬府の創設者、ロムルス、レムスは、その

母が此マルス神に感じて、生みおとした所のものであると云ひ、さうしてロムルス、レムスはチベリス河畔に棄てられたのに、牝狼來つて之れを乳養して生長させたと云ふ傳説があるからして、羅馬の宗教は又トテム崇拜を有してをつたことは明白である。ユピテル即ちデオプス神の如きも、その語源は希臘のツオイヌ、印度のドヤツヌと同じ、共に天と云ふ意味であらふ。然し羅馬のユピテルは、早く此意義を忘れられてしまつて、地方々々特有の部族を守る神となつた。そこでラチン人はユピテル、ラチアリスとして、之れを崇拜してをつた。然るに羅馬人がラチン人を征服してからは、そのユピテルはユピテル、オブチムス、マキシムスとして、更らにその威力を宏大にして、羅馬人の父王として尊崇する様になつたのである。そうするとユノと云ふ女神は、直にユピテルに配合せられて、その妻の神となつた。然しこのユノとても、初めからこんな高貴な女神ではなかつたと云ふことは、勿論のことである。デアナとミネルヴァとの兩神は、如何なる神から進化したか、殆んど今日では不明である。然しサツルヌスは植物の種子を守るの神で、その婦神オブスは田地の保護神である。デルカヌスは鍛工の神で、メルクリウスは商人の神である。オルクスとヂヌ、パテルは下界の神であると同時に、富める神である。デア、デアやテルスやケレスは土地の神であつて、又結婚の保護神である。然し最も古い羅馬固有の神はヤヌスであつて、門戸を守るの神である。

是れ等の神を祭る爲めには、必ずしも僧侶祭司と云ふ様なものを要さないのである。或は一家の父それに當り、或は國王之を執行し、或は政府の官吏これを行ふと云ふ有様であつた。然しながら又公けの祭には、別に又犠牲を神に供へる所の祭司があり、マルス、クイリヌス、ユピテル、オブチムス、マキシムスを祭るには、特別三人の高僧もあつた。此高僧の數はその後十五人の多きに上つた。フェヌタの巫は、又六人の乙女を以て之れに充てた。祭を掌る外に、又宗教上の事を能く知り、宗教上の知識に通じた學問僧と云ふ様なたちのものがあつた。これはその初めは、占を掌つたり、曆を製したりしてをつたのだから、後には羅馬の法律の發達にも、與つて力あるに至つたのである。

之れを要するに羅馬の古宗教は、最も初等なる宗教で、即ち精靈崇拜である。従つて前にも云つた通り、アールヤ人種の宗教の特性を、能く表してをる。さうしてその後、の發達に於て、初めて複雑至極の儀式や、立派なる神々が羅馬の宗教中にも出來て來たのである。

羅馬の古宗教は希臘の宗教の影響を蒙らなかつたならば、恐くその發達は上に説明した以上には、決して進まなかつたであらふ。然るに一朝希臘の宗教の神々が輸入されてからと云ふものは、その之れを取り入れたことの甚しき、殆んど我が國に於て欽明帝の朝に、佛教が遷入つた時と、同じ有様であつた。羅馬人は朝野舉つて希

臘の宗教に心酔したと云ふ有様であつた、どうもこの邊は羅馬人と日本人とが餘程能く類似してをるのである、獨り羅馬人が外國産の宗教を受け入れることが日本人と能く似てをるのみでなく、又古代幾多の群神を崇拜してをつた、その多神教の有様も、日本の古代の有様に餘程能く似てをる、さうして是れから説明しやうと思ふのだが、羅馬人が希臘の神々を多く輸入しながら、それを羅馬古代の神々と同じものと考へ、希臘の何々の神は、羅馬の何々の神と同じである、と云ふた所などは、多少我國の本地垂跡の説に對照す可きであらうか、勿論その思想に高下はある、我國の弘法大師空海の考は餘程高かつたと云ふことは勿論である、兎に角羅馬の哲學が哲學史上に於ける位置は殆んど日本哲學に能く類似してをるのだが、その古代宗教も亦確に日本と羅馬とは酷似した或點をもつてをると云ふことは、疑ふ可らざる事實であらふ。

そこで希臘から先づ初めに、羅馬に傳はつて來たものは、アポロンの神託である、そこでアポロンは羅馬の門戸の神、アヘルタと國音相近き爲めか、遂に同一視されてしまつた、その外希臘のデーメーテールはケレスと合同し、ベルセフォネーはリベラに、デオニユスはリベルに、合同された希臘のヘーラクレースは羅馬のヘルクレスとなつて、商業の利益を守る神となつた、希臘のアスクレピーオスはアエスクラピウスと變じ、キュベレの崇拜又盛んに、羅馬のエヌスは希臘のアフロヂテート、セム民族の宗教で見た、アスタルテとの兩性質を有する様になつた。

かやうに羅馬の宗教は、追々希臘風に化せられて來たが、之れと同時に羅馬の風俗に、希臘の道德上の諸缺點を輸入するに至つた、羅馬の質朴なる宗教は、希臘風に即ち美的に變化した、そこで古代から羅馬の宗教に存してをつた儀式は、最早や希臘風に化せられた羅馬人の思想信仰と一致しなくなつた、羅馬の共和政府の末葉二百年頃には、希臘の詩篇や哲學書類が、羅馬に輸入せられ、エンニウスと云ふ初めての羅馬文士は、希臘の哲學者オイヘモスの神話解釋論を羅馬人に紹介した、當時羅馬の青年學徒は、希臘風の辯論術に心酔してをつた、二世記の末には羅馬のストア哲學者の始祖、パナイチウスはストア哲學を羅馬に建設し、哲學思想は大に羅馬人の頭腦を開拓したから、こゝでも亦人知の發達は、遂に在來の宗教と衝突を來して、舊信仰と新知識とは調和しない様になつた、そこでムキウス、スカエブラの如きは、普通人民の宗教と學者の宗教とを全く區別してしまつて、その間に調和を計らふとしたし、テレンチウス、プロはスーア哲學の立脚地からして、古代羅馬の諸神に哲學上の解釋を下して、舊宗教と新宗教の調和を計らうとした、シセローは折衷主義の哲學者として、又此の間に立つて、文筆を揮つて、宗教道德の頹敗を挽回しやうとしたが、遂に成功を見なかつた、そこでルクレチウスの如き、一切の宗教を捨て、無神論を主張するに終はつたのである。

然るに當時戦争攻伐等世の衰れを感ずることもあり、人は兎角宗教なしには一日も居られぬものであるからして、羅馬皇帝アウグスツスは、是れ等の時世の必要に鑑みて倒れたる神殿を興し、廢れたる儀式を再興し、エヌス、マテル、マルス、ウルトル、アポロン、バラチヌス、ヂス、パテル、プロセルピナ等の古代の諸神の祭祀を復興し、アウグスツス親ら亦萬乗の尊を以て、是れ等諸神の祭司となり、詩人ホラキウス又之れを文筆に寫して、人民の皈依心を鼓舞し、その宗教を喚起するに努めたのである。然るに皇常は獨り祭司の長たるのみならず、又自ら祭儀を受くるの對象となり、羅馬皇帝自ら神の尊位に昇つたのである。羅馬に於ては早くからして死んだ祖先の靈を崇拜する風があつた、特に死んだ英雄偉人の靈は、之れを死後神に祭り込むの風があつたが、斯かる死んだ英雄偉人の靈を神に祭るの習慣より、更に一步を進むれば、生ける皇帝を神化して崇拜するは實に一擧手一投足の勞である、そこで彼のジュリアス、シーザーの如き既にその生前からヂギウス、ユリウスと云ふ尊號を奉られて神として崇拜され、さうしてその死んだときは、人民一般の希望に由つて、シーザーの靈を神に祀つた、又アントニウスはバップス神として崇拜せられ、皇帝アウグスツスはその生前よりして神の威信を有つてをつたが、その死んだ後には直ちに帝は神に祭り込まれて、その殿堂を建てられ、祭司の職を置かれてあつた、當時アウグスツスは獨りその祖國即ち神的羅馬の父たるのみならず、亦ツォイス神で

あつて實に全人類の教主であると尊崇されてをつた、この風習は又更に地方に迄波及し、さうして次第に發達して行きましたから、そこで人民一般にアウグスツスとか、シーザーとか云ふ様な個々の皇帝を崇拜してをるに止らないで、一般に皇帝そのものを崇拜する様になるに至つた、こゝで以て羅馬の偉大なる國民的宗教が出来て、それは羅馬帝國の領分内には至る所頗る廣く行はれてをつたのである。然しながら哲學者の折衷主義と云ひ、舊信仰の燒き直しと云ひ、一も當時の人々の宗教心を満足せしむるに當るものがなかつたから、アウグスツスの治世を距ると凡そ百年後には、羅馬人の宗教心の不満足と云ふものは、頗るその高調を呈してをつたのである、そこで是より先き、羅馬府は政治上、世界の中心點であつたから、又こゝには世界の所有宗教が靡然紛然として、蟬集し來たつたのである、埃及小亞細亞などの東洋の諸國に行れてをつた諸宗教は、陸續として羅馬府に流れこんで來た、その中で羅馬固有の宗教とうまく調和し易かつた宗教は、愈々その流行を早やめて行つた、是れ等の宗教の中では、イシス、セラピスなど云ふ、埃及の神を祭つた宗教もあるし、フリギアのキュベレ(是れはカルタゴと羅馬との第二回の戦争頃から羅馬に來てをつた神であつて、クラウヂウス帝の時に一般に行はれる程になつた神である)崇拜もあつたし、又キュベレと共にアツチヌスの崇拜も熾んであつた、イシス

とキエベレとは、共に諸神の母として尊崇せられてをり、アツチスはキエベレの戀人であつたと考へられてをる。セム民族の神であつたパールやアヌタルテの崇拜も亦行はれてをつた。

かやうに外國の神々が滔々として洪水でも押し流して來た様に羅馬に入り込んで來たが、此中特に宗教學者か意を留む可きは、波斯のミトラ神の崇拜である。波斯のミトラはシリヤに於ける太陽の神と共に結び附いて、早くからして希臘に道入つて來てをつたが、羅馬の帝政時代の初世紀頃からして、徐ろ々々羅馬にもやつて來て、羅馬帝政時代の第二世紀の頃には、追々蔓延の兆を表はし、遂に羅馬帝國の有力なる一大宗教となつた。ミトラ宗教の教ふる所は、未來彼の世の生活と、天國に生まるゝ道ちゆきとを、詳しく説くのであるから、餘程當時宗教に渴してをつた人心の要求に應じた様である。さうしてそのミトラ神に奉る犠牲は、牡牛であつて、その牡牛の血は、以て信者の罪を洗ひ清よめるに足ると考へられてをつたし、又その麵麩と水とをミトラ神に供へるの習慣は、丁度基督教の聖餐式に麵麩と葡萄酒とを用ふるに類してをるから、羅馬の基督教徒は之を見て、一時その儀式の暗合、恰も符節を合はすが如きものがあつたのに驚いて、是は恐く悪魔の悪戯で以て基督教の儀式を窃にミトラの宗教に教へたのであらうと考へた位であつた。嘗に是のみならず、實はミトラ崇拜の祭日として、最も尊ぶ所の日は十二月二十五日である。此の

日はつまり陰曆まつて、更に一陽來復し、日晷既に一線の長を加へたと云ふ日であるから、そこで此日を撰んでミトラの祭日としたのであらうが、是れ又偶然にも基督教の耶蘇誕生日と暗合してをるから、基督教徒の一驚を喫した所である。又ミトラ宗教の信者は、その上下の階級が七個あつて、それが甚嚴重であり、殆んど軍隊的であるし、且つその信者はミトラの神命を奉戴して、世の中の善に與みして飽くまで惡と戦ひ勝たねばならぬと、波斯のアフラ、マツダの宗教の趣意は則ち是れである。信じてをるから、此點は又羅馬の軍人の氣質に能く合ふ所が有る。そこでミトラの崇拜には羅馬の軍人社會に非常に多くの信者を得たのである。

羅馬帝國内に於ける當時の宗教は、或は内國産のものもあり、或は外國から舶來したものもあり、或は多くこの内國産と外國品との混合した、中間見様の宗教であつたとは、以上段々述べて來た通りであるが、從つてその祀らるゝ神は、又色々雑多であつて、羅馬帝國の宗教は丁度佛教が日本へ渡來した時の、日本の宗教と同じ様に、八百萬の神から成り立つてをつた。然るに當時猶太人にして、羅馬領に散在して住つてをつた所の者どもは、是れ等の多神教に對して、存に自分達の唯一神教を振り舞はし、自分達の宗教のみが獨り眞實の宗教で、羅馬人の信じてをる宗教は、一切邪宗である、偶像教であると云つて、履み蹴なしてをつた。かやうに自分の宗教には傲慢にして、自負の念の高い猶太人も、當時羅馬領に廣がつてをつた。希臘思想の影響

を免るゝことが出来ないで、パレスチナを初めとして、特に埃及のアレキサンドリア府に住んでをつた猶太人は、大に希臘哲學の感化を蒙つてをつた、猶太のマカベウス王朝は、一時大に此の希臘風に化せられて來た猶太思想を、喰ひ止めやうとしたけれども、遂に滔々たる時勢の風潮には抵抗しを負せなかつた、當時猶太の一教派であつた、エッセネの如きは、明にピエタゴラス哲學の影響を蒙つてをつた(エッセネ派は印度佛教の影響から起つたとも云ふ)、特にアレキサンドリアの猶太人の間には、プラトーンやストア哲學の感化が、中々大きくあつた、彼の物質を單み靈魂が生れぬ先きの過去の昔から存在してをつたを信じ、又靈魂不死を信ずるが如きは皆なプラトーン哲學の影響であつた、殊に彼の正しき義人の靈魂が肉體の死後尙ほちやんと天界に生を受けて生きてをると云ふことの信仰の行はれてをつたのは、プラトーン哲學の影響である、時に最も能く是れ等の希臘哲學の風に感化されてをつた猶太人は、アレキサンドリアのフィロソフであつた(耶蘇と同時代の哲學者)、フィロソフは最も巧に猶太の過境的超絶的の神と、プラトーンの抽象的の二元論の唯心論とを結び合はした人である、フィロソフは神は最も超絶的過境的で、至つて高い存在者である、とても人の寄り近くとの出來ぬ本體であると考へたが、その至上至高の神は、善を以て神の徳とせられ、神の本性は至善にして至仁に富んだものであると考へたのは、プラトーンが至善の理念を以て、神の體とした思想から、

影響された痕跡が認められるのである、従つてフィロソフはプラトーンと同じ様に物質を以て神の清淨に對して、至つて不潔なるものとなし、人生の害惡は皆なこの不淨なる物質から來ると説いて、道徳上の不善はその淵源物質に在りと斷言したのであるから、當時の哲學者盡は皆なこの思想に由つて彼の聖き神は直ちに汚れたる物質に觸れ給はぬ、従て世界の攝理は神自ら手を下だして、それを實行せしめ給ふのではなくて、世界と神との間には、プラトーンの理念とても云ふか、將た又猶太風にそれを直ちに天使とても云ふか、——フィロソフは實際是れ等の辭を色々使つてをつたが、——兎に角是れ等の幾多の神と、世界との媒介者を作り出す様になつて來たが、フィロソフは是れ等の諸天を一に湊合して遂にロゴスと名けたのである。

ロゴスは神と人間とを媒介する原理である、人間を引き附けて神の座下に至らしむる中保者である、神と人間との中人である、であるから、人間よりは一層神に近い關係をもつてをるのである、神の像である、神の長子である、第二の神と云つても宜しいのである、人を導いて神に至らしむる所の媒介者であると同時に、神の御心を吾人々類に傳ふる所の神の總理大臣である、モーゼに神の御意を傳へて、その律法を編みしめたるも、亦このロゴスである、モーゼの律法とは、つまりロゴスの道理を、文辭に表はしたに過ぎないのである、人類がその肉體の私慾に打ち勝つて、至善の

行、至徳の境界に向ふのも、亦このロゴスの力である。ロゴスは獨り猶太一國民に、神の眞理を啓示したのみならず、又全世界の人類の靈に向つて、神の啓示を媒介するのである。ロゴスは吾人靈魂の病をいやす醫師であり、吾人の靈魂を救ふるの教師であり、先導者であり、吾人の精神をして、物質界の入慾を離れて、天上の神食を味はしめ、甘露の法藥を嘗めさせ様とする所の先達である。

フィロソフはプラトーンとストア、特にプラトーンの云ふ物質精神の二元論よりその道徳説を立て、來て、人の精神肉體は、清きものであるが其肉體は汚れたるもの、從て靈魂は善の性質を有し、肉體物質は惡の性質を具有するものである、故に肉體の慾を退けて、精神即ち靈魂の教ふる所に從ふのが、則ち吾人の道徳であると考へた。そこで又フィロソフは創世紀の第一章第二十七節に、神その像の如く人を創造たまへりと云へる、この人とは、純粹のロゴスの像に由つて出來たる人間である、是れは第一の人である、之れに反して、その第二章第七節に、エホバ神土の塵を以て人を造り生氣をその鼻に嘘入給へり、人即ち生氣となりぬと云つてあるのは、第二の人で、是れが普通に云ふ人間の初めを爲してをるのである、そこで普通の人間は、きたない汚れた物質である所の、土の塵を以てその肉體としてをる以上は、それだけ濁れてをるので、人間は肉體と云ふ點に於て、動物と同一である、動物的の性慾をもつてをるのである、然し又人の靈魂即ち精神は神の生氣から出來たもので、是れ

丈けは神と同じ様に淨いものである、であるから人は肉體の濁を去つて、靈魂の清きに向ひ、肉體の私慾を捨て、靈魂の純粹淨潔に復へらなければならぬと説いた、この人は即ちフィロソフであつて、氏は巧に猶太思想と希臘思想とを調和せんと試みたのである。

かう云ふ工合に、フィロソフは希臘哲學と猶太の宗教思想とを、一致調和させんとしてをつたけれども、ストアの道徳思想とフィロソフの道徳思想との違つてをる所は、かうである、ストアの解脱を求めた方法は、所謂自力修行であつて、自己の道徳心を鼓舞して、勇猛精進した結果、克己の自力でもつて、肉體の慾を斷ち截つて、さうして精神の淨きに從はんとしてをるのである、之れに反してフィロソフは人間の自力には、到底自己を救ふに足る能力はないのであると説いて、神の他力救濟を一向稱道し、人は己れの自力の分別を、全くふり捨て、神の恩恵に一任し、専ら神慮に信頼せよと主張したのである、フィロソフの哲學は徹頭徹尾他力的である、之れに反して前に云つた通り、ストア哲學者の解脱を求むる方法は、全く自力的であるから、こゝがフィロソフとストア哲學者と、違ふ所の要點である、然し乍らフィロソフの他力救濟の思想も、全く希臘思想に無かつたのではなくつて、近くは新プラトニシム學派やピュタゴラス學派に、その思想は表れてをるし、遠くはオルフォイスの秘想に、その起源をもつてをるのである、神秘なる信仰や、秘怪なる直觀や、極端なる禁

欲主義や、不可思議なる身心の脱落等を以て、神に冥合することを教へたオルフォイスの秘想や、新プラトーン學派や、新ピュタゴラス學派の思想中に、既に業に現存してをったのである。さうして前に云つた通り、フィロソフのロゴスはモーゼの律法中に事實となつて、その面目を實際に表してをると、フィロソフは考へた。否、な實に猶太等の律法を書いたモーゼその人は取りも直ほさず、このロゴスの化身と云つてもよいのであると、フィロソフは主張したのである。かう云ふ風であるから、フィロソフは、ストア哲學などの云つてをる所の、哲理上の空論を、イスラエルの歴史の上から、現實の事實として、承認してをるのである。であるから、フィロソフの著書モーゼ傳は、當時のアレキサンドリヤ哲學の福音書として、もてはやされ、さうしてフィロソフの筆に由つて、太古イスラエル一國の律法家モーゼはアレキサンドリヤの哲學に於ける、世界の救主と迄尊ばれる様になつたのであつて、それは恰もヨハネの福音書に於て、元來猶太の一職工の子耶穌が、全世界の救主と仰がれる様になつたのと、同一である。(尚ほこの參考書として、はクリソソム、フィッソフ、原著)是より先き既に、アリストテレス以後に現はれた所の希臘の哲學、特にストア哲學の如きは、羅馬の地に移植される様になり、さうして時勢の必要に迫まられて、追々と實際的になり、その研究題目としては、世界解釋の疑問などの解答に翻觀するの徒勞を避けて、道德問題尙ほ進んでは、宗教の問題の解釋に熱衷する様になつて

來た、セネカ(紀元六五歿)エピクテッス(紀元第一世紀の頃)マルクス、アウレリウス(紀元一二二—一八〇)プルタルク(紀元五〇頃の人)の如きは、皆なストア學派に屬する學者であつた。當時羅馬に道入つてをったストア哲學は希臘の昔に於けるストア哲學とは餘程趣を異にして、その云つてをることが、餘程宗教的であつた。昔のストア哲學者と云ふものは、前にも一寸云つた通り、極々克己の精神に富み、従つて自力を頼むことが大きくあつたが、最早や羅馬今日のストア哲學者は、さうでない。追々自力を信ずることが薄くなつて來て、之れと同時に己れ以上の神の力に依頼すると云ふ情が増して來た。則ち神を信頼して救はれたいと云ふ心が殖えて來たのである。然しその神に事ふる所の方法の如きは、セネカは太古の宗教の教ふる如く決して肉と血と柄成立つてをる犠牲を以てせよとは云はない。否、な眞の宗教吾人の精神吾人の眞心を神に供養す可きものであると云ふとを教へてをる。さうしてその上セネカはプラトーンの二元論を擔き出して來て、吾人の道心を濁らす所のものは、一に肉體の慾、感覺上の私に在つて存すと云ふことを、確く信じてをったから、何んでもこの肉體の慾を絶つて清淨のものにならなければ無ならないと云ふことを體認してをった。従つて又此禁欲主義が、その學說中に表はれて來た。しかのみならず、ストア哲學派に屬する、マルクス、アウレリウス帝の如きは、自ら神に犠牲を奉り、さうして諸種の宗教的儀式をも、帝親ら執行せられた。折衷哲學者プルタルクの如

きは、その故郷ケロネアに於ては、その郷社に祀つてあつた、アポローン神の祀僧であつたし、従つてデルフォイの卜占を初めとして、自餘の神託を解するに哲學風の眼光を以てし、古代希臘の多神を解するに宗教的プラトーン哲學や、新ピュタゴラス哲學の學說を以てしたのである。古代の神話を解釋して、之に道德上の意味を附與し、全く之れを古代人心の空想からして生じて來つたものであると云ふやうな、極端なる龍辯論者などの說を否定した、さうして又ブルタルクは、此世に於ては善惡の應報が兎角公平にいかず、善人往々困難に出逢ひ、惡人却て幸福の生涯を送ると云ふ様なことがあるけれども、畢竟未來あの世でもつて、善惡因果の應報は、さつと廻つて來るのである。善人の善を爲したものは、縦令この世では不幸に終つてしまふとも、末世あの世に於て、それに相當する丈けの幸福を必ず得るのである。之れと同理でもつて、惡人も亦必ず未來に於て、その惡結果を受くるに違ひないと教へたのである。之れを要するにブルタルクの哲學は、當時の哲學宗教の諸潮流を、悉く集めて、そをどれも々々少しつゝ、繋ぎ合はした様な氣味のある、頗る煩雜々多の集合哲學であつて、宗教に哲學を加味し、哲學に宗教の彩色を附けた様な、極めて奇妙なる思想の代表者となつてをる。さうして斯かる混合折衷の思想が、ブルタルクの哲學組織中に現れたのを以て考へて見ても、當時の思想界が過渡期時代に際して、どれ程混雜紊亂してをつたかと云ふことの一般が分かるのである。(尚ほ此處に

紀元第三世紀と云ふ年は、實に羅馬帝國内に於ける諸宗教混化の時代と云はんは、紀元第三世紀と云ふ年は、實に羅馬帝國内に於ける諸宗教混化の時代と云はんは、ればならん時である。これ迄あり來つた國民的宗教は、最早や衰亡に歸し去つてしまひ、哲學が一時是れに代つて、時人の宗教心を満足する所の、清涼劑とならうとしたが、是れもその功を奏さなかつた。そこで懷疑思想が所々方々に、ちら々々見えて來た様であつたが、人心は永く懷疑に止つてをる譯にはいかない、いつしか信仰を求めなければ止まないと云ふことは、人心自然の本性である。そこで古來から傳つて來た、宗教上の傳説を復興して、之れに依つて信仰を維持しやうとする様になつた。そこで彼の古代のオルフォイスとかピュタゴラスとか云ふ人の名を藉りて、澤山の宗教的傳説が起つて來た。當時シリア又はアレキサンダリア等に於て、プラトーンやピュタゴラスやオルフォイス、ピュタゴラスなどの哲學、又は宗教上の考へを折衷調和して、二種の道德宗教の說を立てる者があつた。是れを新ピュタゴラス學派と云ふので、この新ピュタゴラス學派が、その道德宗教の御本尊様と考へ、その理想として崇拜してをつたのは、チアナの人、アポロニウスと云ふ學者であつた。實にアポロニウスが新ピュタゴラス學派の徒に、道德宗教の理想として崇拜されてをつたことは、丁度基督教徒が耶穌をその道德宗教上の、生きた理想即ちゴッドとして崇拜してをつたのと一般である。(尚ほ此處に

かう云ふ風であるからして、不思議なる奇蹟や、迷信に富んだ卜占の様なもの、大變流行し、それも初めの中は知識の下等なる社會にのみ限られてをったが、段々と進んで、紀元三世紀の頃には、知識ある學者の社會に迄、その勢力を肆にする様になり、善鬼悪鬼など云ふ信仰も、非常に繁盛して来て、學者は當時の學問の知識を藉りて、是れ等の諸迷信に、學術上の説明を與へ、哲學の理に依つて、鬼神の存在や、奇蹟卜占の信ずるに足る所以を證明せやうと力めてをった。或る學者は當時の社會に於て、今や當時人間の宗教心と云ふものが非常に覺醒されて来た時機に向つて、參照せられた、すると又そこで、亢進した宗教心と云ふものは、現世丈で満足してをるものではない、必ず未來の事を心配する様になつて參りますものであるからして、この死後の世界とか來世とか云ふ考へが、盛んに當時人心の、痛々渴仰する所のものとなつて參りました、どうかして未來世に於て、幸福の生活を送りたいと云ふ考へは、當時何人も渴望して、止むことの出来なかつた所のものでありました、それであるから、オシス神やセラピス神やミトラ神などの秘行も亦大に未來と云ふことに注意して來まして、苟も是れ等の秘行を身に實踐した所の信者は、必ず未來世に於て幸福を得ると云ふ様に説いて來た、そこで新ピタゴラス學派や新プラトニオン學派などの哲學者も、亦盛んに未來の世界と云ふことを説き、死後の幸福を求めよと云ふことを教へました、かうなると云ふと、人は未來死後の幸福を希求すると云ふこと

を心に銘じて參りました、現世の事が餘程輕くなつて來ました、つまり現世は未來世の幸福を求むる爲めの方便手段に過ぎない様になつて來ました、早くこの世の汚れた肉體を脱して、未來清淨なる靈魂の救を得たいと云ふ様に考へて來ました、から肉慾を殺さんと致し、禁欲主義は、宗教道德の理想に到達する唯一の手段となりました、オルフォイス及びプラトニオンの考へてあつた靈魂は、あの世からこの世に墮落して、肉體の牢獄裏に投ぜられてしまつたのであるから、早く吾人は禁欲主義の勵行に由つて、その肉體の牢獄を破り、宗教上の儀式作法を行ふて靈魂の解脱を計らなければならぬと云ふのが、當時の宗教の教ふる要旨となり、また由つてオシス神の崇拜を初めとして、諸種の秘行は皆なこの目的からして行せられた、またそこで又當時の宗教は、國民一般の公事であつた所の、從來の宗教とは、犬にその趣を異にして來まして、個人精神の安慰を謀る個人的宗教として表れ、個人がその道德上宗教上の安心立命を得ることを以て、目的とする宗教に、變つて來ました、是れ等の秘行に加はるには、決して國が同じとか人種が同じでなければならぬと云ふ様なことはない、この國民でもどの人種でも、女でも男でも、子供でも大人でも、奴隸でも主人でも、さては猫でも杓子でも、つまりこの馬の骨でも、おぼろげはないのである、唯自分の心には是非その宗教團體に加つて見たいと云ふ決心が、有つた、それだけののである、だからこれは、明に國民的宗教が、世界的

宗教即ち普遍的宗教に進んで来たものと云はなければならぬ、人類一般を我が同朋兄弟と見る、慈悲博愛の人類平等主義が亦これにもその萌芽を發して来たのでありませぬ。この思想の主眼は、人々の間に存在するもの、その間に存在するものに肉體を曳んで靈魂を重んじ、人は渣らはしい肉體を蟬脱して、美しく聖い靈體にならふと云ふのが人間の目的理想となつて来たとするれば、神を以て人間と同様な肉體を以てをる存在物とは考へられない譯けになつてくる、そこで新ビュクニテス學派は神は純粹の靈的存在者である、神は靈體である、聖き靈魂である、云ふ思想に到達した従つて斯かる靈體である神は、何條牛や羊の血醜ひ肉の穢性を欲し給ふ可き神の欲し給ふ所の犠牲は、ストア哲學者セネカが既に道破した通り、獨り唯清淨なる心血である、聖心である、汚れなき道德の行である、かう云ふ風に考を進めて来た然し是れと同時に古代の神々を初めとして、幾多の鬼神天使と云ふ様なものが全く無用になつたのではない、否、管にそれが無用でないのみならず、却て大に有用になつたのである、その譯は畢竟吾人が解脱して、聖に至上の神體に融合するには吾人をそこに導いてくれる所の媒介者がなくてはならない、中保者がなくてはならない、今この媒介者中保者の位置に立つものは、則ち鬼神天使である、古代の宗教に見えた幾多八百萬の神々は、皆なこの唯一至上の神々の應現であり、權化であるさうして又この唯一至上の神と、吾人々類との間を媒介するに

は最早や昔の宗教の教へた様な巫の魔術ではなくつて、圓滿なる道德の實行力に由るのである、そこで彼の前に一寸云ふつた、チアナの人アポロニウスの如きは、當時基督教國以外の國民中に於ける、耶穌基督であつて、實にこの道德實行の理想的標本と云つてよいのである、チアナのアポロニウスをして斯くの如く基督教國外に於ける、耶穌基督であると云ふ様に崇めたてまつられて来たのは、フィロストラッソスの設計に由るのである、フィロストラッソスに由れば、チアナのアポロニウスは道德上宗教上實に圓滿完全なる人類の理想である、アポロニウスは人類の救濟者である、宗教の宣傳者である、哲學者である、秘術家である、人であつて又神である、畢竟吾人々類はアポロニウスの人格を見れば、無形の眞理が骨肉を得て、人間として歩るさ出した様に見えるのである、それであるからアポロニウスは基督教以外に於ける耶穌基督である、彼れは人類以上の神であり、ロゴスであつて、而かも人類の理想とし目的として摸倣す可き、生きた人間として現出してをる、それであるからアポロニウスは人間であつて、而かも同時に神である、人にして同時に神の性質を具へてをるのである、則ち吾人々類が依つて以て救はる可き、神人である、してみればアポロニウスは畢竟基督教以外に於ける、耶穌基督であつて、加特力教會が、ニカヤ會議(紀元三三五)でもつて、耶穌が神と同一の本性を有すと云ふ問題を解決した時に先づこと大凡そ百年の昔に於て、フィロストラッソス氏は、シリアの女皇ユリア、ド

ムナ(紀元二三〇)の勅命を奉じて、アホロニウスの人格を描出して、基督教國以外の地に、加特力教會の尊崇措くことなき一つの耶穌基督を現出せしめたのである。嚮者に一寸云つて置いたが、新ピュタゴラス學派は神を以て肉躰を離れた純粹の靈躰精神として考へてをつた。然るに新プラトーン學派は尙ほ一層進んで、神と云ふものを無限絶對の境に高めて來た。神は我れ々々の言葉にもかゝらず、心にも思ひ浮べるとの出來ない無限絶對の本躰として考へて來たのである。神は諸有相對差別の相を超絶したる眞實躰である。然るに現象界はこの神の眞實界を距ること最も遠いものであるから、眞實に非ずして假象の世界である虚妄の世界である。幻影の世界である。惡の世界である。それであるから人は此假象の世界を解脱して、無爲寂靜の眞實界、神の本躰に復返還没して、初めてその時に於て、眞の解脱を得、眞の救に到達したるものと云ふことが出来るのである。してみれば人は成る可く感覺の私慾を斷ち、禁欲主義を實行して、神の本躰に秘的融合を求めなければならぬ。人たひ此至境に安住せば私慾なく妄想なく、大圓寂の究竟地に到達するを得たるものである。扱て吾人々類は一に斯かる境界を瞻望するのが、その理想である。以上は現世より未來が重くなり、この世よりかあの世が大切になつて來て、新プラトーン學派の哲學者が理想目的としてをつた所のものは、一に印度の佛教徒が理想としてをる、無爲寂靜の消極的の涅槃と同一であつたと云つてもよいのである。

然しが様は自ら世界を蟬脱して又世界を救ふと云ふとは、餘程困難なものであつて、それゆゑが寧ろ神の力を現世界中に實現して、現世を救ふことを工夫しなければならぬ。さうしてこの事業は則ち基督教の救として現はれて來るのである。然るにこゝで一つ考へなければならぬことは、希臘の思想尙ほ一般に廣く云へば、アロルヤ人種(希臘)の思想は、哲學風であつて、抽象的、従つて宗教としては尙ほ實用に道さない弊を免れない。新プラトーン學派の如き、當時人心の宗教的急需を満足させやうと思つて、餘程宗教風になつた哲學を立てたが、尙まだ、哲學くさい所があつて、哲學者の宗教としては、姑く措き、一般人民の宗教殊に當時の様な理性の破産時代とも云ふ可き時に當つては、誠に實用に立たない所が多くあつた。それは、印度の思想が、矢張常に抽象的哲學風に流れて、哲學としては眞個によい。が、宗教としては、之れをそのまゝ用ひては、どうも實用に疎いと云ふ様な譏を免れない。と同一である。そこで佛教の涅槃とか眞如とか云ふ様な抽象的な哲學上の原理は、宗教としては、淨土とか如来とか云ふ様なものに變つてとなければならぬ。かう云ふ風になつて來て、初めて一般に宗教心を満足させるとが出來、従つて世間一般の宗教として、弘通の道もつくのであらう。それであるから、新プラトーン學派の云ふ様な餘り抽象的に過ぎた神は、佛教で消極一方に向いてをつた涅槃と同じ様に、到底人の宗教心を満足させる譯に、いかなかつた。そこで元來無神論であつた佛教

からして、如來とか淨土とか、その外澤山の佛菩薩、さては諸天善神など云ふ様な者が湧き出してきた様に、新プラトーン學派も平時哲學者の信ずる宗教としては、或は差支へなかつたかも知れないが、當時の様に人々の理性力が破産をしてしまつて、一途に手つ取り早く信仰を求め、何んでもよいから、永い短いは云つてをられぬ早く腹のいえる様、早く安心が出来る様、信仰の麴麩が欲しい、特別上等の御馳でなくつてもよい出来合でよいから、早く氣のちつく様な宗教が欲しいと云つてをる時に當つては、到底哲學の永が談義では間に合はないのである。そこで新プラトーン學派も追々とその主義を通俗一般の宗教心を満足することの出来る様、少しづつ變更してくる必要が起つて來た。これまで新プラトーン學派の教へてをる様な神秘的直覺法に由つて、すつかり肉體の汚を脱して、神の清淨靈體に同化せんことを計つても、禪宗の座禪と同じ、中々困難であつて、唯僅に少數の智者學者が、偶々その境遇に達することが出来るのである。又智者學者が一旦さうしたからと云つても、永い時間神秘的天啓に接して、神と同化してをると云ふとは、餘程六つかしい智者學者も、矢張まだ肉體を以てをるから、假に精神の非常なる修養力で以て、一時さうやつて、無上の至境神の妙體と融合一致することが出來たとしても、亦忽ちにして直ぐ元との人間にもどつて來てしまふのである。そこでどうしても、こゝろ云ふ方法では、解脱が十分に出來ないであるから、他に永く安心立命が出來神

の救に與かるとが出来る様な方法を案出することが必要になつてくることは、無論である。そこで新プラトーン學派は新ピュタゴラス學派と同じ様に、古代希臘の宗教が立ててをつた八百万の神々を藉り來つて、人間と唯一至上の神々との間を媒介する中保者と考へる様になつて來た。かうなると云ふと、是れ等の神々を祭るに用がされた古代の儀式作法など云ふものも、復興されて、その意味を哲學的に解釋し、極力哲學を以てこじつけることに力めて來た。又古代の神話を説明するに、道德上の意味を付けて考へる様になつた。元來新プラトーン學派は哲學の上では、分岐論と云ふ主義を採つてをるので、唯一絶對の無限即ち太原即ち神からして、漸次に心とが肉體とか云ふものが分れて流れ出してくる、分化してくと云ふことを説くのであります。則ち新プラトーン學派の人々は、神即ち無限絶對の太原即ちプロトンがらして、第一の靈界エーゼスと云ふ者が分れ出し、尙ほ續いて第二の靈界即ちプシヘーリが出てくるし、之に次いで第三の靈界フイジスが分出し、遂に物質即ち物界または肉體界が現はれてくる、かう説いてをるが、今このプロトンやエーゼスやプシヘーリやフイジスなどを、昔の多神的宗教が立てしをつた神々に配當して、太原即ちプロトンは、ゾオイス神のごとで、エーゼスと云ふのは、クロノス神のごとで、プシヘーリは、ツオイス神であると云ふ様に解釋し、又はエーゼスは、ツオイス神であつて、プシヘーリは、ヘーラである、フイジスは、デーメーテルである、と云

よ様に附會して説明して來たから新プラトロン哲學の中には昔の多神教が丸でそのまゝ表はれて來た彼の高尚なる秘的直覺と云ふことを説いて自己の心眼を澄透した所に宇宙の本體に冥合し原始の太原に復歸しやうと云ふことを教へた新プラトロン學派の哲學的解脫論は今や多神教と下落してしまつたのである。是れは又彼の禪宗が一方で座禪觀念して身心の脱落又は脱亡即ちエクスタシスに當るを期し宇宙の妙躰に默契神通す可きことを説き之れを以て智者學者に勸めて行くと同時に他方に於ては一般普通の宗教としては矢張佛菩薩の冥助を説き祈禱施餓鬼の功德を教へてをると一般である。万有神教即ち汎神觀を以て一般普通の宗教として實益おらしめやうとするにはどうもがう云ふ風な發達を経て來た様に思はれる。佛敎の諸宗派が一方では高尚玄妙の汎神觀的哲理を説くと同時に他方に於ては又如何にも卑近な群立的多神を説いてをるのを見てもこの道理は自ら明瞭でありまじやう。今新プラトロン學派も亦實に此方法を取つて宗教を打ち立てんとしたものであります。成る可く衝突を避けたいと云ふ考へて止むを得ずさう云ふ多神を許す學說を立てたのだが今や新プラトロン學派に於ては、**非必要なのであると云ふことになつて來た**。そこでプラトニズム(紀元二〇四—二六

九)やポロニウムの時代(紀元三三—三〇四)の時代に於ては、まだ十分宗教的になつてゐなかつた新プラトロン學派の哲學も、**プラトニズム(紀元三三—三〇四)頃**になつてからは、全く宗教的に變化してしまつて、その哲學上の議論と云ふものは、全く古代宗教の多神の附會的辯護や當時の諸有迷信を哲學上から牽強して、辨疏するに在つた。魔術秘法トリス等のことを以て充されてをると云つても宜いのである。プラトニズムの新プラトロン學派は、古代希臘の多神教を辯護する御用哲學であつたことは尙中世のプラトロン哲學が、基督教の御用哲學であつたと同様の位置に立つてをつたのである。そこでかやうな工合にして、希臘及び羅馬の哲學が、次第に宗教的に向つて來て、遂に基督教の大海に入り込んでしまつて、更に大なる統一を得、結末を告げたのである。(細譯第四章註)

第九章 北歐民族の宗教

止來述べました通り、基督教の思想は希臘の哲學から影響され、又希臘羅馬の多神教的宗教から感化を蒙りつゝ、有る有様は、段々御分りになつたであらふし、又是れからも次第に説明して行くつもりであります。尙一こと云つて置かなくてはならないことは、基督教が北歐羅巴の諸民族から蒙つた宗教上の影響である。否、實の所基督教はその生國猶太の地を離れて歐洲に入るに及んでから、或は希臘思

想に或は羅馬思想に或は北歐民族の思想に互に相撃ち相摩し合つて融會調和しつゝある間遂に此に歐洲の基督教なるものが出来上つて来たのである、今極手近な一例を云ふならば、加特力教で耶蘇の聖母マリアを拜ふたり、十二使徒を拜したるの如きは希臘羅馬の多神教と基督教が一所になつた影響であるし、紀元九百年頃に出來たヘリアンドの獨逸語のハインランドがヘリアンドと變化するので即ち救済主の義——と云ふ一種の小話は、基督教が彼の武勇なる北歐民族の間に傳つて尙武的精神に富んだゲルマン人種の影響から出来たのである、この小話ではヘリアンド即ち基督は勇猛なる武夫、有力なる王として寫象されてをる、是れは全き基督教が歐洲に這入つて後、獨り希臘羅馬の思想に由つて影響かやうな工合に基督教が歐洲に這入つて後、獨り希臘羅馬の思想に由つて影響されたばかりでなく、基督教が歐洲北部に傳つてからは又北歐民族の思想に由つても影響されてをる所のものは決して少くないのである、それであるから基督教の發達を叙する準備として、こゝで自分は一寸、北歐民族の宗教思想を御話して置く必要があらふと思ふ、由つて今さつとその事を左に述べてみましやう。

彼の基督教が一度羅馬に傳つて、から歐洲の北部に段々と布教される様になつて、北方アールヤの蠻民族も、その劍に依つて羅馬を滅しても、彼等は却て又法に由つてその精神を征服され、遂に悉皆基督教に改宗してしまつたのである、然しその間

基督教と北歐民族固有の宗教とが互に交渉し影響し合つたことは申す迄もないのであるが、抑基督教の感化が尙ほ彼れ等の上に行き亘らなかつた當時に於ては、彼れ等は最も能く原始的なるアールヤ民族の宗教を有してをつたのである、則ちその時やスラヴやゲルマン族の宗教は一言すれば祖靈崇拜と天然崇拜とである、尙ほ又別の辭で之れを云へば、精靈崇拜と云つてもよく、又はもつと廣く云つてアニミズム則ち生氣崇拜であつたと云つてもよいのである、何ぜなれば彼れ等の眼には、日月星辰山川草木風雨雷霆に皆な是れ等の天然現象は、その中にその精神を宿してをつて、日夜生きて活動してをると、かう視えたからのことである、又彼れ等の眼には死んだ祖先の靈魂を初めとして、幾多の精靈や天仙の如きものは至る所に出没往來してをると映じたのである、そこでその宗教上の儀式としては、犠牲を神前に屠つたり、神託を承けて卜占をやつたり、時に又軍國の大事件あるときは、人身供犠をさへ神に奉ることがあつたのである、死んだあとで靈魂の行く先きである幽冥界の信仰も、中々盛んであつて、葬の禮は随分手厚かつた様であるし、その主人の死には家來とか妻とか云ふものは、殉死することもあつた、死人の埋葬地は洞穴の中か又は圓い小丘の上であつて、從つてそこへ祭壇を設けて犠牲を捧げ、さうして死者の靈を吊ふと云ふ習慣であつた、彼の人間の靈魂の如きも、肉體の死後諸方を徘徊して歩いてをつて、時に下界又は東方の樂土に行くものであると考へられ

てをつた、未來の賞罰でふ考もまだ起つていなかつたので、死後の生活と云つても、唯此世の生活の引き續き、繼續と云ふとてある、従つて死んだ靈魂は、人が生前此世に於て妻を要し、奴隷を要すると同じ様に、死後に於ても靈魂が是れ等のものを要すると考へられてをつた、若し又死人の靈が一旦死んで、そのあとでもどつて來て、仇などをされてはならぬと考へるときには、盛に犠牲なんかを奉つて、鎮魂祭をやる、人身供犠の如きも常に存してをつた、レット人やスラッ人は彼の星や風の如きものは、靈魂が現れてかやうなる活動を爲すのであると思つてをるし、鳥ごとに鳩、鳥、鵲の如きは、矢張り一つの靈魂の現れてあると考へてをつた、精靈には或は水に住むものもあるし、或は森に住むものもあるし、空中に住むものもあるし、人家を護るものもある、その人家を護るものは、火の靈であつて、各戸の竈の神である、人間や家畜を守護する神である、水の土地を濕し、水車をやり、又は洪水の物を破る等は、二に皆なその中に住する水靈の所作ならざるはないと考へた、彼れ等は之をルサルカスと呼てをつた、又冬季になつて、互寒の來るのは、コシユニハイと呼ぶ冬の靈の然らしむる所である、と考へられてをつた、森の靈は之をリエシと呼てをつた、然し是れ等の精靈の外に、稍人間の形狀と感情とを具へた神格の崇拜もあつた、則ちレット人のゾラス、スラッ人のボグの如きは、その神格である、さうしてこれ等の神の首領には、ヘヴンズ又はヘルクシスと云ふ雷神が立つてをる、この雷神を祭る爲めには、常に樅の木をもやした火を以てしてをる、又スラッ人の崇拜した太陽の

神は、その數甚だ多く、ダッボクは日の神であつて、空の神スワログの兒子である、オゴンは火の神であつて、印度のアグニに當る、又も一つ火の神である、クツネツツは希臘のヘーラ、ガイストスと同一、老翁なる鍛工であると共に、又惡鬼を退治する所の勇者である、ビエル、ボクは光明の神であつて、ツエルノ、ボグは暗黒の神である、然しこの明暗二神は全く天然神話であつて、彼の波斯の明暗二神の様に、まだ道德上の善惡と云ふ様な意味をもつてをらないのである、是れ等の神と人間との關係も、極幼穉であつて、神の託宣と云ひ、呪物と云ひ、神の加護力と云ひ、その考は皆な幼稚なる程度であつて、東部スラッ人の中には、まだ神殿も無ければ、祭司もなかつた、然しレット人の中には、僅に是れ等のものを有してをつたが、然しその宗教思想はまだ殆んど道德的な所はなくつて、全く自然的であつた。

然るにゲルマン族の宗教になると、スラッ人やレット人の宗教より、稍進歩した宗教になつて來て、明暗二神の争鬭も、明に善惡二神の争と云ふ意味を有して來る様になつて來たのである、それでは、これから先きは、ゲルマン族の宗教をさつと説明することにしやう。

ゲルマン族の宗教の稍々發達した状態は、エツダと云ふ書物に於て見ることが出来るのである、それは、尙ほ希臘の宗教の稍發達したものは、ホメーロスの詩篇に

於て現はれてをると一般である。ニツダの神話は地球の起源と、生物や人間の起源とに就いて、かう云ふ風に説明してをる。則ち地球は一大巨怪の身体の一部から成つてをると云ひ、又世界開闢の初めに、ニフルハイム即ち濕寒の土地と、ムスベルハイム即ち酷熱の土地とかあつたが、その中間の土地をギンヌンガと云ひ、ギンヌンガの北の方は大變寒く、その南の方は非常に熱いのである。そこでこの寒氣と熱氣とが相よつてこゝに生物が出来たし、人間は晝と夜とから生れたと云ひ、又太陽と月とから生れたものであるとも云つてをる。

世界は三部から成つてをると考へ、一を天國ゲスカルドと云ひ、二を人間界即ちミドガルドと云ひ、三を地獄即ちウトガルドと云ひ、ウトガルドは世界の眞の極端であつて、西寒氷結の僻地であり、巨大なる怪物即ち巨怪の住所であると考へられてをる。之れに反して天國は即ち神の住する最も愉快なる樂園であると云つてをる。

ゲルマン民族の間に行はれてをつた樹木崇拜の痕は、イグドラシルの神話に由つて今日からも歴々指點することが出来る。即ちイグドラシルと云ふのは、非常に大なる木の名前であつて、その枝葉は開いて天を覆ひ、その根幹は一切世界に迄はびこつてをるし、さうしてそのイグドラシル樹の下には、ミミルと云ふ清い泉が湧き出してをる。この清泉は即ち又智識の源泉であると云はれてをる。

ゲルマン族の神話的宗教に於て、最も顯著なる神は、ワロダン即ちオデンである。オデンは元來嵐の神であつたが、その後ち段々進化して來て、武勇なるゲルマン人を保護する、戦争の神となつた。従つて勇者が若し一朝戦争で打ち死にをすれば直ちにオデンに救はれて、オデンの樂土ワルハラに連れて行かれ、その創は癒やされ、その天上の食物は勇士の口腹を飽かす様、オデンは是れ等勇士に特別の保護恩恵を與ふるものであると考へられてをつた。オデンは又一切万物の父であり、主宰であり、人間行爲の正邪曲直を決するの裁判官であると考へられてをる。

トール即ちドナールと云ふ神も亦雷の神であつて、その勇猛なること驚く計りてあつた。トールは善神に又向ふ巨怪(希臘神話のチタンと同じである)と戦ひ、又農業を保護し結婚を掌つてをる神である。然しトールは雷の神であるからして、自然嵐の神なるオデンと同一のもつと考へられることが度々ある。

オデンの兒神に兩男神があつて、一をバルヅルと云ひ、他をロキと云ふ。バルヅルは善神であつて、希臘人のアポロン神と同じく、光明と正義との神である。之れに反してロキは惡神であつて、詭計詐謀に長じてをつたからして、遂に我が國の須佐之男命の様に、天國を追ひ拂はれてしまつた。

チツ即ちチウは希臘のツオイス、拉丁のユピテル、印度のドヤウスと同じ、語原の神であるが、ニツダの神話組織中には、餘り有力な神では無かつた。又オデンの婦神

にフリツガと云ふその性嚴肅その知識神秀なる神女もあつたが、この女神も又エツダに於ては、そんなに重要な位を占めてゐなかつたのである。彼の悪神ロキは、一旦天國を追放されたが、その後善神バルヅルを殺して、此に従來此の世を統御してをつた善神の支配が全くその終を告げてしまつて、更らに他の神が來て、此世を新に治むる様になつたと云ふ神話に由つて、エツダに見えたゲルマン民族の宗教は、此にその終を告げて、基督教之れに代つて、彼れ等の信仰界を支配する様になつた。否、實にこの善神バルヅルが、悪神ロキの爲めに殺されたと云ふ神話は、恐くエツダの宗教が基督教の感化を蒙つた結果であらふ、それと云ふはこの思想の中には、善神の義死、世界の終末等、基督教の黙示録に云ふ様な思想の感化が、非常によく表はれてゐるかのことである。

第十章 基督教の發達 其二

以上略して基督教の發達上に影響した歐洲在來の哲學宗教の兩思想を述べたから、更にあとへ歸つて基督教思想の發達を述べようと思ふが、既に保羅に由つて基督教は一たび歐化し、約翰の福音書に由つて哲學化されて來たのである、かやうな工合に基督教は漸次歐羅巴の思想に接するに従つて次第に哲學風化せられてくるのであります、それと云ふのは猶太人は元來哲學的思想を缺いてをつた所の

人民でありましたからして、其土地に生れ出ました基督教も決して哲學的ではありませんでした、猶太人は昔その豫言者の時代から、ずうつとその後世に至る迄、決して哲學風な所はない、猶太人は悉皆宗教的であり、直覺的であつたです、それであるから、耶蘇の説法には、少しも哲學染みたる所は無い、釋迦の悟りと云ふも、是れ又普通の僧侶聲か思つてゐる様な、小六つかしい哲學ではない様である、否、なほ是れも、それよりずつと易簡直截の法門であつたらしいが、然し今日學者が釋迦の最も根本思想であるとして、一般に許してゐる、四諦、八聖道、十二因緣(三つて明には後に承す)などに表はれた思想を取つて、之れを考へて見ましても、若し之れを基督教の三福音書(三つて明には後に承す)の思想に比べてみれば、餘程哲學風の組織になつてをります、是れは元來印度のアルルヤ人種一般の性質として、哲學風であつたからでありませう、然るに耶蘇に至つては、元來非哲學風な猶太人の中に生れ、その非哲學風なる猶太人に教ふるつもりで、説かれた福音だから、少しも哲學じみた所はありませぬ、それは實に一種の實力あり、人を感動するに足る、訓誡と云ふの外はありませぬ、然るにその耶蘇の教が、段々歐羅巴の方へ傳へて行く様になりました、からは、元來希臘羅馬などの人の頭が、プラトーンやアリストテレスなど云ふ様な、哲學者の學說に慣れてをりまするから、とても易簡直截の福音では、なんだかもの足りなく、大學の學生が小學校のいろはをよそはる様で、麥飯を澤山に腹一杯食ひつけた田舎の百姓が、牛乳生鶏

卵の少量を飲食した様なもので、牛乳や生鶏卵の方が實際滋養分もあり、身体の營養になるかもしれないのだが、どうもこれでは腹がふくれないう羊ごた人が薄いと云つた様なもので、どうもやさしい耶穌の福音ではどうしても物足りない心地がせられると云ふ所から、基督教もだん々々哲學化せられて、初めて能く歐羅巴へ傳へられる様になるのは、自然の數であらう、其外猶太と歐羅巴とは、自ら周囲の事情も違ふからして、どうしても猶太に起つた基督教が、歐羅巴に道入るに及んでは土地入心に合つた様に變化しなければならぬ道理なのである、そこでそれやこれやの原因事情からして、段々と基督教も哲學化して來た、してこの傾向は既に約翰傳を書いた記者に出つても、明かに見えて居るが、その中で最も能く組織的に基督教の根本義に立ちながら、又能く基督教を當時の哲學と融合調和した人は、埃及のアレキサンダリアの學林にをつた、クレメンテ(三二〇頃没)及びオリゲネス(一八五—二五四)の二人の大學者であつた。

少し話があともどるが、先に言ふた通り、是れより先き希臘文明と埃及小亞細亞等の東洋各地との交渉關係が非常であつて、則ち紀元前四世紀の頃にアレキサンダリア大王が希臘に起つて盛に東洋波斯印度を初めとして諸國を征服し、一大世界的王國を建設しやうとされたが、その計畫は遂に十分成功しなかつた、然しその影響として、歐亞の交渉關係は次第に頻繁となり、その後歲月の推移と共に益々埃及

のアレキサンダリア府は東西文化の交通場となり、山河尙ほ存してその國既に亡びたる猶太人の如きも非常に多くこゝに流浪し移住し來り、希臘思想と猶太思想とは一大交渉を初める様になつて來たのである、そこで紀元前二百六十年頃には、クレキサン博士が、アポスタキオンと云ふ舊約全書の希臘語の翻譯が出来、さうしてをる中に、耶穌と同時代であつた猶太の哲學者、フィロソフの如きは、確に希臘哲學特に希臘の宗教哲學を風に影響されて、由來希臘の哲學者の慣用思想である、ロゴスなる者を己の哲學中に取り入れ、モルゼの宗教とプラトインの哲學とを一致調和せんと希望してをつたのである、彼の辯者述べた第四福音書の約翰傳に見えた、ロゴス論の如きは、又全くフィロソフなどが、希臘のロゴス思想と自家の哲學系統中に引入て來た風潮に影響されてをるのである、フィロソフの如きもこの時代思潮の影響を蒙つてをる様である、それで前に云つた通り、彼の約翰傳の記者に至つては最も明に希臘思想の影響が見えてをるが、爾來猶太希臘の思想界の交渉關係と云ふものは、非常に頻繁であつて、その兩思想の交互に感化融合せんとする有様は頗る甚く、それは彼の三、三世紀の交、埃及のアレキサンダリアの學校に居つた碩學者、クレキサン博士の兩人に於て、最もよく現れてをる。

そこでこの兩人の爲した所を考へてみるに、此兩人は聖書を解するに、單に文字句の末に拘泥せずして、所謂活眼を以て活書を讀む流義で、聖書の文字に表はれて

をる所のものに、その文字以上の深遠なる意味があるものとして、巧に自己の哲學思想を以て之れに當て釋め、文言は聖書の文言をその儘用ひたけれども、その文字の意味は當時の哲學思想で之れを解釋したのであります。かやうにして彼れ等は、當時極端に哲學思想に傾いておつて、遂に基督教の精神をも、哲學の風潮中に卷席じ去り、基督教の本義特色まで哲學でもつてこぼしてしまはんとしてをる傾きがありました。彼のクニシス學派や、或は又一も二もなく基督教の辯護にばかり苦勞して、あたまから九つさき、哲學など云ふことを顧みなかつた、護教家アポロジスツ杯の中間に立つて、能く基督教を歐羅巴の地に移植するに努めてをりました。さうして彼れ等は將來基督教を會の設立や、その教義の組織に與つて大功がありました。したがからして、クレメンスやオリゲネスは教會の父即ち教父と云ふ名稱を受けてをります。それでかやうにして、グノシス學派などの異端が起りました。そこで遂に教義問題の決定を促がすこと益々旺んなるの有様に立ち至りました。そこで遂に紀元三百二十四年に、コンスタンチヌス(三三七歿)大帝が政治上に於ては基督教を公許して、羅馬帝國の國教となされまます。大勢の馴致する所遂に又翌年即ち紀元三二五年に皇帝は詔敕を發して、小亞細亞のニカヤと云ふ所に基督教徒の大會議を開いて、基督教の教義を確定することになりました。此ニカヤ會議でアリウスとアタナシウスとの大爭論の結果、アタナシウスは父なる神と子なる神とは、畢

竟その本性を同うしてあるものであつて、決して二つでない、共に同一本質である。父なる神と子なる神との關係は、恰も太陽と太陽の光線との如きものである。神父と神子とは元と同質一體であるとかう論じて遂にアタナシウスの勝利に歸してアリウスの説は異端として排斥せられました。その後ちまた三八一年にコンスタンチノポリスで宗教會議が開かれて、神父と神子に聖靈を加はへて、此三者は同質一體であると云ふ教義を組織しました。是れが有名なる三位一體説の成り立ちである。それ柄して紀元四三一年と四四九年とに於て、前後二回エフェソに於てまた四五一年にはカルケドンで宗教會議を開いた結果、基督は人であると同時に神である、即ち基督の一身に於て神と人との兩性質が具つてあると云ふ神人説が決定し、尙ほ更に進んで斯かる神父と神子との救を何故に吾人々類は必要とするかと云ふ問題に移つて來て、遂に人性の何にもなるかを解決しなければならぬい様になつて來ましたから、こゝに有名なる教父アウグスチヌスなる者出て來りまして、人類に宿罪(原宿若くは遺傳罪とも云ふ)がある、と云ふと、之が救はるゝは全く神の御恵即ち神恩によると云ふとの、二大思想に由つて人性論に解決を與へたのである。そこで前の神父論即ち三位一體説と、基督は人であつて又神である、と云ふ、基督の神人論又は約言すれば基督論とは、主として東方教會即ち希臘教會に由つて論定せられ、さうしてその人性論の方は、西方教會即ち拉丁教會又は羅馬教

會でもつて、その解決をせられる様になつたのである、かやうにして、東西兩教會でもつて、夫々激烈なる討論の結果は、遂に基督教々會の正統的教義が出来上がったのである。

して政治上に於ては、コンスタンチヌ大帝以來、基督教は國教として非常な保護があつたから、理論的教義の上にも又實際の上からも、基督教は非常な盛運に向つたのである、論じて此に至りますれば、勢ひアウグスチヌスの神學思想を一言せねばならない運になりました、抑々アウレリウス、アグスチヌス(三五四—四三〇)はその初め、ローマと同じく、基督教を信ぜず、操行も亦修らなかつた所の人でありましたが、後ち當時の諸哲學に普く眼を曝らし、一時哲學に由つて安心立命せんと努めました、たけれども、意に満つる者がなくつて、遂にアムプロシウスと云ふ人に就て基督教の道を學び、此人から洗禮をも受くるに至つて、遂に立派な基督教信者となつたのであります、否、否、否、獨り基督教信者となつたのみならず、基督教々會中最も偉大なる教父となつたのであります、そこでアウグスチヌスの教説はかうである、彼の人類の始祖アダムは神が授けた自由を濫用して、神の命に背いて罪を犯しましたからして、一切の人類は皆なその始祖アダムより傳はつた遺傳罪を以て汚がされてをるものである、従つて吾人々類は自力をもつては、未來永久助かるの望あるものではない、それであるから、人類は基督に由つて救はれるより外かに途は無いのであ

る、吾人々類が救はるゝのは、一に神の他力に由つて定まるもので有つて、吾人々類の自力は是れに向つて何ん等の効果も無いものである、然るに吾人々類が救はるゝのは、一に基督を介して初めて之れを成遂し得るのであるが、その神の恵の行はれる所は、一に羅馬教會で有から、人類がその宿罪即ち遺傳罪を洗除せられるのは、一に洗禮を受けて教會に入り、教會内の一員となつて、初めてその原罪を免れることが出来るのである、それであるから、教會は吾人が吾人の救を得る爲めには、非常に必要なものであると云ふことになるのである、そこでアウグスチヌスの云ふ教會神權説は、實際上羅馬教會の發達の上に大影響を與へ、法王權の固定に向つては、實に有力なる武器を與へたものである、何んとなれば、吾人々類の救済に是非必要である教會の頭領は法王であつて、法王は神を此世に代表して無限の權力を得てをるからである、然るに斯くして法王權の隆盛となつたのは善かつたが、之れと共に段々弊害が出来て年を経るに従つて、彼の免罪符なるもの、賣買が初まり、羅馬教會に上金する、多少に由つて未來の賞罰に輕重があるし、救済の神恩に逢ふと逢はずとは、一に羅馬法王の命令に聽從して外形の作業をなすか、なさないかに由つて岐がるゝと云ふ様になつて參りましたから、却て當初アウグスチヌスが、人類は皆も自力にては助かることが出来ないもので、とは全く他力神恩によると云はれた、純他力の思想と矛盾撞着する様になつて來ました、そこで再ル、テール等が出て來ま

して、更らに却て根本的にアウグスチヌスの教旨に従ひまして、羅馬加特力教に反抗し以て新教即ちプロテスタントを唱へ出すやうになりました、それでありますからして、アウグスチヌスの教義に由つて羅馬教は隆盛の域に向ひ、さうして又その腐敗するや、アウグスチヌスの教旨に由つて新教を興し、以て打ち倒される様になつたのであります、然れば此邊の所を思へば、實に羅馬教會の運命の趨歸する有様は實に一奇と云はなければならぬのであります。

アウグスチヌスの力に由つて理論上教會の基礎が確立する様になつたのであります、が、この理論的基礎に立つて教會は更らに實際的方面にも其の勢力を普及する様になつたのであります、そこで又羅馬帝國は紀元四七六年には北方から攻め込んで來ました野蠻人の爲めに亡ぼされてしまひ、さしも一時ときめきました羅馬の大帝國も支離滅裂四分五裂と云ふ有様に陥つてしまひました、然し此時におさまして獨りこの間に處して、羅馬教會だけは依然昔時の舊觀を改めないと云ふ有様である、能く兵亂の災を免れて頓滅しなかつたのである、否、管に亡滅の災に罹らなかつたのみでなく、一旦武力で以て外形の上では羅馬を攻め亡しました北方の野蠻人まで遂に教會は返へし打ちに精神的に之れを征服してしまひまして、彼等野蠻人を悉皆基督教に改宗させてしまつたのであります、さうして更らに羅馬人の特長であつた律法主義と統一主義とを摸して教會組織を大成した、何んと

教會の精神的勢力は偉大なるものだつたてはありませぬか、尤も先是ウルフイラス(紀元三一三)生はゴッス人を改宗させて基督教徒となし、僧正レミキウスは四百九十六年にフランク王クロビヌに洗禮を施し、後ち又ウグスチヌスは英國人を基督教徒となし、(紀元五九七)ポニアキウス(七一八—七五五)は獨逸人を改宗させ、カールマルテルは七三二年に基督教徒の爲めに回々教の侵襲をツール、ポアチエーの野に喰ひ止め、その子ピピンまた七五三年に法王から即位の禮を舉行してもらつたのである、斯く帝王が基督教の爲めに働き或は法王より即位式を受けると云ふのは、是れは教會の權力の強大になつた有様を證明してをるのである、してこゝに云ひましたカール、マルテルがツール、ポアチエーの野に撃退したと云ふ所謂回々教徒なるものは果して何んであるか、吾人は亞刺比亞文明—科學哲學等の—が中古の世歐洲諸國に波及し、さうして彼の十字軍と云ふ宗教大戦争が基督教徒に由つて回々教徒に向けられたる信仰上の激争に外かならざることを思へば、吾人は回々教の何にもなるかを此に一瞥せざる可らざるのである。

第十一章 回々教の一瞥

モハメット教は申す迄もなく、ムハメッド即ちモハメッド(紀元五七—一六三)に由つて亞刺比亞の地に起されたセム民族の宗教である、之れを回々教と云ふのは

元と支那人の命名した所のものであつて、回教人即ち土耳其族の崇拜してをる宗教と云ふ意味であつて、是れは土耳其人がモハメッド教徒たるのを、支那人が見たからである。回教教徒は自らはその宗教をイスラミズム又はイスラム教と云ひ、基督教徒はモハメッド教と呼んでをる。蓋しモハメッド教と云ふのは其教祖の名前に因つて取つたので、僧日蓮の開いた宗旨を日蓮宗と云ふのと同じである。又之れをイスラミズムと云ふのは、能く神意に服従するの意味である。かやうに回教は第六世紀の頃モハメッドと云ふ偉人に由つて亞刺比亞の地に起つたのであるが、然しこゝで一考せねばならないことは、それは亞刺比亞の宗教はモハメッド以前には丸るで、何にも無かつたのかと云ふとさうではない。モハメッドが出て、回教を稱へ出す迄には、亞刺比亞には矢張り或る宗教があつて行れてをつたので、唯その宗教が進歩しない、野蠻未開の域を脱せぬ宗教であつたから、モハメッドがそれを改良したのに過ぎないのである。則ちモハメッドは耶蘇や釋迦と同じ様に、宗教の一大革新者であつたのである。唯その革新の工合がルーテルなどに比べて、偉大であつたから、後世釋迦や耶蘇やモハメッドと呼んで、一宗教の開祖と云ふ丈けの事で、釋迦でも耶蘇でもモハメッドでも決してその下地も何にもない所に、教から棒に一大新宗教を創設したと云ふ譯ではない。それは到底不可能の事である。それは到底何人も出来得可からざることであるのです。それであるから新宗教の開

祖と云ふのも、矢張規模の大なる改革者に過ぎないのである。さうすれば、モハメッド以前の亞刺比亞の宗教は、どんな有様であつたかと云ふと、それは申す迄もなく、亞刺比亞人がセム民族であるから、その宗教も又セム民族の宗教であつて、亞刺比亞の各種族々々は皆な夫れ々々、自己特有の神様を崇拜してをつたのである。然し是れ等の神々の性質は、先づ大體に於て殆んど能く似てをるのである。アルラト即ちアリラト(女主)とか、ツトツア(大有者)とか、マナト(運命)とか云ふ神々は皆な女神である。思ふに是れは太古の亞刺比亞の社會が、父長制度以前に於ける、母長制度の時代に、その一家の主長たる、母主の思想からして考へ出したものであらう。然れば以上の三女神を以て、唯一眞神アルラーの三子とする様になつたのは、餘程後のことであらう。その外太陽は女神シラムとして尊崇せられ、嵐の天はクツアー神として崇拜されてをる。アルラーはモハメッドの出てから後迄も、一大眞神として崇拜せられたるものであるが、元來アルラーと云ふのは我國の大國主の神とか、月讀命とか云ふ様な神の固有名ではなくつて、我が國の語で云へば、丁度唯一般に總じて神と云ふ言葉に當るので、亞刺比亞人に云はせれば、各種族々々の神は皆なアルラーなのである。そこでアルラーと云へば、甲とか乙とか云ふ各種族々々に、特有な神を離れて、何れの種族にも共通な、一つの神の様に聞へて、各種族全體に亘つてその人心を統一する爲めの、一つの目的物としては、アルラーは大變

都合のよい神であつたのである。こゝが則ち例のセム民族に固有な唯一神教的本性を、その宗教があらはしてをる所でありましやうかやうな工合にして、アルラーはヤーギーがイスラエル人に於ける、アッスールがアッシリア人に於けるが如き關係を有つて来るやうになりました。アルラーは早天に雨を降らせ、自然界、人事界の支配者となり、道徳上の統理者であつた。然しながらアルラーは前にも云つた様に何れかの個々具體的の神ではなくつて、何れの神にも通じて、唯神と云ふ様な、抽象的の性質のものであつたからして、イスラエル人やカナアン人の神の様に、それ程ひどい國民的の熱誠をもつた神ではなかつた。然し斯くアルラーが普遍的の性質ある一神であつたことが、モハメッドがアルラーを利用して、後來基督教にも拮抗する様な唯一神教を創立するに、非常に好都合となつたのである。

以上の神の外に古代の亞刺比亞人は、澤山の靈魄即ち精靈の存在を信じてをつた。是れ等の精靈即ちジンは、沙漠とかあればらやとか云ふ様な、人の住まない場所に多く出沒してをつて、人間に、徒をして疫病を送り、又は隱事を教へ、豫言者詩人に乗り移つるものであると信ぜられてをつた。是れ等の精靈は、動物の形を取つて現はれる殊に蛇の形になつて、現はれる。然し精靈は神の様に、色々宗教上の儀式に由つて崇拜されることはない、そこで是れ等の點など、色々考證した結果、ロバートソン、スミスと云ふ人は、亞刺比亞の宗教には、トテム崇拜の形跡が認められる

と云ふた。それと云ふのは、亞刺比亞には動物の名をつけてをる種族があり、英雄を葬つた墳墓と神の宮の位置とか、著しく密接してをるが如きことを考へ合はすとどうも亞刺比亞の宗教の起源は、トテム崇拜ではなかつたと思はれる節々が多くあるからのことである。

亞刺比亞人は天然の石の神聖なる者を以て神体として、之れに神が憑遷する所のものであるとして、尊崇してをることは、我が國の神道が神体として鏡を祀るに能く類してをる。然し石で神の像を刻んでそれを崇拜するのは、後世に起つたことである。其外稀れには、泉流樹木森林の如き、又神として崇拜されてをるのである。神の在ます場所の樹木を伐り、その所の鳥獸を獵り、生物を殺害することは嚴禁されてをる。神を祭るの儀式は色々あるが、或は神の像に接吻したり、或は神の像を撫でたり、口に祈を唱へて神殿を巡ぐつたり、神木に衣類や武器や、金銀珠玉を掛けて神を祭り、或は是れ等を神の洞窟に藏めて神を祭り、最後に人々相寄つて饗宴を開くのを常としてをります。この時屠つた所の犠牲の血を祭り、その肉は人々相集つてこれを食ふのである。斯くして神人の間の結約成りて神はその種族を特別に保護してくれるのである。殊に面白きは亞刺比亞人は水草を追つて移轉する遊牧民であるからその自己の初め祈つてをつた神を、その地方々に置きざりにして、所々に移住して歩くことである。然し人種が水草を追つて移轉して歩くと同じ様に、

元とあつた宗教は移動しない、信者は去つても宗教丈は元とあつた土地に残つてをる、従つて人種は甲の地を去るときには、自分が嘗て崇拜してをつた神を、その地に残し止めてをいて、獨り去つて乙の地に行く、さうすると乙地で又そこに、その前からあつた土着の神を崇拜するのである、此外亞刺比亞人は、全國を擧げて、一年に一度或る特別の神社へ巡禮してそこで神の御祭をして、諸國の人々が互に相寄り合ふのである、是れが爲め亞刺比亞人の宗教上の儀式は、全國一般共通のものとなつて、普遍的世界的の性質を帯びて來る様になる、メツカの如きは既にモハメッド以前から、亞刺比亞全體の宗教上の中心點となつてをつたのである。

かやうに亞刺比亞の宗教は、その初は他の國民の古代宗教と同じ、畢竟一種の多神教であつたが、紀元六世紀の頃には、既に基督教の禁欲的修道僧の宗風が、亞刺比亞に傳つて來て、當時既に從來亞刺比亞に傳つてをつた所の宗教では満足出來なくなつた人々が出來て來た、死後はどうなるものか、靈魂は不滅であらうか、どうであらうかと云ふ様な問題は、續々彼の腦中に湧いて來た、當時猶太教や基督教に山つて影響されて、是れ等の問題の解釋に心を悩ましてをつた所の人々を、ハニフと云つてをつた、ハニフとは求道者及び懺改者の義である、ハニフは中世紀基督教の禁欲僧と同じく非常に眞摯なる禁欲的の生涯を送り、多神を排して、唯一眞神の道を説き、神の裁判を信じてをつた、メツカ及メデナに於ても、是れ等のハニフは、その數

決して尠少でなかつた然し彼れ等は尙ほまだ、一つの團體即ち教團を造つたと云ふ譯けでもなく、又各人相共に協働して、布教に従事したと云ふてもなく、唯彼れ等は獨り自ら眞神の道を講じて、彼れ等は各自にその靈魂の救を求めてをつたのである、ハニフは實にモハメッド教の先驅をなしたのである、モハメッドが將に教へとする宗教道徳は、既に業にハニフの宗教中はその苞芽を認めることが出来るのである。

モハメッドは紀元五七〇年頃メツカに生れ、コライシユ族に屬してをる人である、モハメッドは尙ほその年若かりしとき、隊商に加つて、シリヤ、パレスチナの地方に旅行し、此所で猶太教徒や基督教徒の教風を、親く觀察することが出來た、モハメッドはメツカの或る、信心深きハニフから、宗教上の一大感化に接したときは、既に業に彼れは結婚してをつて、富有なる生活をしてをつたのである、實にモハメッドはその廿五歳の年を以てカヂヤと云ふ豪商の後家に愛されて之れと結婚し、兒童をも擧げてをつた、然しモハメッドは一度その深き宗教心に刺戟せられて振かへつて亞刺比亞從來の宗教を觀察し、その道徳を考へてみると、その腐敗老朽見ても嘔吐に堪へないと云ふ域にたち到つてをる、多神教は實にモハメッドをして不快の念に禁へざらしめたのである、殊に小兒殺の習慣の如きはモハメッドの、大に排斥した所のものである、そこで彼れは斷然ハニフの生活に一身を委ね、靈魂の救は

一に唯一眞神の道を奉じて、この唯一眞神に萬事己れの一身のことは御任せ申して初めて得られるのであると云ふことを大悟したのである。然して、はモハメツドが釋迦と同じ様で、モハメツドは一たび斯く大悟した上は、徒らに獨り自ら證悟の大道を樂んで、その法樂を他人に班たすには居られなくなつた。獨りぢつとして山中の洞窟に、靜座觀念のみしては居られない様になつたのである。時に偶々彼れは一夜メツカの聖山ローラの洞窟に於て、天使ガブリエルを夢み、汝は神の聖徒なりとの神の御告げに接したと云ふことを自覺したので、そこで唯一眞神の道を、他人に宣布したいと云ふ考が、非常に痛切になつて來た。時にモハメツドは其齡四十歳の時である。そこでモハメツドは、先づ自己の信ずる所を其親戚朋友の間に布教し初めたが、一人もそれを信ずる者はなかつた。然し一説にはモハメツドの妻子朋友の二三の人を感化したとも云ふが、俗てその後モハメツドは、自分の悟つた眞理をその同國人の間に宣布する様になつても、誰れ一人モハメツドの説を眞面目に受け容れるものなく、皆なモハメツドを以て、狂者となし、惡靈ジンが憑格てをると云つて、之れを馬鹿にした。そこでモハメツドは是れ等の輩を脅迫するに、神罰の的、踵を回さずして至るぞよと云ふことを以てしたから、國人は益々モハメツドに向つて惡感情を懷き、モハメツドはその反動として益々自己の信仰を確めると云ふ様になつたから、此に多少モハメツドの信仰の堅い所に感心して、その感化に

由つてモハメツドは信者の幾分かを得る様になつた。殊にその信者は、貧い者及び奴隸の輩に多かつた。然し乍ら名にし負ふメツカは、舊信仰の根據地であつて、こゝではモハメツドの新宗教は到底成功する見込が無つたから、彼は遂にメツカの地を捨て、メデナに赴き、こゝで一と幟舉げやうと試みました。尤もモハメツドの眞意は、決して自己の創立にかゝる新宗教を樹立しやうと、初めから目論だのではなかつて、猶太教徒基督教徒と同じく、彼等の祖先アブラハムの教へた唯一眞神の道を天下に稱道し様と云ふのである。然しその結果時勢の趨歸する所遂に一大新宗教を創立する様になつたのである。モハメツドがメツカからメデナに逃れたのは、彼が立宗開教の手初めてあつて、之れより活動の新舞臺は彼れの爲めに開かれ、回々教の創立は當にこの年に成つたと云つて決して差し支へないのであるから、モハメツドがメツカを去つてメデナに赴いた同年を、回々教徒はその紀元元年とするのである。即ち耶蘇紀元六二二年の六月二十八日であつた。之れを回教曆、若くはヘキラ(ヘジラ)曆と云ふ。ヘキラとは遁逃の意で、モハメツドがメツカからメデナに遁逃したと云ふ其遁逃の義である。モハメツドがメツカに居る間は、唯一のハニフ・アルラーの預言者として、宗教上の事柄を、宣傳弘通してをつたのに、過ぎなかつたのだが、彼れがメデナに遷つてからは、彼れは獨り宗教上の主長であつたのみでなく、又政治上の元首となつた。モハメツドをその頭領に戴いてをるイスラムの神教

政府は既にこの時に形成せられたのである。モハメドは政治上道徳上宗教上の元首であつた、その神制政府は軍隊組織であつて、その費用は人々の喜捨から成つてをるのである。こゝで力強い一種の神制政府が出来、モハメドの新宗教の基礎、全く此に成つたのであるから、かうなると云ふと回々教は、従来はその教友として遇してをつた猶太教徒を見ること、恰も仇敵の如しと云ふ有様になつて来た。蓋し商買身敵^{カハダ}とても云ふものでありましやうか、是れよりしてモハメドの事業は着々その功を奏して来て、彼れが世界史上に重きをなす様になつたのも、全く彼れがメツカを逃走した後であつたのである。

モハメドは一たびメヂナで以て自己の根據地を得てからと云ふものは、その教勢中々盛んなもので、遂にメツカに兵を送つて、之れを陥れるに至つたのである。然しメツカ府を征服してから、モハメドは回々教をして全世界の人々に信仰せしめんが爲めに、先づ従来亞刺比亞に行はれてをつた所の舊信仰と媾和し、カアバてふ黒石の崇拜とか諸國巡禮とか云ふことを認容し、嚴格なるアルラーの唯一神教とは到底調和し得可からざる諸種の儀式信仰を讓歩的に許容したのである。そこでモハメド教は暫時にして、亞刺比亞全國に廣まつてしまひ、モハメド教は亞刺比亞風の神制政治の基礎に立つた宗教の好標本として發達をした。然し回々教は眞の世界的宗教の發達史上には、左程貢獻する所はなかつたのは、疑ふ可らざる事實である。

回々教の聖典は無論クラン即ちコーランであるが、是れはモハメドの死後、初世紀の頃(モハメドの死後二十年頃とも云ふ)第三のカリフ(モハメド教の法主オットマン)が、モハメドの書記ツアイドをして、モハメドの教旨の、由來口誦の上^上に傳つてをつたのを、一とまとめにして、文字に綴らせたもので、その文は無論散文^上は如何にも乾燥無味であつて、創見とも見ゆる所は、殆んど皆無である。然し回々教徒はこのコーランに云つてある所は、初めてモハメドに由つて、世に傳へられたのであるけれども、その實無論神の眞語であつて、それがコーラン以前には、まだ文にものせられてなかつたのみに過ぎないのであると信じてをるのである。回々教の教義としては、コーランの外に、傳承信條であるソナナと云ふものが存してをる。是れは儀式の規定を書いた者であつて、モハメドは曾て自ら口に云つたこともなく、寧ろそんな秘怪を云ふことは、排斥してをつた所の奇蹟のことを説いてをるのである。こゝは傳承信條ソナナとコーランとの違ふ所である。

偕て今コーランに云つてある所に由つて、回々教の教理を考へてみるに、大凡左の六ヶ條に歸着するのである。これはモハメド自らの信條と見ても差し支へないものである。即ち回々教の教義の主なるものは、第一には唯一眞神の存在とマホメ

ツドが神の預言者たることを信ずること、但し之れに付け加はへてコーランの教
 権を信じ天使悪魔の存在を信じ靈魂の不滅及び蘇生を信じ善惡に對する神の末
 日審判を信ずるとは勿論である、第二に信仰文を讀誦し、第三に一日五回メツカの
 方に向つて祈禱すること、第四に斷食を實行すること、第五に施與を行ふこと、第六
 にメツカの巡拜を行ふことの六ヶ條である、其中殊に重大なる教義は、神の唯一な
 ることの信仰である、然しその唯一眞神と云つても、決して純正の道德心や深遠な
 る哲學思想を以て、考へ出した物ではなく、マホメツドの所謂神は人間と同じ形骸
 を有し、人間と同じ感情をもち、その怒に逢ふときは、實に恐る可く、賞罰は一に神の
 愛憎に由つて左右せられ、その勢方や強大無限、能く信者の絶對的服従を要求して
 止まざるものである、しかのみならず、モハメツドの所謂神なるものは、復仇の念盛
 んに、姦計に巧みなる、宛然東洋風の君主を見るの觀がある、既に回々教徒の奉ずる
 唯一眞神は、斯かる勝手氣儘の、壓制君主の如きものなる以上は、かゝる神に山つて
 一に自己の運命を左右せられつゝある回々教の信者たるもの、誰れか又一片疑懼
 の念なきを得んやである、そこで疑懼の情は、自己の運命の不定をなげく嘆息の聲
 となり、遂に回々教徒の人生觀は、人生多苦の悲觀となり、その宗教的行爲は、沈鬱な
 る禁欲主義となつて、現はれて來なければならぬのである、回々教徒の想像せる
 地獄の状態が如何にも殘忍なる、それと正反對に又その天國は、諸有快樂の具を以

て完備されてをると考へられてをるのである、回々教に於ては、所謂預言者なる者
 は、その數前後十二萬四千の多きに及んでをるが、その中七人丈け、ことに勝ぐれた
 預言者である、モムメツドは、又その中の無上殊勝、この止なきを、らい預言者として
 ある、然しながら猶太教のアブラハム、モイゼの如き、又耶穌の如き、等しく皆な之れ
 を、アルラーの預言者と見做すことを憚らないのである、然しモハメツドは、是れ等
 の預言者中、一番最高のものであるとして、あるから、耶穌は神の子であり神と畢竟
 同一である、と云ふ基督教の教義、耶穌神子説及び三位一體説は、モハメツドの極力
 排斥する所であつた、蓋しモハメツトは、耶穌が神の子でない、と云ふことを證明す
 るにかう云ふことを云つてをる、その云つてをることが面白い、則斯うて、耶穌は神
 の子でない、なぜなれば、神には子のない筈だ、蓋し神は元來配偶者をもたないては
 ないかと云ふてをる、何んと朴素的思想ではないか。
 之れを要するに、コーランの教理中、その開始特見にかゝるものは、モハメツドを以
 て、神の降せる一大豫言と見る考への外、一も新らしい思想は見えないのである、然
 し又その深遠なる開始特見のない所が、イスラムの極通俗的であつて、早く一般人
 民の間に、その布教の功を奏するに至つた所以であらう、殊に回々教は、佛教基督教
 と同く、その教主を以て、人間以上の位置にあがめ奉つて、その人格を崇拜したのは
 又是れ等の三宗教が、夙に人心の感化に、大に與つて力あつた所以である、然しなが

ら回々教はその精神一に亞刺比亞の國粹てふことを以て始終一貫してをつて、まだ國民的臭味を脱して居ないかの宗教戰爭を以て信者が神に對する務とするが如き回々教は確に半開の遊牧民たる亞刺比亞人には最も能く適した宗教であらうが、世界萬國の人民に向つては、寧ろ思想の進化を抑制して、世界人文の進歩の發達を害することも補助することはないのである。回々教は神制政治の最も能くその形を發達させたものであらうけれども、世界的宗教としては、その發達は確に佛教や基督教には及ばないのである。それであるから、佛教や基督教が、世界的宗教と云はるゝと同じ意味でもつて、回々教を世界的宗教と云ふことは出來ん。畢竟回々教は猶太のメシアス統治の天下てふ思想を、亞刺比亞風に轉化して考へたに過ぎないものと見るとが出來やう。彼の神の觀念の如きも基督教では神人の關係を父子の關係と見るが回々教で之れを主人と奴隸の關係と見てをる、それであるから佛徳の上から云つても回々教は猶太教と同じ様に半倫理的宗教であつて、決して道教や基督教の様に純倫理的宗教にはまだなつてをらないのである。彼の教主モハメッド自ら前後の九人の妻を送迎し、尙足らずして同時に多くの妾を置いた如き一夫婦多妻を禁じなかつたのみならず、寧ろ之れを公許した如き皆な是れ道德的に完全な發達を遂げた宗教とは云へないのである。紀元六三二年にモハメットの死んだ後、イスラムの教理に就いては、多少の變遷は

免れなかつた。即ち回々教の中に於て、その所謂自由思想家と、正統的護教派との二派が分かれ、自由思想家は希臘哲學の武器を藉りて、イスラム教の説く所の神の觀念を高尚にしやうと計るじ、正統的護教派は、成る可く回々教の本旨に背かない様に努めて、コーランを解釋した、アルアシアリ(紀元九四一歿)の如きは、護教家の巨魁である。回々教は又波斯の地に遷入つてから、大變形を蒙つて神秘的となり、スフィズムと云ふ形になつて現れた、スフィズムとは羊の毛皮を被つた禁欲者乞丐徒の義である字のスフィスから起つたので、スフィズムは新プラトイン學派の哲學を藉りて、その分出論(哲學史要五七頁を見られよ)に由つて、神と世界との關係を解釋し、禁欲主義の實行を力めた、デエラレデン、ルミ(紀元一二五二歿)の如きは、その主なる者である。

モハメッドは回々教が先づこれでは亞刺比亞の宗教となつたと云ふ位に、廣まつた時に不幸病に罹つて死んだ、即ち紀元六三二年六月八日である。是れより後代々のカリフ(繼承者又は代理者の義)は、帝王と法王とを兼ねたるものであつて、カリフはモハメットの遺言を守り、その法燈を受け繼いで劍と火とを以つて回々教の弘通に盡力した。そこでモハメットの義父アブ、ベクルとオマールとの二カリフの時、シリア、アンチオク、アレキサンドリア、エルサレムを陥ぬれ、コンスタンチノポリ

スを圍み、紀元七〇〇年頃には、北方亞弗利加を征服し、歐羅巴に渡つては、西班牙を滅ぼし、その勢將に全歐を卷席せんとする有様であつたが、遂に紀元七三二年には、ツールとポアチエーの戦でもつて、カール、マルテルの爲めに、大敗北を取つた。さうして是が爲め回教は、歐洲全土を裁定するとは出来なかつたが、東方全波斯と印度の西部とを略して、土耳其領を占有し、支那にその教陣を張り、宋明の間紀元一〇〇〇一六〇〇には、非常なる勢力を成じ、現今尙ほ盛んである。印度に於ては回教は十一世紀以後至大なる勢力を有し、佛教の遺物及び印度教を迫害し、勢力頗る驚く可きものがある。十九世紀には回教の新派ゾビリス印度に盛んに行はれてをる。然し又一方ではカリフの家系相續の爲めに、絶えず内亂が起り、バグダット(チグリス河畔)のカリフ(紀元七五〇)と、コルドブ(西班牙)のカリフ(紀元七五六)との兩家に分がるゝ様になつて、權力は政治上には追々少くなつたが、元來亞刺比亞人は獨りその回教を以て宗教を、世界に紹介したのみならず、彼の歐洲中世紀暗黒の天地に哲學科學美術建築等の亞刺比亞文明の光明を以て、世界の人文史上に一大貢獻をなしたことは又争ふ可らざる事實である。さうして紀元九世紀から十一世紀迄はバグダットとコルドブとは、其當時文明の中心であつた。して又コルドブの帝國は、紀元一〇三一年に瓦解し、バグダットの方は、一二五一年に蒙古人の爲めに滅ぼされたが、然しモハメッド教はこゝに滅盡に歸してしまはないで、今でも二億の信

者を有し、その教區は土耳其を初めとして、北方亞弗利加より印度支那に迄及んでをる。さうしてこの亞刺比亞文明の開拓者弘通者たるこの一大宗教も、その淵源を探ぐれば、一にモハメットが草莽より起つて、赤手亞刺比亞の宗教を改革したのに基するのであるからして、みれば、モハメットの功績も亦大なりと云はねばならぬのである。

第十一章 基督教の發達 其三

回教の爲めに一たび窮狀に陥らんとした所の基督教も、カール、マルテルの力能く之れを救ひ、其の後四世紀の歲月をへ羅馬教會の發達は能く再び十字軍てふ微腐の師を起すを得るに至つた。又以て教會の勢力扶殖の大なるを知る可きである。然しながら今斯がる盛んなる勢力を得て來ました教會も、之れをその淵源に立ち歸つて調べて見ますと、實に微々たるものでありまして、その初めは殆んど教會といふ様な形もなかつた位のものであります。そこでこの教會といふのは、その初めは申す迄もなく、佛教の僧伽の起りと同じく常に耶蘇の側に附き隨つてをりました。使徒がら成り立つてをつたので、爾來基督教の信者が互に團體を組んで耶蘇の教へられた教會を實行してをりましたのが、則ち基督教を會の起源であります。然るに教會の信者が段々と多數になつて參りました。従つてそを取り締る幹事と云ふ

機なるものが必要になり、その幹事は教會員の中で年長者を以て之れに充てると云ふ機本有様でありましたが、基督教は三百二十四年コンスタンチヌス大帝の詔に由つて公許せられたりしてからは、教役者の多くを要して来て、こゝから遂に長老、監督、宗長など、云々者が出来て参たのであります。加特力教の中には、捨家棄慾を尊ぶ禁欲主義が行はれてをりましたが、その家を捨て財産を棄て、乞食是れ事とする、と云ふとは取りも直さず自ら繫累を絶つて、教會に盡くさうと云ふ考へから起つたので、斯かる信者の力に由つて教會は段々と熾んになつて参へるのであります。且つ又段々教會が整頓して参りましたのは、彼の理論の上では基督教が希臘哲學者などから攻撃されました結果、教會の理論上の基礎を固めるに、教義の組織が必要であるが如く、又教會の實際上の勢力を扶殖する爲めには、教會の役員所謂教役者が必要であると云ふことが分り、この必要からしても、遂に教會組織が完成さるゝ様になつたのであります。さうして遂に監督、大監督、宗長など云ふ教役者が、追々勢力を得る様になつて参りましたのですが、基督教々會の組織は、當時羅馬大帝國の政治上の區分に從つて、形成せられたものでありますから、して當時羅馬、アンチオク、エフェソス、アレキサンドリア、コンスタンチヌポリス等、大都會の地には、皆な宗長がつて、その下にある地方々々の教會を總べく、つて、宗教正三方の旗頭となつてをりました。然るに羅馬府は當時世界に於ける政治上の中心點で

ありましたので、すから羅馬の宗長は特に自ら他の諸宗長を凌いで宗教の勢力を獨り掌握する様になりまして、遂に羅馬法王なるものが發生し來る様になりました。法王制度は六世紀グレゴリウス一世に初る。羅馬教會はペテロの建てた教會である。従つてその教會の首長を勤めてをる羅馬法王は、獨り彼の耶蘇が天國の鍵を附屬し基督教々會の設立を命じたと云ふ、耶蘇の唯一最高の直弟ペテロの相續者である譯である。従つて羅馬法王は基督の代理者であると云ふ言ひ前を以てとう々々獨り宗教界の大勢力を掌握する様になつて來ました。そこからは法王に無限の勢力がついて來ました。かう云ふ風に羅馬の二僧正が獨り秀て、教會の權力を縦にする様になりました。から、コンスタンチヌポリスの宗長は大に之れを心に快しとしませんでした。九世紀及び十一世紀に兩度大争議を生じましたが、遂に一〇五四年レオ九世の時希臘教は羅馬教と斷然手を絶つて至り、此に自ら獨立の教會となりました。然しながら羅馬教會の方は法王を中心として愈々益々隆盛の域に達しました。彼のグレゴリウス七世(一〇七三—一〇八五)法王の時羅馬教會は赫々の名聲を輝すの初を爲し、インイクエンチウス三世(一一九八—一二二六)法王に半ばし、ニファキウス八世(一二九四—一三三〇)法王に終りました。それでありながら法王にたび起つて天下に號令を下しますれば、上は王侯將相より下は兒童婦女子に至るまで皆な其命に奔らざる者なしと云ふ有様になつた。彼の四次教の手から